

令和 6 年度
先進校等調査研究事業
派遣研修報告書

日立市教育研究会

令和6年度先進校等調査研究事業の派遣報告書の発行にあたって

日立市教育研究会長 於曾能 弘樹

日立市教育研究会は、会員の資質・能力の向上を図り、本市教育の振興を目指して、各事業並びに専門部の研修を行ってきました。その中でも、「先進校等調査研究事業」は、創意を生かした特色ある教育活動の充実のために、先進校等の教育実践の状況を研修視察し、よりよい取り組みを所属校の教育活動に取り入れたり、新しい指導法を導入したりと、とても実効性の高い研修です。

昨年度に引き続き、令和6年度も本事業における研修補助費の予算を増額して、先進校への派遣人数枠を増やしました。本年度は、各学校から74名、教育研究会の専門部から11名、合計85名の会員の先生方がこの研修に参加されました。派遣された先生方の研修内容の特徴を見ると、「個別最適な学び」「協働的な学び」「自己実現」「ICT活用」「主体的・対話的で深い学び」「道德教育の充実」などのキーワードが報告書に並んでおり、これからの教育を担う先生方の求めるものが、ここに反映されているように感じました。

「未来を拓く人づくり」の具現化を図り、子どもたちが変化の激しい社会を生き抜き、豊かな人生を送るために必要な「生きる力」を育むことが、我々教師の重要な役割です。その役割を果たすためには、教師自身が研修意欲を向上させ、「新たな教師の学びの姿」を意識することが大切です。今回、この研修で調査研究に臨まれた先生方にとっては、自身のキャリアアップになったことと思います。さらに、学んだことや得られた情報を、自分だけの財産にせず、自校や市内全体にも広めていただけることを願っています。そのことが、日立市の教育水準の向上につながるとともに、本事業の大きなねらいの達成になります。是非よろしくお願いいたします。

多くの会員の皆様に、この報告書を読んでいただき、各学校や専門部での研修会や協議会等で利用するなど、よりよい活用を図っていただきたいと思います。そして、研修成果を本市教育に関わる教職員全員で共有し、「すべては子どもたちのために」という合い言葉の下、力を合わせて、未来を生き抜く子どもたちの育ちを支えていきましょう。

結びになりますが、本事業の推進に当たり、派遣する会員を快くご推薦いただいた校長先生方、所属校の会員の皆様、そして研修体制を強く後押ししてくださいました日立市教育委員会の皆様に深く感謝申し上げます。

また、先進校に研修視察に行かれた先生方、大変お忙しいところ、丁寧に報告書をまとめてくださりまして、ありがとうございました。今後の益々のご活躍をお祈り申し上げます。

令和 6 年度 先進校等調査研究授業 派遣研修報告書・目次

令和 6 年度 先進校等調査研究事業に係る派遣要項 …………… 1 ～ 2 頁

令和 6 年度 先進校等調査研究事業に係る派遣研修報告書…………… 3 ～ 170 頁

1. 各学校からの推薦〈派遣者一覧及び研修報告書掲載頁〉

No.	学校名	派遣者	研修テーマ等	派遣先	頁
1	助川小	齋藤 怜太	チーム助川による生徒指導・支援体制づくりによる頼もしい児童の育成	横浜市立白幡小学校	3
		大田 真知子	自分の考えをもち共に学び合う児童の育成 ～読む力を高める国語科の授業づくりをとおして～	習志野市立大久保小学校	5
2	会瀬小	澤畠 充子	互いに認め合い、生き生きと学ぶ子どもの育成	千葉市立あやめ台小学校	7
		橋田 裕隆	「言語能力」の育成を目指す国語科指導法の研究 －「個別最適な学び」と「協働的な学び」を基盤とする授業づくり－	中野区立教育センター	9
3	宮田小	榊 美紀	『漸進する学び』 ～大切な要素「教材」「教師の関わり」「土台風土」～	埼玉大学教育学部 附属小学校	11
		山岸 冴綺	道德教育のもとに立ってこの一点に迫るを考える －内容項目を手掛かりに、子どもと共に人間のよさを理に立って 考え、情にまで深めるために－	筑波大学附属小学校	13
4	滑川小	安部 美穂子	「言語能力」の育成を目指す国語科指導法の研究 －「個別最適な学び」と「協働的な学び」を基盤とする授業づくり	中野区立教育センター	15
		丹 郁也	『漸進する学び』（2年次） ～大切な要素「教材」「教師の関わり」「土台風土」～	埼玉大学教育学部 附属小学校	17
5	仲町小	柏原 健人	自ら学びを切り拓く ～自ら学びを切り拓く姿を実現する授業とは？～	宮城教育大学附属小学校	19
6	中小路小	大竹 利奈	Inspire!「使える」にシフトする英語教育の推進！ ～主体的に学び、楽しみ、発信し、仲間と深め合う～	袖ヶ浦市立昭和小学校	21
		赤津 彩里奈	性に関する個別指導を考える	宇都宮大学峰キャンパス	23
7	大久保小	奥村 仁史	自己実現と共生を軸に据えた教育課程の創造 ～生活に生きる力の育成を目指した授業デザイン～	横浜国立大学教育学部 附属鎌倉小中学校	25
8	河原子小	北村 政弘	今獲得させたい運動技能とその指導	筑波大学附属小学校	27
9	成沢小	中野 里香	違いを編む『知性』第1年次 －「違いを編む『知性』」とは－	筑波大学附属小学校	29
		中野 真樹	その子らしく学ぶ	静岡大学教育学部 附属静岡小学校	31
10	諏訪小	堀口 航	2040年に働くための学びのコンテンツ	東京富士大学	33
		向井 裕子	豊かな言語活動を通して児童が主体的にコミュニケーションを 図ろうとする授業を作る、「英語を教える」から「英語で育てる」へ	ELEC 一般財団法人英 語教育協議会	35
11	水木小	新橋 健	「漸進する学び」 ～大切な要素「教材」「教師の関わり」「土台風土」～	埼玉大学教育学部 附属小学校	37
		高橋 有里	自己実現と共生を軸に据えた教育課程の創造 ～生活に生きる力の育成を目指した授業デザイン～	横浜国立大学教育学部 附属鎌倉小学校 ・附属鎌倉中学校	39
12	大みか小	水出 智美	本質に導く授業力 －多様な学びが求められる今、教師の授業力を問う－	筑波大学附属小学校	41
		須藤 貴憲	探求と対話を深めるNIE ～デジタル・多様性社会の学びに生かす～	京都経済センター、 ロームシアター京都	43
13	大沼小	澤畑 綾子	道德教育	筑波大附属小学校	45
		峯 丈晴	体育科（実技研修 ベースボール型・ゴール型）	エデュスポ！～教員の ための体育授業研究会 ～ 会場：東京ドーム	47

14	金沢小	萩谷 勇太	主体的・対話的で深い学びに向けた体育指導の在り方	かすみがうら市立下稲吉小学校	49
		中島 大堯	Next GIGA ～創造性を育む ICT を活用した新しい時代の教育を目指して～	港区立小中一貫教育校 赤坂学園赤坂中学校	51
15	塙山小	矢部 寿基	「独創力」を発揮する子供 ～授業研究を起点とした教育課程の編成～	新潟大学附属新潟小学校	53
17	田尻小	木脇 野々香	「自己実現と共生を軸に据えた教育課程の創造」 ～生活に生きる力の育成を目指した授業デザイン～	横浜国立大学教育学部 附属鎌倉小中学校	55
		永井 基子	自律した学習者を育てる	秋田大学教育文化学部 附属小学校	57
16	油縄子小	檜村 沙希	学びをあむ —「てつがく創造活動」を中核とする教育課程の開発—	お茶の水女子大学 附属小学校	59
		遊佐 裕子	学びの文脈をつくる ～子どもがつくる単元「Re-WISH プラン」～	茨城大学教育学部 附属小学校	61
18	日高小	舟橋 隆英	探究し協創するコミュニティ ～共に学びを拓くカリキュラムを創る～	福井大学教育学部 附属幼稚園・ 義務教育学校	63
		織笠 愛子	自分の成長を確かめながら意欲的に学び続ける子の育成 ～『一人ひとりが探究し、変容や成長する姿』を大切に した生活科の授業づくり 『その子なりの納得』を大切に した社会科の授業づくり～	横浜国立大学教育学部 附属山元小学校	65
19	豊浦小	鈴木 香織	教科教育における「個別最適な学び」のあり方について考えよう！	東京学芸大学 附属小金井小学校	67
		車 拓弥	教科教育における「個別最適な学び」のあり方について考えよう	東京学芸大学 附属小金井小学校	69
20	久慈小	平山 弘幸	授業×DX、研修×DX、校務×DX、生成 AI 活用	岩沼市立岩沼南小学校	71
		柴田 颯人	「学びを創る」 ～「個で追求する力」を育む授業の創造～（第3年次）	郡山市立金透小学校	73
21	坂本東小	中原 康浩	令和に生かす次世代型の道徳授業をつくる	東京学芸大学 南講義棟 S 410 教室	75
		猪狩 昌行	「子どもが没頭する授業」	千葉大学教育学部 附属小学校	77
22	櫛形小	赤星 優貴	自己実現と共生を軸に捉えた教育課程の創造 ～生活に生きる力の育成を目指した授業デザイン～	横浜国立大学教育学部 附属鎌倉小学校・鎌倉 中学校	79
		伊藤 瑠那	毎年度研究発表（小中連携や教科の専門性を生かした教育）を実施しているが、詳細は9月にHPにて公開予定。公開後記載する。	大洗町立南小学校	81
23	山部小	市川 恵	道徳教育の充実、人権意識の向上について	筑波大学附属小学校	83
		萩谷 宏史	学校事務における学校運営への参画及び共同実施について	埼玉県埼玉会館ホール	85
24	助川中	平間 一輝	多様な実践から考える個別最適な学び ～学習者の視点と授業者の視点～	千葉大学教育学部 附属中学校	87
		木名瀬 遼	繋いでいくもの、創り上げていくもの	明星学園中学校	89
25	平沢中	久保木 愛絵	生活や技術を工夫し創造する実践的な態度の育成	我孫子市立我孫子中学校	91
26	駒王中	大和田 祐輝	数学科教員研修会『教材開発ワークショップ』	筑波大学附属中学校	93
		粕谷 みのり	国語科における教科教室型を生かした協同的な学習の方法	大洗町立南中学校	95
27	滑川中	谷田部 千加子	英語科指導技術の向上	中野区立中野東中学校	97
		梶山 璃奈	音とつながる 心がつながる 学びがつながる	旭川市大雪クリスタル ホール	99

28	多賀中	米山 恵利	第75回関東甲信越静学校保健大会 一人一人のウェルビーイングの実現に向けた豊かで健やかな心身の育成	ビジョンセンター西新宿	101
		小泉 さくら	全教科で「単元内自由進度学習」の実践 ICTの効果的な活用による、個別最適な学びと協働的な学びの一体化の実現	須坂市立東中学校	103
29	大久保中	田所 柊吾	近現代史を通じて学習する公民的分野	明星学園小学校・中学校	105
		今関 智大	これからの「学校」のあるべき姿を追求するⅤ ～主体的に学習に取り組む態度の指導と評価～	横浜国立大学教育学部 附属横浜中学校	107
30	河原子中	鈴木 拓也	授業改善を通して問題解決能力を育て、生徒の学びの自立を図る	千葉県立花見川中学校	109
31	泉丘中	浅見 紀央	NISE で広げよう特別支援教育の環	国立特別支援教育総合 研究所	111
		加藤 将	「未来社会を生き抜くための資質・能力を育む技術・家庭科教育」 ～創造的な問題解決の実践を通して～	山形テルサ 山形市立第三中学校	113
32	台原中	五十嵐 安衣	子どもたちのよりよい育ちのために保護者を支えよう	星美学園短期大学	115
		関矢 宏樹	保険のカリキュラムの現状と課題	明星学園小学校・中学校	117
33	日高中	佐川 晋一	よりよい生き方を探究する生徒の育成	宮城教育大学附属中学校	119
		星 健翔	主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善	福島大学附属中学校	121
34	豊浦中	三戸 雄太	自他を大切にすることを育む道德教育の充実 ～学びのつながりを感じ、自己の考え深められる授業づくりを通して～	川崎市立渡田中学校	123
		畠山 美穂	学習の基盤となる資質・能力を育成していく新教科 「小学校情報科」の構築	宮城教育大学附属小学校	125
35	久慈中	前野 啓太	これからの「学校」のあるべき姿を追求するⅤ	横浜国立大学教育学部 附属横浜中学校	127
		木名瀬 聡	これからの「学校」のあるべき姿を追求するⅤ	横浜国立大学教育学部 附属横浜中学校	129
36	坂本中	安藤 啓太	自他を大切にすることを育む道德教育の充実 ～学びにつながりを感じ、自己の考えを深められる授業づくりを通して～	川崎市立渡田中学校	131
		大森 美波	てんかんに対する理解を深め、対応を検討する	イイノホール	133
37	中里小中	和田 留美子	自ら学びを切り拓く ～各教科等における探究の学び～	宮城教育大学附属小学校	135
		鈴木 琢朗	繋いでいくもの、創りあげていくもの	私立明星学園小学校・ 中学校	137
38	十王中	赤津 聡美	「誰一人取り残さない授業づくり」 －対話的な学び・協働的な学びを通した Well Being－	静岡県下田市立下田中 学校	139
		渡邊 了	「自ら学び、考え、表現できる生徒の育成」 －生徒に委ね支える授業づくりを通して－	気仙沼市立津谷中学校	141
39	日立特支	古屋 翠	令和の日本型学校教育を踏まえた特別支援教育を目指して	千葉大学教育学部 附属特別支援学校	143
		田丸 彩沙	児童生徒の確かな学びを目指した授業づくり	埼玉大学教育学部 附属特別支援学校	145
40	附属中	沼田 拓	主体的・対話的で深い学びを通して、生涯にわたって 豊かなスポーツライフを実現する資質、能力、態度の育成	群馬県総合教育センター	147
		平澤 涼	豊かな言語生活を拓く国語教育の創造 ～学び手の問いが育つ単元学習の開発～	筑波大学附属小学校	148

2. 研究部〈教科・領域・特別支援〉からの推薦〈派遣者一覧及び研修報告書掲載頁〉

No.	学校名	派遣者	研究部	研修テーマ等	派遣先	頁
4	久慈中	柏原 亮輔	算 数 数 学	これからの「学校」のあるべき姿を追求するⅤ ～主体的に学習に取り組む態度の指導と評価～	横浜国立大学教育学部附属横浜中学校	149
6	滑川中	小澤 哲子	生活科、総合的な学習の時間研究部	つなぐ・いかす・深める ～ワクワクする本物の学びを目指して～	熊谷市立新堀小学校	151
7	宮田小	瀧澤 そら	音 楽	自己実現と共生を軸に据えた教育課程の創造 ～生活に生きる力の育成を目指した授業デザイン～	横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校	153
9	大久保中	谷内 里穂	体 育 保健体育	これからの「学校」のあるべき姿を追求するⅤ	横浜国立大学教育学部附属横浜中学校	155
10	多賀中	小堀 健史	家 庭 技術・家庭	生活や技術を工夫し創造する実践的な態度の育成 ～主体的・対話的で深い学びを通して～	我孫子市立我孫子中学校	157
11	台原中	立川 恵美	英 語	Inspire!「使える」にシフトする英語教育の推進 ～主体的に学び、楽しみ、発信し、仲間と深め合う授業の創造～	木更津市立清川中学校	159
12	日高小	菊地 陽子	道 徳	共によりよく生きる児童を育む道德教育 ～自己の生き方についての考え方を深める道德科の指導の充実～	台東区立根岸小学校	161
13	駒王中	木村 星斗	特別活動	生徒が主体となり、一人一人が輝ける文化祭の運営と実践	取手市立取手第一中学校	163
15	久慈小	石井 容子	特別支援	新しい時代の教育を創ろう！ ～一人一人が豊かに生きるために～	千葉市民会館ホール 千葉市民会館会議室	165
18	大久保小	本田 江利香	学校事務	子どもの豊かな育ちを支援する学校事務	埼玉会館大ホール	167
21	泉丘中	片寄 翔大	学校健康	一人一人のウェルビーイングの実現に向けた 豊かで健やかな心身の育成	ビジョンセンター西新宿	169

令和6年度 県外教育事情調査派遣・特別支援教育理解啓発のための研修派遣について

令和6年度 先進校等調査研究事業要項

日立市教育研究会

1 趣 旨

創意を生かした特色ある教育活動を充実するため、先進校等の教育実践の状況調査をし、本市研究の研究推進に資すると共に、所属校の教育活動の改善に役立てる。

2 派遣対象者

- (1) 各小・中・義務教育学校・特別支援学校長及び県立日立第一高等学校附属中学校長が所属職員の中から推薦した者
- (2) 本教育研究会の専門部長が部員の中から推薦した者

3 派遣の方法

- (1) 市内各小・中・義務教育学校・特別支援学校
 - ・校長が、所属職員の中から2名推薦する。
 - ※若手（新採等を除く）、中堅、学校課題研主任等の中から派遣する。
 - ※小規模校等2名の推薦が難しい学校は、副会長に報告し協議の上1名でもよいこととする。
- (2) 教育研究会の専門部
 - ・特に派遣研修の必要を認める場合のみ、専門部長が部員の中から1名推薦する。

(3) 派遣計画

① 派遣者数

【令和4年度】①A：16名 B：13名 D：6名・・・計 35名(BとCが隔年)
【令和5年度】②A：28名 B：27名 C：22名・・・計 77名(全学校、全専門部から派遣)
【令和6年度】(1)：最大80名 (2)最大22名・・・計 最大102名 (上記3(1)(2)の条件による)

※令和4年度までは会員数の数によりA・B・Cに区分し、毎年1名派遣のA16校と、隔年で1名派遣のB13校・C11校と、教育研究会Dから6～7名で実施していた。

※令和5年度は、研修補助費が大幅に増額されたため、全77名の派遣となった。

② 留意点

- ・派遣者の推薦に当たっては、自校の学校課題究明のためにリーダー的役割を期待する者、または各専門部においてリーダー的役割を期待する者の中から選出する。
 - ・専門部からの推薦については、専門部で派遣希望先（専門部の事業の参考となる研修会や関ブロ等の事前調査 等）を選定し事務局に報告する。
 - ・派遣者には、教育論文への応募表等を勧める。
- ※令和6年度についても、オンラインでの研究会参加についても可能とする。その他、参加形態にかかる質問等があれば、研究会として判断する。

4 予 算

- (1) 経費は、本会予算「研修補助費」の県外派遣研修費及び教職員研修派遣を充当する。
- (2) 派遣者 1 人当たりの経費は、15,000 円を上限とし、不足額が出た場合は、各学校で対応する。
(例：市配当予算の学校課題研究事業補助金等で充当する等)
- (3) 予算額内（15,000 円以内）であれば、複数回の派遣も可。
- (4) 研修補助費(15,000 円)について監査が入る可能性を考慮し、派遣者は使途項目・費用がわかる領収書等を保管しておく。(後日指導課と協議して詳細を連絡する)
- (5) 出張旅費は、「別途支給扱い」とし、各学校の県配当一般旅費からは支給しない。

5 派遣の実施期間

趣旨に示したとおり、各学校の課題究明及び各専門部の研究推進に資することを実現するため、できるだけ早い時期に調査研究を実施する。(遅くとも 2 学期中に終了すること)

6 派遣先の選定及び派遣依頼

- (1) 校長及び専門部長は、派遣者を決定し報告する。
- (2) 先進校の選定は派遣者が校長（専門部長）と相談の上、決定する。(調査研究の主題に合ったものを選定するよう校長及び専門部長が指導)
- (3) 校長及び専門部長は、派遣先の決定後、派遣先決定報告書（様式 1）により、速やかに事務局に報告する。
- (4) 研究発表会ではなく、派遣者が単独で先進校を視察する場合、校長（専門部長）が（様式 2）「先進校等調査研究のための職員の派遣について(依頼)」を派遣先の校長宛に送付する。
また、視察終了後、校長及び専門部長は、派遣先校長に礼状（様式 3）を送付する。

7 調査研究の報告

- (1) 派遣者は、報告書（様式 4）を校長及び専門部長並びに事務局に各 1 部提出する。
※前記 2 (1) の派遣者（各学校よりの推薦者）・・・校長・事務局に提出
※前記 2 (2) の推薦者（各専門部よりの推薦者）・・・校長・専門部長・事務局に提出
- (2) 事務局は報告書を取りまとめ、関係機関等（市教委 2 部・県北教育事務所 2 部）へ送付する。
- (3) 報告書は、教育研究会 H P ・ C 4 t h にデータをアップし、全教職員が閲覧できるようにする。
- (4) 各学校においては、校内研修として必ず調査研究の報告会を実施する。
- (5) 各専門部においては、専門部研修会(オンラインや書面開催)等による調査研究の報告の機会を設ける。
- (6) 派遣者は、本会の会報紙等をとおして文書報告をする。

8 備 考

- (1) 各専門部長からの推薦者については、所属する校長の承諾を得る。
- (2) 派遣に係る必要経費の支出証明（領収書等）を保管する。（事務局）

- 1 派遣期日 令和6年8月10日（土）
- 2 派遣先 学校名（会場名）筑波大学附属小学校
所在地 〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1
<http://www.elementary-s.tsukuba.ac.jp/>
- 3 研修内容
第87回 国語教育全国大会
研究主題 豊かな言語生活を拓く国語教育の創造
ー学び手の問いが育つ単元学習の開発ー
校種別分科会において、小学校第5分科会は、「人との関わりの中で伝え合う力を高める」というテーマでの実践発表であった。

（1）授業実践1（宇都宮大附属小学校の実践）

① 研究主題

「他者の情報を参照する力」を生かした中学年「話すこと・聞くこと」の授業実践
～子供の「伝えたい」思いを軸に～

② 主題設定の要旨

宇都宮大附属学校園では、高度情報化社会の現代を生き抜く力として、「他者の言説や情報を引き合いに出しながら自分の考えを深め表現していく力」である「参照する力」の育成を目指し、小・中・大の連携研究を基に実践を積んできた。今回の実践は、東京書籍3年「外国のことをしょうかいしよう」。本やインターネット、自他の経験からさまざまな世界の情報を参照したり、友達の話し方や学び方を参照したりしながら、「伝えたい」思いを原動力として資質・能力獲得へと進んでいく子どもたちの姿を目指したものである。

③ 実践の内容

研究主題にある「参照する力」を「他者の言説や情報を引き合いに出しながら自分の考えを深め表現していく力」として定義づけていた。それを基に、国語科において「自分が興味を持ったことを友達に伝えるため」という目的意識を持たせて、言語活動に取り組んでいた。単元に入る前に、世界の国々の本に触れる時間をつくったり、単元の導入として、教師が例示し、ゴールイメージを持たせたりと、児童が「伝えたい」という思いを高められるように工夫していた。また、他者の学び方を参照する活動では、友達とコミュニケーションをする必然性を持たせ、互いに話し合う場を設けていた。また、グループでの練習の様子を動画撮影し、データとして保存することで、いつでもよい手本を参考にすることができるよう工夫していた。

授業の動画や資料からも、子供同士の親和的な関係が見られた。生徒指導の視点を取り入れた授業づくりの有用性が感じられた実践発表であった。

5.「他者」の話し方を参照する①

教科書や教師の原稿で話し合う。



発表原稿
拡大掲示



発表原稿
拡大掲示

もし自分だったら…その1
どんなふうに話すかな？

もし自分だったら…その2
どこにどんな工夫をするかな？

5.「他者」の学び方を参照する①

さまざまな課題解決の過程の姿の表出







さまざまな学びの姿を例示
→自分(たち)に生かす

（2）授業実践2（千葉県・勝浦市立上野小学校の実践）

① 研究主題

地域の未来をつくる

～地域活性化のための提案活動を通して～

② 主題設定の要旨

子供たちの住む勝浦市は魅力あふれる市であるが、近年人口減少をはじめとする課題が山積している。そこで、地域の様々な課題を解決するための国語科の地域単元を考え、様々な人々とのコミュニケーションや情報を活用する能力の育成を図った。子どもたちは、インターネットで調べたり市役所等でインタビューしたりして得た具体的な情報をもとに課題を解決し、地域を活性化させる提案を考え、市長に発表した。豊かな表情のもとに成り立つ地域の人々とのコミュニケーションを通し、伝え合う力を高めた実践を報告する。

③ 実践の内容

国語科と総合的な学習の時間を連携させて、実際に地域の人々と関わりながら地域の課題を解決する単元を設定していた。地元と他地域の取り組みを比較する中で、疑問に感じたことを、インタビューやプレゼンテーションなどの他者と関わる活動を取り入れていた。児童が「みんなで自分たちの町をよくしたい」という思いを持って活動している様子が見られた。

また、児童同士が協力して、提案スライドを作る場面では、相手意識をもち、どうしたら分かりやすく伝えられるかを考えながら取り組んでいた。よりよい提案にしようと主体的に働きかける場面を多く設定することで、コミュニケーションスキルを自然に身に付けられるようにしている。

さらに、児童が市長に向けて発表したプレゼンテーションにより、提案が実現し、児童が市職員と一緒にボランティアとして活動していた。児童が主体的に活動する様子からも、児童の自己決定の場を設定するとともに、共感的な人間関係や、安心・安全な風土が醸成されていると感じた。



4 感想

まず、どちらの授業にも、生徒指導の実践上の視点が生かされていた。令和4年12月に改訂された生徒指導提要では、「生徒指導の実践上の視点」として、「自己存在感の感受」「共感的な人間関係の育成」「自己決定の場の提供」「安全・安心な風土の醸成」の4つが示されている。教科の指導と生徒指導の一体化させた授業づくりに必要な視点である。

さらに、どちらの授業も子供が主役になっている。自分たちが学びたい、伝えたいという思いを軸に、単元がつくられている。宇都宮大附属小学校の実践では、互いの意見を尊重し、意見交換の際にも、相手の意見に耳を傾け、共感の言葉をかけることで、共感的な人間関係の育成を図っていた。単にコミュニケーションの場を設定するだけでなく、円滑なコミュニケーションがとれるような働きかけがあった。勝浦市立上野小学校の実践では、地域の人々との交流を通して、異なる世代や背景を持つ人々の考え方を理解し、共感する力を育んでいた。また、地域の人々から感謝されたり、活動成果が地域に認められたりする経験を通して、「自分たちの活動が地域に貢献できている」という実感を持つことができたのではないかと感じる。活動を通して、自己存在感を感受する機会が多い実践だった。

このように、授業づくりの上でも、生徒指導の視点を生かすことは非常に有効であると考えられる。目の前の子供たちのためにも、授業改善をすることで貢献できるよう、邁進する所存である。

- 1 派遣期日 令和6年8月3日（土）
- 2 派遣先 学校名（会場名） さいたま市民会館おおみや レイボックホール
所在地 埼玉県さいたま市大宮区大門町2-118大宮門街4
- 3 研修内容「国語授業づくりセミナーin大宮 2024」
本研修は、「国語科授業で私が最も大切にしていること」というテーマで、北海道、埼玉県、東京都、神奈川県の名の先生方からの提案や模擬授業への参加を通して、国語科授業づくりについて考えるものである。

（1）「国語科授業で私が最も大切にしていること」提案1～6

①知識・技能

〈提案1〉言葉に注目して考える

- ・表現技法「比喻」→ たとえている言葉のイメージを膨らませて考えると、より効果が実感できる。
- ・表現技法「反復」→ 反復がない場合と比べて考えると、その言葉が強調されていることに気付く。

〈提案2〉国語を学ぶ意味を考える

- ・日本語を話したり聞いたりできれば相手とのやりとりはできるが、文章にすることで、遠いところ（場所・時代）まで届く。

②思考・判断・表現

〈提案3〉思考・判断・表現は何のために必要なのか

- ・知識・技能を使って問題を解決していくために必要となる力である。
- ・「やってみたい」学習課題を設定することが大切である。
- ・学んだ知識・技能を活かせるようにする。

〈提案4〉実用して学習した価値を実感できるようにする

- ・学んだことを試す言語活動を取り入れた単元構成を考える。
- ・学習活動の中に、主体性につながる選択肢を設ける。
- ・自分の学習過程で、その道の専門家からの助言をもらい、アドバイスをもとに完成させる。

③主体的態度

〈提案5〉楽しさを体験する

- ・さまざまな言葉を比較するなどして、言葉の面白さや考える楽しさを実感できるようにする。
- ・物事を認識する力を付ける。

〈提案6〉言葉への関心を高める

- ・1つの言葉や文字にも意識を向けて、読み解く楽しさを味わう。
- ・他の人の考えから、自分だけでは考えつかないようなメッセージを受け取ること。
- ・自らの言語感覚を養い、学んだ言葉を使おうとすること。

（2）模擬授業1～6

①知識・技能

〈模擬授業1〉詩「われは草なり」

- ・「草」や「緑」という言葉に注目し、言葉から受けるイメージを出し合う。
- ・辞書的な意味や属性を捉えることも大事である。
- ・知識として表現技法を身に付けるためには、帰納的な学びの方が効果的である。

〈模擬授業2〉説明文「モアイは語る―地球の未来」

- ・「三角ロジック」を用いて「主張・データ・理由付け」の関係性を確認する練習問題に取り組む。
- ・本文に当てはめて考える。批判読みをし、さらにどんなデータがあると説得力が増すか考える。

②思考・判断・表現

〈模擬授業3〉説明文「アップとルーズで伝える」

- ・本文から学んだ知識を活用して、1分動画を作る。
- ・「アップ」と「ルーズ」を対比して自分の言葉で説明する。
- ・説明した内容を文字におこして相互評価をする。

〈模擬授業4〉説明文『鳥獣戯画』を読む

- ・筆者の工夫を捉えて読み、それをいかして自分が選択した「日本文化」（「和菓子」「和食」「俳句」「祭り」「食品サンプル」「お手玉」「和楽器」）を紹介する文章を書く。
- ・紹介の仕方（「新聞」「リーフレット」「プレゼン」「ポスター」）を選択する。
- ・作成したものを、その道の「プロ」に読んでもらい、助言してもらう。
- ・自分が決めた手順（「だれに」「どうやって」「何を」）で、校正依頼を作成する。

③主体的態度

〈模擬授業5〉詩「くだもの」

- ・果物の種類をオノマトペの表現から想像し、ワークシートの穴埋め問題に取り組む。
- ・上位語と下位語の関係を使って、詩を創作する。

〈模擬授業6〉詩「せんねん まんねん」

- ・詩の中の気になる表現を挙げ、どういう意味なのかを推測する。
- ・ひとつひとつの言葉が、意図性をもって表現されていることに気付く。

（3）講座1「言葉にこだわる国語・表現にこだわる国語」（物語「ごんぎつね」）

- ・本文から副詞を抜いたプリントと本文と比較することで、言葉（副詞）がもつ働きに気付くような授業展開の工夫をするとよい。
- ・言葉や表現にこだわって読むと、より深い作品理解につながり、感性を磨くことができる。

（4）講座2「国語科授業における『深い学び』」

（詩「世界はうつくしいと」「挨拶―原爆の写真によせて」）

- ・自分が思う「美しさ」、2つの詩から読み取れる「美しさ」など、1つの言葉であってもいろいろな捉えができる。

（5）セッション「国語科授業づくりに必須の順位1・2・3」

- ・授業改善のために大切にしたいことについての意見交流をした。

4 感想

6名の先生方からの提案や模擬授業を通して、国語科授業づくりについて考える研修であった。「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的態度」の観点をそれぞれのテーマに据えた内容であったが、具体的な授業内容を踏まえて考えると、すべての観点は単独ではなくつながっているということに改めて気付かされた。特に、「主体的態度」が根底にあり、児童が「やってみたい、考えてみたい」と思う授業づくりを心がけることが重要であると感じた。

また、模擬授業では、参加者同士で考えを伝え合ったり、協力して学習活動に取り組んだりしたことで、学習者の立場になって考えることができた。やはり、実際に学習する児童の気持ちを考えて授業づくりをすることが大切なのだと実感した。どんな授業が「分かりやすいか」「楽しく学べるか」という学習者の視点を取り入れて、自分の授業づくりをしていきたい。

- 1 派遣期日 令和6年11月29日（金）
- 2 派遣先 千葉市立あやめ台小学校
千葉県千葉市稲毛区園生町446-1
<https://www.city.chiba.jp/school/es/042/index.html>
- 3 研修内容
令和5・6年度 千葉市教育委員会研究指定（特別支援教育） 研究報告会

（1）研究主題および研究の視点

「互いに認め合い、生き生きと学ぶ子どもの育成
～ユニバーサルデザインの考え方を取り入れた
安心感のある学級・学校づくりを通して～」

- ・視点1【環境の安心感】（ex. 情報が調整された安心感）
- ・視点2【チームワークの中にある安心感】（ex. ミニ校内委員会での情報共有）
- ・視点3【関わりの中にある安心感】（ex. インタビュー動画の活用
注目してほしい場所を枠線で囲む工夫）

（2）公開授業

① 2年1組 学級活動（2）ウ 心身ともに健康で安全な生活態度の育成

「ばいきんウイルスにまけない元気な体をつくろう」

- ・児童の興味・関心をひくミッション形式にして、ストーリー仕立てで展開していく。
【焦点化・共有化】
- ・全員で、合い言葉を言ったり、歌に合わせて体操をしたりと、楽しく体を動かしながら確認できるようにする。
【身体性の活用・共有化】
- ・「バリアアイテム」を黒板に貼り出すとともに、黒板中央の児童のイラストをバリアの枠で囲むことにより、視覚的にも分かりやすくする。
【刺激量の調整】
- ・一つの話題が完結したら、「静まりポーズ」でいったん静かで聞き取りやすい環境を整える。
【刺激量の調整】

② 5年1組 学級活動（3）ア 現在や将来に希望や目標をもって生きる意欲や態度の育成

「ふれあい活動に向けて～今の自分のできること～」

- ・Google formを使用し、その場でアンケートを取り、すぐに結果を提示する。前時に取ったアンケート結果と比較することによって様々な思いがあることを全体で共有する。
【共有化】
- ・今後の流れを年表で示すことによって、時間の流れを視覚的に理解できるようにし、何について話をするのかを明確にする。
【焦点化・視覚化】
- ・6年生のインタビュー動画を見ることによって、5年生の見えないところでも様々な役割があることに気がつくようにする。
【視覚化】
- ・ギガタブで児童のよさをまとめておくことによって、自分のよさを視覚的に捉えられるようにする。
【視覚化】

③ 6年2組 学級活動（1）イ 学級における多様な集団生活の向上

「全校が楽しむことのできるふれあい活動をしよう」

- ・話し合うことについては、事前に全体で共通理解を行った具体的な言葉に置き換えて

説明する。

【共有化】

- ・意見を述べるための視点を座標軸にし、グループ内で出し合った意見が視点に沿っているか見て分かるようにする。【焦点化・視覚化】
- ・全体での比べ合いの場面でも、グループで使った座標軸を拡大して使うことで、視点をずらさず話し合いができるようにする。【焦点化・視覚化】

(3) 全体会

①研究概要報告

- ・「あやめっ子見取りシート」(アセスメントシート)を使用し、誰一人取り残されることのないようにしている。
- ・授業UD(内容・参加)の研究を通して、教師間の連携がとれた。見通しをもてる児童が増えた。
- ・ユニバーサルデザインが、「個別最適な学び」と「協働的な学び」に活かされている。

②講評

- ・授業家庭における子どものつまずきの検討→見取りシートで共有している。
- ・学級全体での指導の中で、しっかりと個別の支援を行っている。
- ・学校や教室環境整備→6年間やり方を変えない。(いつ・どこで・誰が取り組むのか)

(4) 記念講演

- ・講師 国立特別支援教育総合研究所 発達障害教育推進センター 総括研究員
井上 秀和先生
- ・演題 「通常の学級における多様な教育的ニーズのある児童生徒への指導・支援」

集団に支えられて個が育ち、個の成長が集団を発展させるという相互作用があることから、教職員は児童生徒を十分に理解するとともに、教職員間で指導についての共通理解を図ることが必要である。

合理的配慮とは、個別に必要とされるもので、設置者・学校と本人・保護者により、可能な限り合意形成を図った上で決定することである。

支援の取り組みの考え方としては、全体→個人(全体として行ったものを個別化する)と、個人→全体(合理的配慮→基礎的環境整備:一人のためにやっていることは、全体のためになっている)がある。

授業のユニバーサルデザインには、決まった指導方法があるわけではない。「焦点化・視覚化・共有化」の視点で授業をつくることで、全体指導の効果が上がることもあるが、全ての子供に対応できるわけではなく個別指導も重要であり、自分に合った学び方を学べる学習環境を教師が整えることも大切である。授業のユニバーサルデザインの実現には、「教科教育」「特別支援教育」「学級経営」の3つの教師の専門性を高めることが必要である。

4 感想

2年1組の授業を参観した。T2の養護教諭や栄養教諭の登場、テレビの映像、黒板のイラストなど、子どもたちが視覚的に分かりやすくなっていた。エア手洗いやグーパー体操など体を動かすことで、誰もが活動に参加できている様子を見て授業構成の参考になった。

進級しても教室環境などを大きく変えないことが、変化への対応が難しい児童にとってはよいと思った。例えば、清掃用具入れの中の片付け方が全学級で統一されていて、学年が変わっても片付け方が同じになっている。清掃の仕方の動画もあり、それを利用して清掃の仕方を覚えたり、確認したりすることができ、安心して取り組めるといった。

お助け文房具の展示もあった。ノートや下敷きなど使い勝手の視点を考えることでストレス無く使えるものや、リーディングトラッカーなど困り感がある子どもが使用するとよいものが紹介されていた。市販されているものなので、先生方に紹介していきたい。

- 1 派遣期日 令和6年11月16日(土)
- 2 派遣先 全国小学校国語研究所 第16回 研究発表会
所在地 東京都中野区立教育センター
<https://zenshoukokken.com/>
- 3 研修内容
(1) 研究発表 「言語能力」の育成を目指す国語科指導法の研究
～「個別最適な学び」と「協働的な学び」を基盤とする授業作り～

これからの予測困難な時代を生きるには、必要な情報を的確に集め、読み解き、判断して行動し、様々なコミュニケーションを成立させ、考えや思いを共有し、共に社会参画して自己実現していくという力が必要である。どの問題も言葉の力と切り離せない。従って「言語能力」の育成のために、国語科の役割と指導の在り方やその方法について追究していく必要がある。

言葉の働きには「創造的・論理的思考」・「感性・情緒」・「他者とコミュニケーション」の3つの側面があり、これらをバランスよく育成し、言語能力を高めることが重要である。

全国学力・学習状況調査から「書くこと」においては、自分の考えがもてない、事実と感想を明確に区別できないことが課題であると考えられている。

そこで、本研究では次の3つを目指す。

- 言葉のもつ創造的・論理的思考の側面の力を高め、ものの見方や考え方を広げようとする態度を育成する。
- 説明的な文章を読んで考えたことをまとめ、筋道を立てて伝える力を育成する。
- 「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す中で、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が一体となって進むように、個々の児童に一層目を向け、指導の工夫・改善に努めて多様な学びを保証する。

(2) 授業提案 「第5学年 『想像力のスイッチを入れよう』 光村図書」

単元計画にあたって重点事項として、必要感のある学習課題をもつこと、筆者の考えの根拠を捉え、自分の考えをまとめることを目指した。授業では、必要感のある学習課題をもつためには、情報との関わり方について問いや問題意識をもてるような指導の工夫がされていた。自分の考えをもつために、キーワードから筆者の主張を読み取ること、事例と意見の関係をおさえ、筆者の考えを整理すること、「想像力のスイッチ」と表現したことの意図を捉え、必要なスイッチを考えることを意識した指導の工夫があった。また授業の流れとして個人の学び⇒グループで共有⇒一斉で共有⇒個人の学びの広がりを経験する学習の流れに設定し、どの授業も個別学習と協働的な学びがサイクルになるようにしていた。さらに「個別最適な学び」を実現させるために、自分の考えのまとめかたの例文を用意したり、学習方法を一人一人が選択できるように教材文、ノート、タブレット、付箋を活用したりしていた。また「協働的な学び」を実現させるために、個人の問いをもとにした共通の課題を設定したり、共通のテーマを選んだ児童同士で交流させたりしていた。共有を通して、個人の学びを広げ立場を明確にする場の工夫がされていた。

模擬授業後の研究協議では、参加者から主に2つの意見が出た。一つ目は題材が古く、本文に書かれている内容が今の児童にとっては当たり前のことである可能性があることを踏まえたり、社会科「情報社会と私たちの暮らし」と関連付けたりして学習課題を設定した方がより主体的な活動になるのではないかと意見が出た。2つ目は本単元は「読むこと」に重点目標をおいているので、自分の考えを表現する方法として、文章を書く、プレゼン資料を作る、説明動画を撮るなども児童に選択させてよいという意見が出た。

(3) 記念講演 「小学校国語科における学習指導要領の趣旨の実現のために」

～指導上の課題と求められる改善のための視点～

記念講演では、各領域における課題を確認した。国語科の3領域における課題は、どの領域でも「考えの形成」部分であることが分かった。この課題に対して、学習過程を明確にすることや自分の考えを形成する活動を重点的に位置づけることが大切だということがわかった。また学習指導要領の趣旨を実現するために各領域や育成を目指す資質能力の系統性を理解してから単元の構想を練る必要がある。

授業作りについては、単元で取り上げる指導事項の確認から始まり、単元の目標と言語活動の設定、単元の評価規準の設定、単元の指導と評価の計画の決定、評価の実際と手立ての想定という順番で行うとよいことが分かった。特に「指導と評価の一体化」のために、単元の中に「指導に生かす評価」と、「記録に残す評価」を複数回設けることで、児童の活動と教員の指導をスパイラル状に積み上げ、ゴールに向かうことが大切だとわかった。さらに児童が対話的・主体的に学習に取り組むようにする工夫として「主体的に取り組むたくなる課題の設定」や「試行錯誤する場面の確保」、「考えを深めたり、広げたりするための協働的な活動」があることが分かった。

4 感想

私は今回の研究発表会に参加するに当たり、「個別最適な学び」と「協働的な学び」のベストミックスの具体について学ぶことをねらいとしていた。特に国語科では自由進度学習についてである。言語活動の基盤となる国語科であれば、他の教科にも応用できるだろうと考えていた。

「個別最適な学び」については、学習方法や進度をなるべく児童に委ね、自己決定する場面を作ることが大切だとわかった。そして自分が決めた課題や学習方法、進むスピードについて、主体的に振り返り、次に生かすことで、「学び方」を学ぶことができる。このように自分に合った「学び方」を見付けられた児童は、さらに主体的に学習に取り組むことができ、義務教育を終える頃には「生きる力」を身につけた社会人になると考えられる。また「協働的な学び」では、学習を自己の中で内在させるのではなく、外に出すことで得られる考えの深まりや広がり、お互いを尊重する人間性等が育まれることが分かった。そして「協働的な学び」を意識した上で個別の活動を行うことで、個別の活動に目的意識や相手意識、必然性が生まれ、より主体的に学習に取り組めるだろう。したがって、「個別最適な学び」と「協働的な学び」は、相互に活動のギアを上げる重要な関係なので、1時間単位でなくても、単元の中には、これらの活動を何度も交互に繰り返すことが大切であると感じた。そして、この学習効果・効率を高める相互作用をしっかりと意識した発問や活動を、私たちは考えなければならないと感じた。

参加した方々と話していると、自分も含めて「授業をどう児童の手に委ねるか」というところで悩んでいる人が多かった。「教員は児童の伴走者であるべき」ということを理解しているが、実際にどうすればよいか、コントロールを失うのではないかと感じている。しかし、私は今回、「個別最適な学び」と「協働的な学び」について勉強することができ、見通しを立てることができたので、本校職員に伝えていきたい。現在は社会科のみ自由進度学習を取り入れているが、国語科を始め算数科でもできる単元を見極め、挑戦していきたい。

- 1 派遣期日 令和6年10月15日（火）
- 2 派遣先 学校名（会場名） 埼玉大学教育学部附属小学校
所在地 埼玉県さいたま市浦和区常盤6丁目9-44
<https://www.fusho.saitama-u.ac.jp/>

3 研修内容

埼玉大学教育学部附属小学校の理科部研究主題は、「自然の事物・現象に自ら向き合う子の育成」である。「教材」「土台・風土」「教師の関わり」の3つを軸として、児童が「夢中」と「自覚」を繰り返しながら、自然の事物・現象に自ら向き合える学習を行っている。研究主題である「漸進する学び」の実現のために、目標をもって問題を発見し、学び続ける子を目指して行っている授業について参観した。

（1） 授業参観

ア 5年生 理科「物のとけ方」

本時の目標は、「物の溶け方について実験などを行い、得られた結果を基に考察し、表現するなどして問題解決することができる」ことである。

授業参観する視点は、①自分が調べてみたい物質を選択し、水に溶けているかをじっくり観察する姿（夢中）と②得られた実験結果から、モデル図を使って物質が水に溶ける過程を自分なりに表現している姿（自覚）の2点である。

授業では、児童自らが興味をもった物質を教材にして、物が溶けることに着目できるようにし、モデル図を使って目に見えない現象を表現できるかを見取るようにしていた。前時で、身近な物質の中から自分が調べたい物質を選んで実験を行うことで、自分事として問題を捉えることができていた。実験は、蒸発させる、粒子を観察する、濾過する、粒を水におとすの4つを行い、その結果をモデル図で表現できるようにしていた。児童は、実験に意欲的に取り組み、粒をモデル図に表すことができる児童が多かった。グループでの実験であったため、話し合いが活発に行われ、モデル図への表現の仕方も比較検討している様子が見られた。

身近な物質の粒が、水の中ではまとまっているという点に気付いて、発表している児童がいたので、その発言を拾うことで教師が食塩の粒子を顕微鏡で見てみようという流れへとスムーズにつなげることができていた。

目に見えない物質について、児童が夢中と自覚を往還しながら、自分事として意欲的に実験し、考察していく姿を見ることができた。

イ 第6学年 理科「てこの規則性」

本時の目標は、「てこの規則性についての事物・現象に進んで関わり、粘り強く、他者と関わりながら問題解決することができる」ことである。

授業参観の視点は、①水平につり合うにはどのようなきまりがあるか調べたり、実物を使って見付けたきまりを確かめたりしている姿（夢中）と②自分や他者の実験結果や体験したことを事実として捉え、水平につり合うきまりを自分の言葉で表現している姿（自覚）の2点である。

授業の導入時に、洗濯物の干し方について実物を提示し、日常生活との関連を意識させながら、水平にするためのきまりを見付けるという目標を確認させていた。実験では、洗濯用ハンガーを実験用てこに置き換えて、2つの方法で行った。1つ目がおもりの位置を左右同じにする方法、2つ目が片方を固定しておもりの数を変える方法である。

児童は、様々な方法で実験を繰り返し、「おもりの重さ」と「位置」の関係に着目して試行錯誤している様子が見られた。また、実験結果から考えられることを自分なりに言葉や図で表現したり、その関係性を式にして表現したりする児童もいた。比例や和、積など

他教科で学んだことを生かして、考察している児童も見られた。

さらに、実験結果で得たことを洗濯用ハンガーと大型のてこ実験装置で再確認し、本時の学びを日常生活と関連付けることができていた。

児童が夢中と自覚を往還しながら、てこの規則性について妥当な考えをつくり出し、主体的に問題解決する児童の姿を見ることができた。

(2) 研究協議会 理科分科会

理科分科会では、当日行われた4つの理科の授業について、グループ協議を行った。本時の授業展開、児童の姿、本單元における教師の実践についてをテーマとして協議した。

埼玉大学教育学部附属小学校の目指す「学び続ける子」とは、自らのやりたいという思いをもって問題解決をしたり、目標を達成したりしながら自走し、次の学びに向かう子であり、そのためには、自らの目標をもてるようになることが大切であると考えて授業を行っていることがわかった。

本時の授業では、どの授業も児童の心をゆさぶる教材提示がされていることで、児童が実験に意欲的に取り組むことができているという意見が多く出されていた。教科書にのっている実験だけではなく、自分が調べたいと思う物質について実験したり、日常生活との関わりを意識させた問題解決をさせたりしている点については、児童を夢中にさせる点で効果的であるという意見も多かった。

4 感想

埼玉大学教育学部附属小学校の授業の様子を参観させていただき、一番心に残ったことは、どの児童も自分自身のやりたい、学びたいという意欲をもって学習に参加している点である。また、児童が夢中になるためには、理科ってすごいという理科で味わう学びの幸福感も大切だと学ぶことができた。

私も日頃から理科の学習において、自然現象に興味関心をもつことや理科の学習が日常生活へとつながっていることを意識させて学習を展開するようにしている。そのためには、授業の導入部分が大切ではないかと考えていた。今回、授業参観させていただいたことで、導入部分の大切さを再実感することができた。

しかし、導入部分で学ぶ意欲をもてたとしても、その意欲を持ち続けることやそこで考えた疑問を新たな目標として学び続けることができなければいけないことがわかった。この点に対し、埼玉大学教育学部附属小学校では、教師が児童の心理的欲求に働きかける取り組みをしていた。興味関心をもって学習したい、目標を定めて達成のために努力する、所属している集団に貢献したい、将来や人生の目標を達成していこうという欲求を刺激するような声かけや教師と児童が共に学ぶ時間を作り出すことの重要性を新しく学ぶことができた。

また、今回の授業参観で学習課題に対して、より妥当な考えをつくりだし、表現するという点についても考えた。授業参観している中で、児童が考えたことや新たな疑問等は、教師からの指示がなくても適宜話し合いを行い、ICT等を活用して友達への説明をすることができていた。その際、相手に伝えやすくするために、ノートに図や表を書いて説明したり、動画を撮影して見せたい部分だけを切り取って説明したりしている児童が多く見られた。集めた情報を上手く整理して、相手へ伝えるという活動を日頃に行っている成果であると感じた。また、てこの規則性を見出す場面でも、比例や和と積など算数で学んだことを関係付けて説明する場面も見られた。さらに、児童が説明をしている場面で、教師がなぜそうなるのかと問いかけたり、大事な言葉やヒントとなる言葉を繰り返したりして、学ぶ意欲が途切れないようにする声かけが印象的だった。新たな疑問を見付けた時には、その学びを粘り強く解決するために追加で実験をさせる姿からも「学びをつくる」学習を感じることができた。

今回の研修で、児童の側に立って学びを考えることや、教材、教師と児童との関わりについて多く学ぶことができた。児童が興味関心を持ち続け、学ぶ楽しさを味わいながら学習に取り組めるよう、この学びを今後の教材研究や授業に生かしていきたい。

- 1 派遣期日 令和6年7月28日（日）
- 2 派遣先 学校名（会場名）：筑波大学附属小学校
所在地：東京都文京区大塚3-29-1
<https://www.elementary-s.tsukuba.ac.jp/>
- 3 研修内容 大会テーマ（日本道徳基礎教育学会）
道徳教育のもとに立って、この一点に迫る発問を考える
ー内容項目を手掛かりに、子どもと共に人間のよさを理に立って
考えさせ、情にまで深めさせるためにー

（1）公開授業

- ①主題名 やさしさをうむもの
- ②教材名 「はしのうえのおおかみ」（1年）
- ③授業者名 筑波大学附属小学校 加藤宣行
- ④ねらい

- ・くまの相手を思う心遣いの中にやさしさを感じ、心が温かくなったり、くまのやさしさに触れて、自らを高めようとするおおかみの姿に感動したりする。
- ・そのような心は自分の中にもあることに気付き、その心から何かができる自分になろうとする。

⑤授業の様子

研究会における「この一点に迫る発問」とは、「一つの発問」という意味ではなく、授業の要点に迫る発問のことを指している。余分な発問をできるだけカットして、「この一点に迫る発問」に関する学習に集中した道徳授業が出来ないものかという考えの提案である。

加藤先生の授業では、教材を通して迫りたい一点を「おおかみを変えた、温かい心のよさ」とし、それに迫る発問は「おおかみを変えたものは何か」である。

「やさしい人ってどんな人でしょう。」という導入の発問から授業が始まった。「いすを譲ってくれる人。」「困っている人を助けてあげる人。」「相手の気持ちを考えてあげられる人。」など自分の言葉で発表し、「それ私も思った。」と共感する児童や「それも思ったけど僕はー。」と付け足しの発表をする児童もいて、先生は一つ一つの声を拾い、クラス全体に広げ、投げかけながら板書に表していた。新しい意見や考えが出た時には、「よく分かった人・まあまあ分かった人・少し分かった人・全然分からない人・考え中の人」と自己認識させる発問をし、児童は必ず挙手をする習慣がついていた。

展開部分では、うさぎにいじわるをしていたおおかみが、自分が恐れる大きいくまからの思いやりに触れ、やさしい行動ができるようになる。児童から「くまがおおかみに道を譲ったことと、こうすればいいんだよとやり方を教えたことは同じやさしさだと思う。」と発言があった。そこで、要点に迫る発問をし、「くまのやさしさがおおかみの心を変えてくれた」と一点に迫る発言が児童の言葉から出てきた。

終末の「やさしくなれたのはおおかみだけか」という発問に対しても、様々な意見が出た。「やさしくできるようになって自分も嬉しいと思う。」「うさぎも嬉しくなったと思う。」「誰かに嬉しいことをしたら返ってくるって私も分かった。」「強さではなく、少し勇気が必要だと思った。」など発表をしていた。

振り返りでは、道徳ノートを活用し、1年生でも自分の言葉で書く姿が見られた。

(2) 授業研究・質疑応答

・板書の仕方について

縦書き・横書きとあるが板書の仕方に決まりはない。児童の思考や発言を図式化したり広げたりするために、発問とマッチングさせた横書き板書を取り入れている。教材によっては、黒板を開放して児童に記入してもらうこともある。

・役割演技について

今回の教材は、迫りたい一点のために役割演技が有効な手立てではないと考えていた。また、児童の感想が「楽しかった」で終わってしまうことが多く感じているので、役割演技を取り入れるには訓練が必要だと考えている。

・1年生の道徳ノート活用の仕方について

ひらがなの学習中のため、文字に限らず、絵での表現も可としている。授業内で書ききれないことも多いので、年度初めに保護者の同意を得たうえで、宿題にして保護者の力も借りている。道徳の授業内容を理解してもらえたり、保護者自身も教材に対して考えをもってくれたりするので、家庭での道徳教育にもつながっている。道徳心は学校教育にとどまらず、家庭教育でも育てていくものだと考えており、道徳の宿題は保護者にも好評である。

(3) 基調提案 淑徳大学名誉教授 新宮弘織

(4) 研究発表

教材「ぐみの木と小鳥」を用いた授業実践（2年） 根本哲弥

教材「お母さんのせいきゅう書」を用いた授業実践（4年） 水野哲弥

・「視観察」からこの一点を考える

教材に描かれているものは目に見える行為なので、行為を通して目に見えない行為を生んだ心を関係づけて読むことも重要だと考える。

① 視る：教材に描かれている行為をみる。

② 観る：行為を行なった理由をみる。

③ 察る：状況が変化しようとは変わらない心、人間を突き動かす心をみる。

(5) 分科会・授業づくり・全体会

4 感想

教師が思っていた以上に児童が深く考える姿が見られたり、予想していた反応を超えてよりよい考えが生まれたりして、児童同士が考えを認め合う姿が見られたり、教師自身も新たな考えを得ることができるので、私は道徳の授業を行うことが好きだ。今回、加藤先生の授業を通して、低学年でも道徳の授業が活発になる姿を拝見した。発達段階の違いはあるが、学年に関係なく、日頃の教材研究と指導の大切さが授業に生きてくるのだと身をもって感じた。その中でも、参考にしたいと感じ、現在実践していることがある。

自己認識させる発問を取り入れ、学級全体に広げることだ。導入では誰もが答えやすく、挙手しやすい発問をすることを心がけている。それだけにとどまらず、「よく分かった人・まあまあ分かった人・少し分かった人・全然分からない人・考え中の人」のような発問を取り入れるようにしている。自分の考えを振り返ったり、他者と共有したりすることで、「分かった」「そういうことか」という思いを「いいな」「すばらしいな」という情につなげ、ねらいに近づけるようにしている。担任している6年生の学級では、日頃から自分の意見を発言できる児童が多く、道徳でも積極的である。教師と児童のやり取りでとどまらず、児童同士に広がっていくよう発言を拾い、つなげていく臨機応変さには毎回難しさを感じている。教材研究をしっかり行うことで、児童がねらいや中心発問に基づいた考えを出せるよう修正しながら授業を進めることができるようになるので、これからも日々実践していきながら学んでいきたい。

- 1 派遣期日 令和6年11月16日(土)
- 2 派遣先 会場名 東京都中野区立教育センター
所在地 東京都中野区中央1丁目41番2号
<https://www.city.tokyo-nakano.lg.jp/shisetsu/kosodate/soudan/kyouiku-center.html>
- 3 研修内容

(1) 選定の理由

本年度の学校経営重点に「ICTの利活用による、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」がある。本校で重点的に取り組みたい学習指導と本研究主題が一致し、参考になると考えたため選定した。また、文科省の調査官から、国の国語科教育の現状と指導上の改善点について学ぶことは、視野を広げることにつながり、授業実践に生かせると考えたため参加した。



(2) 研究発表会主題

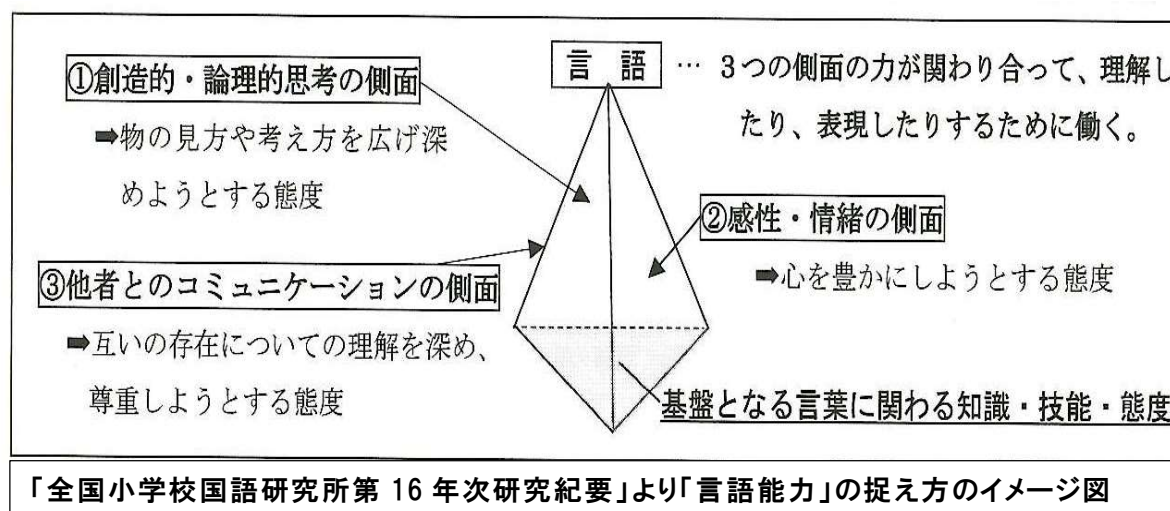
第16回全国小学校国語研究所研究発表会 主催：全国小学校国語研究所
「言語能力」の育成を目指す国語科指導法の研究
—「個別最適な学び」と「協働的な学び」を基盤とする授業づくり—

【本研究の内容】

「言語能力」の捉え方を共有し、国語科としての「言語能力」の育成を追究していく。

【言語能力について】

「言語能力」を「基盤となる言葉に関わる知識・技能・態度」＋①創造的・論理的思考の側面②感性・情緒の側面③他者とのコミュニケーションの側面から捉える。これらをバランスよく育成し、言語能力を確実に高めることが重要である。



(3) 授業提案 (高学年分科会)

言葉のもつ①創造的・論理的思考の側面の力を高め、ものの見方や考え方を広げようとする態度を育成する。そのために、説明的な文章を読んで考えたことをまとめ、筋道を立てて伝える力を育成する授業づくりをする。「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す中で、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が一体となって進むように、個々の児童に一層目を向け、指導の工夫・改善に努めて多様な学びを保障する。

単元名：「メディアとの関わり方」について考えたことをまとめ、伝え合おう

教材名：『想像力のスイッチを入れよう』 下村健一著 光村図書出版 5年

指導目標：読んで理解したことと自分の経験を基に、考えをまとめることができる。

展開 ：	課題把握	1 本時の学習課題を確認する。
	課題追究	2 考えをまとめる学習方法を選び、自分の考えをメモする。 3 「メディアとの関わり方」について、自分の考えをまとめる。
	まとめ	4 本時の学習課題を振り返り、次時の学習課題を確認する。

重点：

学習の個性化…学習方法の選択（学習方法を自分で決め、色で示す。）

赤 教科書を参考にする。 **青** 前時までの学習記録を参考にする。

黄 友だちの意見を参考にする。 **白** 先生や友だちに相談する。

協働的な学び…個人の必要感ごとに交流してまとめる。（個人、グループ、一斉、個人）

→「主体的・対話的で深い学び」を目指す。

(4) 記念講演

演題：小学校国語科における学習指導要領の趣旨の実現のために
—指導上の課題と求められる改善のための視点—

講師： 文部科学省 初等中等教育局 教育指導課 教科調査官 国立教育政策研究所
教育課程研究センター 研究開発部 教育課程調査官 大塚 健太郎先生

○実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿（令和3年 中央教育審議会答申より）

①個別最適な学び

指導の個別化 ・支援が必要な子供に重点的な指導を行うなど効果的な指導を実現。
・特性や学習進度等に応じ、指導方法・教材等の柔軟な提供・設定。

学習の個性化 ・子供の興味・関心等に応じ、一人一人に応じた学習活動や課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習を調整する。

②協働的な学び

- ・探究的な学習や体験活動等を通じ、子供同士や多様な他者と協働しながら、他者を価値ある存在として尊重し、持続可能な社会の創り手となるよう資質・能力を育成する。
- ・一人一人のよい点を生かし、異なる考え方を組み合わせ、よりよい学びを生み出す。

○授業づくりの手順

- ① 指導事項の確認
- ② 目標と言語活動の設定
- ③ 評価規準の設定
- ④ 指導と評価の計画の決定
- ⑤ 評価の実際と手立ての想定

4 感想

個別最適な学びと協働的な学びを重視した授業づくりや主体的・対話的な学びが求められる背景を学ぶことができた。未来を担う子どもたちを育てるためには、広い視野をもち、今後の時代を見据えて学び続けていくことが大切だと考えた。今後も、生涯にわたって学び続ける態度を大切にしながら創意工夫していきたい。

1 派遣期日 令和6年10月15日（火）

2 派遣先 学校名（会場名） 埼玉大学教育学部附属小学校
所在地 埼玉県さいたま市浦和区常盤6丁目9番44号
<http://www.fusho.saitama-u.ac.jp>

3 研修内容

（1）視察校選定の理由

埼玉大学教育学部附属小学校は、『漸進する学び』～大切な要素「土台風土」「教材」「教師の関わり」～を研究主題として、2年間にわたる研究を進めてきた。その中、体育科研究主題は、「主体性を育み、運動への有能さを認知することができる体育授業の工夫」である。一方で、本校は『『学びに向かう力』を育む学習指導の在り方』を課題研究テーマとしている。視察校の研究主題と本校の課題研究テーマの関連性を鑑み、体育科において、児童が主体性をもってどのように学習に取り組むのかを視察したいと考えたため、埼玉大学教育学部附属小学校を今回の視察先として選定した。

（2）研究への取組

研究主題

『漸進する学び』～大切な要素「土台風土」「教材」「教師の関わり」～

視察校では、「学び続ける子」を目指す児童像としてとらえ、2年間にわたる研究を続けてきた。児童が「学び続ける子」になるためには、自らの目標をもてるようになること（ねらいや明らかにしたい問題や活動のめあてをつかむこと、自分の進みたい方向や自分の叶えたいことなどを含んでいるもの）が大切であるとしている。また、児童一人一人が各教科等の学びの中に、自らの「やりたい」を見いだしながら目標をもてるようにしていくことが大切であるとしている。

その中で、「目標をもてるようにする」授業に大切な要素として、大きな3つの要素があると、以下のとおりに整理している。

- ① 土台・風土：心理的安全性が確保されている学級
子どもの特性に合った場がある など
- ② 教材：教材としての魅力がある
身に付けたい資質・能力に合っている など
- ③ 教師の関わり：教師の関わりや教師からのフィードバックがある
その時間の学びの確認を教師と行っている など

また、体育科については、以下のとおりに研究が進められている。

体育科研究主題

「主体性を育み、運動への有能さを認知することができる体育授業の工夫」

体育科研究主題にせまるための視点

「子どもが主体的に学びを進めることで、運動への有能さを認知できるようにする。」

【手立て】

- ① 子どもが自己決定して学習を進められるような展開の工夫をする。
- ② 子どもが期待（やればできそう）や価値（やることに価値がある）を感じる教材の工夫をする。
- ③ 子どもの必要感を見極めた教師の関わりの工夫をする。
- ④ 成功や失敗に対してだけではなく、子どもの努力に対するフィードバックをする。

(3) 研究授業

ア 第4学年1組 体育科 単元名「ティーボール」(ゲーム・ベースボール型ゲーム)
指導者 浅間 聖也先生

【教科の研究主題との関わり】

教科の研究の手立て②子どもが期待や価値を感じる教材の工夫をすることに焦点化し、その有効性を検証するものである。

【ねらい】

役割を踏まえた作戦を選ぶことができるようにする。(思考力、判断力、表現力等)

【3つの要素との関わり】

ベースボール型ゲームの特性である、走者が速いか、守備側の協同的プレイが速いかを特定の塁上で競い合うことができるような「教材」の工夫をし、児童が仲間と力を合わせて競い合う楽しさや喜びに触れることができるようにする。

イ 第3学年3組 体育科学習指導案 単元名「跳び箱運動」(器械運動)

指導者 矢口 幸平先生

【教科の研究主題との関わり】

本研究は教科の研究の手立て①子どもが自己決定して学習を進められるような展開の工夫をすることに焦点化し、その有効性を検証するものである。

【ねらい】

互いの動きを見合い、考えたことを友達に伝えることができるようにする。

(思考力、判断力、表現力等)

【3つの要素との関わり】

子どもが自己決定して学習を進められるような展開の工夫をし、子ども自身で目標や課題、活動を決めて学習を進められるようにする。

4 感想

2つの授業を視察したが、いずれにおいても児童が主体的に学びを進められる展開となっていた。そのため、本校の課題研究テーマと関わりがある部分が多くあり、大変参考となる授業であった。

第4学年1組の「ティーボール」(ゲーム・ベースボール型ゲーム)では、チーム毎に作戦タイムが設けられたり、児童同士が審判をしながらゲームを進めたりして、児童が主体性をもって取り組めるような学習内容となっていた。

授業を参観していると、導入時のルール確認等は教師主体となっていたが、それ以降は、児童がチーム毎に作戦を話し合ったり、ゲーム時の微妙な判定の際には相手チームと話し合っ
て審判を下したりするところが見られた。いずれの場合でも、教師はほとんど話し合いには加わらず、児童が主体性をもって進めていたことが大変印象的であった。本校でも、それぞれの学級で授業を進める際に、教師主導となる時間があつたとしても、いずれは児童自らが学ぶ方法を選択して学習する時間が取られる。これらに関連付けると、学習場面において、教師による「場」や「時間」の設定の仕方次第で、児童が主体性をもって進んで学習に取り組めるようになるのではないかと考えた。今後の教育活動でも、私自身が児童に任せて学習活動が進められるように、「場」や「時間」の設定を意識していきたいと思う。

第3学年3組の「跳び箱運動」(器械運動)では、児童が跳び箱運動を行う際、互いの動きを見合い、考えたことを友達に伝えることができるようにする学習内容となっていた。

授業は、それぞれの児童自身が学習課題を明確にした上で、数種類の高さの跳び箱や跳び方から自ら選択し、課題解決できるよう進めていくという内容であった。この学習内容から、児童自身が自分の課題となることをメタ認知して明確にすることにより、より主体的に学習活動に取り組めるようになるのではないかと考えた。また、児童一人一人が、自分のできることやできないことを分析してから練習に取り組むことのよさが感じられた。今後の教育活動でも、児童が自分自身の課題について考えてから解決に向かえるようにするために、私自身の指導力を向上させていきたいと思う。

- 1 派遣期日 令和6年11月15日（金）
- 2 派遣先 学校名（会場名） 宮城教育大学附属小学校
所在地 宮城県仙台市青葉区上杉六丁目4-1
<http://fu-syou.miyakyo-u.ac.jp/>

3 研修内容

視察先の小学校の研究テーマは、「学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた新教科『小学校情報科』の設定と、その学びの充実を図るための教育課程の開発」である。今年度は、4年次計画の第2年次であり、以下の3点を行っていくことで、研究テーマに迫ろうとしている。

- ①「小学校情報科」の枠組みの見直し
- ②各教科との内容や資質・能力のつながりの検討
- ③幼・小・中の系統性の検討

私は、2つの公開授業に参加した。1つ目は、新教科「小学校情報科」の設定を目指す提案授業。2つ目は、小学校情報科を含む教育課程を通して育成した情報活用能力の発揮を目指す理科の授業である。

1つ目の、新教科「小学校情報科」の設定を目指す提案授業は、「光る！反応する！インタラクティブアートにチャレンジ」という単元で、センサを活用した参加型アートを作ることを通して、計測と制御のしかたについて理解したり、創造性を生かしたりしながら問題解決する児童の育成を目指す授業であった。新教科「小学校情報科」の設定を目指す授業であるため、本時の目標は、「意図した表現に近づくよう論理的推論をしながらプログラミングしたり、LEDの光や色、材質に着目しながらイメージを広げて表現したりすることができるようにする。」という、情報活用能力の育成を組み込んだ目標であった。授業の流れは、①micro:bitとLEDテープを活用し、センサの入力（音・動き・傾き等）に応じて、応答（LEDテープの光り方や色）が変化するアート作品を製作する。②試作した作品を暗所で動作させ改善点を考える。③改善点を踏まえて、プログラムやアートの見直しを行う。④学習を振り返り、googleスプレッドシートにまとめる。であった。①の場面では、声の大きさや傾きの角度によってLEDテープの色が変化したり、LEDテープの光る範囲が変化したりするプログラムを児童が楽しみながら考え、作品を製作していた。センサを活用したプログラムを組むという部分で情報活用能力の基礎的な部分の育成が図られていた。②・③の場面では、自分が意図した反応を示さなかった（声の大きさに光る色を変化させなかったが、そうならなかった等）際に、児童がプログラムを改善し、意図した作品になるように試行錯誤する様子から、本時の目標である「論理的推論をしながら」という内容にせまる場面であると感じた。④の場面では、児童がタブレットを使い、スプレッドシートに学習の振り返りを記入することで、ポートフォリオ的に学びの蓄積が視覚化されていた。また、他者の意見を共有できる工夫がされている振り返りの方法であった。公開授業後の研究協議では、今回の授業展開において育成が図られる児童の資質・能力が、図画工作科的なものか、情報科的なものであるかの議論がなされた。児童の活動の様子や、創作的な活動内容から図画工作科としての一面が大きかったのではないかと意見が挙げられた。一方で、「どうして拍手をすると色が変わる仕組みにしたのか」という教師の問いかけに対し、「この作品を見た人が、きれいだなと感じて拍手をした時に、色が変わって驚かせたい」という児童とのやりとりがあったことから、児童が、相手意識をもち、鑑賞者の動きを予測しながらプログラムを組むというアルゴリズム的な思考が育まれていた授業であるとの意見も挙げた。私は、小学校における、情報科教育とは、教科横断的な視点が必要なのではないかと考えた。各教科の中で、副次的に情報活用能力が育まれる場を設定しながら、情報科的な資質・能力を身に付けさせていくことが今後の教育の在り方なのではないかと感じた。

2つ目の、小学校情報科を含む教育課程を通して育成した情報活用能力の発揮を目指す理科の授業では、「人の誕生～動物の発生と成長～」の単元の中で、子宮のつくりや胎児の成長過程について、コンピュータを活用しながら自分の考えをまとめ、クラウド上で共有・相互参観することを通して、自己調整しながら学びを深めていく授業展開が公開された。授業

の流れは、①Google スプレッドシート上にまとめられた振り返りを各自確認し、本時のゴールを決める。②自ら決めたゴールに従い、クラウド上のスライドに子宮や胎児についてまとめる。③数人がスライド内容を発表する。④スプレッドシート上で本時の振り返りを行う。であった。①の場面では、前時までの活動内容や振り返りが、クラウド上で一覧になっており、これまでの積み重ねが感じられるような工夫がされていた。②の場面では、各児童のスライドが相互に閲覧できるようなソフトを使用しており、相互参観の一助となるような仕掛けづくりがなされていた。また、③の場面では、教師の意図的指名により、全児童の見通しとなるような発表になっていた。そして、④の場面では、①の場面同様にクラウド上での振り返りを行っていた。本時の目標は、「胎児の母体内での成長について調べる活動を通して、それらについて理解することができる」であった。各児童がそれぞれのペースで学習を進める自由進度学習を取り入れ、相互参観が容易になるような授業構成であることが、目標である知識・理解の定着にせまる工夫であったと感じた。

全体会においては、校務のDX化（情報化）についての講義が行われた。情報化によって、子どもと向き合う時間が増え、ワークライフバランスの実現が近づいた例の発表であった。具体的には、①職員会議資料をクラウド上の共有にし、議論が必要な点を明らかにしておくことで、変更点をその場で記入でき、時間の短縮になること。②回覧文書をスプレッドシートで共有し、リンクを貼り付けておくことで、好きな時間に回覧できるようになったこと。③安全点検をスプレッドシート上で行うことにより、修繕箇所を画像と共に記載でき、確認の時間短縮になったこと。④職員用のポータルサイトを運営し、年休や出張の申請をオンライン上で行うことができるようにしたため、全職員での共有がしやすくなったこと。⑤職員室の予定をモニターに映す方式にしたことにより、書く手間が省けたこと。等が挙げられていた。実践することができれば、働き方改革につながる取り組みが多く、有意義な情報交換となる講義であった。

4 感想

研究テーマである「学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた新教科「小学校情報科」の設定と、その学びの充実を図るための教育課程の開発」は、これからの教育界に必要なテーマであると考えた。Society5.0の時代を生きる児童にとって、情報活用能力の育成が大切になってくる。変化が激しく、予測困難な時代の到来が予想されるからこそ、既知の事実を活用し、新しい課題に対して、問題解決できる人間を育成していかなければならないと感じた。小学校情報化の新設に向けた授業公開では、日立市においても配付されているmicro:bitを活用し、センサの仕組みを取り入れながら意図的な動きになるよう、問題解決していく学習内容であった。プログラミング的思考を働かせながら学習したり、センサが自動化によって重要な役割を果たしていることを理解したりと未来の社会で生きていくための力を育むことのできる授業の在り方を考えることができた。また、情報活用能力を生かした理科の授業では、コンピュータ上でスライドをまとめることの他に、振り返りや自分の学習ゴールをクラウド上で一覧にしていくことで、情報活用能力を単にアウトプットするだけでなく、様々なデジタルの良さを児童が感じられるよう工夫された授業展開の形を参観することができた。そして全体の講義では、校務をいかに情報化し、ワークライフのバランスを実現したり、児童と関わることでできる時間を確保したりすることができるかについて自分自身の考えを深めることができた。

今回の視察では、情報化社会に対応できる子どもたちを育成するための教育カリキュラムや手立てについて深く考え、自分なりのイメージをもつことができた。現行の学習指導要領では、各教科の中で情報活用能力を育むとされているが、次回の改定では、情報科が教科として新設される可能性があるという話を聞いた。ただタブレットを児童に活用させるのではなく、タブレットを使用すると手書きと比較して何が利点であるのか、児童に感じさせていくことを教師側が意識して活用させることが、現時点の教育において大切であると感じた。今回の視察で学び得たことを、今後の指導に取り入れ、児童の資質・能力の向上に励みたいと考えた。

- 1 派遣期日 令和 6 年 11 月 8 日（金）～ 11 月 8 日（金）
- 2 派遣先 学校名（会場名） 千葉県袖ヶ浦市立昭和小学校
所在地 千葉県袖ヶ浦市坂戸市場 1431
<https://www.fureai-cloud.jp/sodegaura-showa-e>

3 研修内容

（１）大会テーマ（大会要項より）

今の時代は、将来の予測が非常に困難な「VUCA (Volatility (変動性)、Uncertainty (不確実性)、Complexity (複雑性)、Ambiguity (曖昧性)) の時代」と形容されている。その時代を生き抜くためには、現状では新しいものを創り出す創造力や、他者と協働しチームで問題を解決するといった能力を育成する教育が求められている。この多様な価値観にある社会の中で、教育の目標である「人格の形成」を実現させていくためには、学習者を含めステークホルダーが、学びをただ「受けとる」のではなく、「どう学び、何ができるようになるか」を共に考え出し、互いに助け合う時代を迎えていると言える。こういった現状を踏まえて、第 48 回関東甲信地区中学校英語教育研究協議会千葉大会においても、「Inspire! 「使える」にシフトする英語教育の推進！」を主題とし、副主題を「～主体的に学び、楽しみ、発信し、仲間と深め合う授業の創造～」とした。そこから主題に迫るために、各分科会において、教師が英語で既習の知識を使えた実感できるような言語活動の充実に向けて研究を重ね、小中高において、「Enjoy English」から「Improvise in English」、そして「Debate in English」等、これらの活動を通して、主題「Inspire 使える」に迫っていった。

（２）視察校における授業の実践

第 1 分会：言語活動の充実

「英語運用能力と学習意欲の向上を目指した、技能総合型の言語活動に迫る。」

昭和小学校では、上記のテーマのもと、①歌で慣れ親しんだ表現を使って、写真やイラストの様子を伝える活動は、自分の思いを伝える力を高めることができるか。②写真やイラストの様子を伝える活動は、語彙力を高めることができるか。という課題を設定し、研究を進めている。研究の実践方法としては、以下の通りである。

- ① 2 つのイラストについて、ALT の 1 ～ 3 つのヒントを聞き、どちらの絵について話しているのか児童に当てさせる。
- ② ALT のヒントを児童にも繰り返し発話させて、どんな言い方ができるのか全体で共有する。
- ③ 児童はペアになり、一方が絵についてヒントを出し、相手に当てさせる。1 回戦はヒントを 1 つ、2 回戦はヒントを 2 つ、3 回戦はヒントを 3 つ以上と、徐々にヒントを増やしていく。
- ④ 1 回戦の後に中間指導を行い、言いにくい表現やわかりにくい表現を全体で共有する。
- ⑤ 3 回戦の後に、代表児童 1 名にヒントを出してもらい、全体で考えて当てさせる。

電子黒板を用いてイラストを表示するほかにも、一人一台端末を用いて、ALT が作成した動画を視聴し、分かったことを伝え合う活動を通して、自分が気付いたことや聞き取ったことを積極的に話そうとしている姿が見られた。

（３）県外提案

- ① 「読むこと」を通して生徒のアウトプット（リテリング）の充実を図るための指導の工夫（相模原市小山中学校）
- ② 相手にわかりやすく自分の言葉で説明することができる表現力の育成について～ Picture Describe を中心とした Retelling を通して～（日立市立多賀中学校）

リテリングとは、インプット（聞いたり読んだり）した内容を、自分の言葉でアウトプット（話したり書いたり）して伝える活動である。必然的に 4 技能のうち複数の技能が統合される活動である。成果について以下の点があげられる。

〈成果〉

- ・リテリングの言語活動により、既習の英語表現や新出文法事項の英語使用の正確さを高めることにつながった。
- ・「事実や自分の考え、気持ちなどを整理しながら簡単な語句や文を用いてまとまりのある内容で話すことができる」ことに繋がった。
- ・音読活動を通したインプットの充実では、決まった表現や新出語句などを身につけることができた。
- ・Picture Describe を通したアウトプットの充実については、繰り返し練習を行ったことで、使いたいフレーズを精選し、友達や教師からの助言で語彙や表現の幅を増やすことができた。
- ・言いたかったけれど言えなかった表現を全体で共有する、ALT のデモンストレーションを全体で確認するなど、中間指導を充実させることで、課題に取り組む必要感をもって生徒の英語表現の幅を広げることもできた。

〈課題〉

- ・音読活動については、授業計画を大きく変えることなく実践することができたが、Picture Describe は、主な帯活動として毎時間設定してきたため、他の活動時間を短縮してしまうことがあった。
- ・繰り返し練習を行った際のRetelling では、初めて取り組む活動・話題ではなくなるため、即興性に課題が残った。
- ・教科書本文の再生（リプロダクション）にとどまってしまい、なかなか自分の言葉で表現することができないのが現状である。

4 感想

自分が外国語活動や外国語の授業を行う上で、言語活動の行い方や扱い方、評価へのつなげ方に課題を感じていたこともあり、言語活動の充実をテーマにしている第一分会を選んだ。授業を参観して考えたことが二つある。一つ目は、一人一台端末の活用の仕方である。授業の中では、タブレットを活用し、授業が始まるまでチャンツを聞いたり、ALT が作成した動画を見て情報を聞き取ったりする活動が行われた。自分のペースで聞けることや、聞き取れなかった部分を何度も繰り返し聞けることで、児童たち一人一人が安心して活動に臨むことができたと思った。ALT の活用の仕方としても、授業内で発音の手本になるだけではなく、動画を作成してもらうことで、授業内で練習した場面と似ている新しい会話を聞く経験につながり、さらに、授業で習った文章や単語が聞き取れるという成功体験にもつながるため、とてもよいと思った。二つ目は、言語活動についてである。上記の研修内容（２）視察校における授業の実際③で記載した活動では、何度かくり返し行うことで児童も活動に慣れ、さらに、徐々に伝えるヒントの数を増やすように指示することで、頑張って伝えようとする姿も見られた。同じ絵を使い、何度も繰り返すことで児童が安心して活動に臨んでいる様子が伝わってきた。一方で、限定された言葉を指定された数だけ伝える活動では、昭和小学校が課題としてあげていた「語彙を増やすこと」にはつながるが、「自分の思いを伝える力を高められるのか」というところにつながるのか疑問が残った。ここでの「自分の思い」というのが、自分の考えや気持ちではなく、条件が与えられている中で自分が意図した絵を伝えたり聞き取ったものを伝えたりすることであるなら、「自分の思いを伝える」という課題は達成できると考える。しかし、生活の中で外国語を使って話したりする場面を想定すると、必ずしも「自分の思い」が目で見た絵や聞き取った単語であるとは限らない。語彙を増やさなければ、そもそも思いを伝えることは難しいが、増やした語彙を会話の中でどのように使うかも大切であるとともに、授業で得た語彙が実用性のあるものばかりであるとは限らない。しかし、実用性や練習ばかりに意識を向けてしまうと、英語を楽しく話す雰囲気作りにつながることが難しくなってしまう。語彙を増やすことや実用性を兼ねること、難しくなりすぎずに楽しい雰囲気での授業をすることなど、様々なバランスを考えて言語活動を考え、設定することの難しさを改めて実感した。本研修を通して、言語活動における繰り返しと即興性のバランスを考えながら、児童にどんな力を身につけさせたいのかを明確にして指導にあたることが大切であると実感した。

- 1 派遣期日 令和 6 年 8 月 4 日（日）
- 2 派遣先 学校名（会場名）宇都宮大学峰キャンパス
所在地 栃木県宇都宮峰町 3 5 0
<https://www.utsunomiya-u.ac.jp/>

3 研修内容

(1)大会テーマ

第 5 2 回全国性教育研究大会は「すべての子どもたちに夢と希望が膨らむ性教育を」というテーマで行われた。子どもたちの人格の完成と豊かな人間形成を究極の目的とする性教育は、ブーム的な勢いだけで注目される実践に偏ったり、後ろ向きに低迷したり停滞したりすることがないような取り組みを求められている。半世紀にわたって開催されてきた本大会の蓄積されてきた成果を踏まえて、我が国の性教育の課題を明らかにし、さらにはその解決・改善に向けた戦略について活発に議論されることを目的とする。

(2)課題別講義、話題提供

講義：性に関する個別指導の意義と可能性

社会構造や生活環境の変化により性に関する健康課題も多様化・複雑化している中で、学校における性に関する指導の充実を図ることが、その改善や解決に向けて最も着実な取り組みである。

・個別指導の定義

「個別指導」とは、学習指導要領に基づく保健教育の着実な実施の下で、児童生徒一人一人の健康に関する興味や関心、発育・発達や保健の学習課題等を踏まえた個別の指導といえる。すなわち、一人一人の資質・能力を高めていくことを念頭に、基礎的・基本的な知識及び技能の習得も含め、児童生徒が自身の課題を解決できるようにするための指導である。また、授業等における、その場で行う個別の支援や助言とは異なり、個別の児童生徒や任意の小集団を対象として意図的・計画的に取り組むものである。

・「個別指導」と「健康相談」の違い

上記のように、「個別指導」は目標とする児童像などを挙げ、そのための資質・能力を高めることを目標とするものであり、「健康相談」は問題の解決を目指すものである。また、「個別指導」は特定の小集団や個人を対象とする指導であり、1 人に対する指導だけを指すものではない。保健分野で上記の 2 つが混同して実施されていることが多いが、「問題解決を目的とする」か「本人の成長を目的とする」かで児童生徒へのアプローチが異なるため、違いを理解することが重要となる。しかし切り離して行うのではなく、併せて行うことが有意義である。“保健教育の推進にあたっては、今後も変化し続ける時代において新たな健康課題の解決に向けて必要な資質・能力の育成を目指し、「令和の日本型学校教育」の趣旨を踏まえて、保健教育としての「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図ることが望まれる”とされており、全体指導では理解が難しい児童生徒に対してや、全体指導よりも踏み込んだ内容を必要とする児童生徒に対して行う「個別指導」は性教育において非常に重要である。

話題提供：定時制高等学校における性に関する個別指導

定時制高校は学科によって授業の時間帯が異なることや生徒の多様性など多くの課題があるため、小中学校や全日制高校と比較した際に個別指導がより重要であると考えられる。

本講義では、ICT を用いた個別指導の可能性と個別指導例を聞き、グループ協議を行った。ICT を活用する利点を 5 点挙げていた。①時間・場所が限定されない②対面が苦手な

生徒も参加しやすい③不登校生徒に継続指導ができる④専門家の配信などを利用できる⑤家庭に情報を伝えられる。様々な登校の形式・家庭環境の生徒に対して指導をする際にICTの活用が効果的である。性暴力などの取り扱いの難しい内容についても動画配信による個別指導を行うことで、参加する生徒同士で参加の有無を知ることがないため安心して参加することができ、参加生徒を指名する場合も参加がしやすく指導も行いやすい。また、専門的な情報を得ることができる。

育児中の生徒の話から妊娠・出産・育児に関する個別指導を行ったり、月経にまつわる不調のある生徒を集めて実際に婦人科を受診している生徒の話を聞いて情報交換を行ったり、生徒の多様性を生かした指導を行ったりしている。そこから健康相談につなげ、必要に応じて保護者や保健医療機関との連携を図る。参加の呼びかけについても生徒同士で声を掛け合って参加することもあり、指導が充実している様子である。

グループ協議では、小学校の養護教諭や保健主事が集まるグループに参加した。異なる地域の健康課題について話を聞き、似た事例を挙げ協議した。特に、小学生への個別の指導について、同じように方法を模索している状況の養護教諭が多いことがわかり、現状とどうしていききたいかを共有し協議することができた。

4 感想

健康相談と個別指導の違いを理解することが重要であるということを強く意識する機会となった。今まで、一人一人への個別の対応をする際、健康相談と個別指導の違いを意識せずに問題解決を目標としていたが、健康相談と個別指導の違いを意識することでより効果的な指導ができるのではないかと感じた。また、小規模集団を対象とした個別指導が必要だと思われる児童を集めて指導をすることの有効性を感じると同時に、その難しさも感じたが、同じ校種の教諭や養護教諭と共有し協議する時間もあり、とても有意義な時間となった。

講義を受け、協議した内容としては①個別指導を行いたいと思う内容について②個別指導を行うタイミングと対象者の集め方③小学生にどこまでの指導が必要なのかの三点である。

まず、個別指導を実施できているかどうかが話題に上がった。男女に分かれ性に関する指導を行っている学校がほとんどであったが、それ以外で実際に行われている個別指導は少なく、時間の確保や召集の難しさから健康相談になっている場合が多いという現状であった。本来であれば個別指導を行いたいができている内容として、生活習慣病（肥満）関連や性に関する指導が挙げたとともに、個別指導が必要な児童の選び方をどうするのか、という点についてほとんどの人が悩んでいた。対象者を絞った（小集団に対する）個別指導の時間を確保するためには、授業を抜けるか休み時間に集まる必要があるため、誰が個別指導の対象になっているかがわかりやすくなってしまふ。そのため、今後問題を抱えそうな児童や肥満傾向の児童を選んで指導を行った場合、本人がどう感じるか、また保護者がどう感じるかなどを考えると選び方に困るという意見が多かった。健康相談を行う段階より軽度で広い範囲の児童を集めて保健指導を行いたいという意図と反して、個別で行う健康相談以上に周りの目が気になったり時間をしっかりと設定することが求められたりするため難しいと感じる。選択制にするという案も出たが、小学生は高校生などと比較して、実施する側の想定した児童が選択しないことが考えられる。個別指導を円滑に行うためには、普段から自分の健康に関して関心のある児童の育成が重要である。話題に出た2点の個別指導を行う場合、どのような内容で実施したいかという話題では、肥満指導に関しては実際に行っている健康相談の内容を挙げ、未然防止的な方向性で個別指導を行うと良いのではないかという意見が出た。また、性に関する指導に関しては、話題提供で取り扱った授業（性暴力や婦人科受診など）を行ってみたいという意見が出た。定時制高校に通う生徒との発達段階や生活環境の違いを踏まえると、小学校での実施は難しいため、発達段階に応じた指導や成長していく段階で教育を受ける機会を逃さないための基礎を作る指導を行う事が必要である。そのために、自己肯定感の育成や基本的な保健体育の知識をしっかりと身につけることが重要ではないか。養護教諭としてできることとして、①健康相談の充実②広く正しい知識を身につけておくこと③児童が話しやすい雰囲気・関係作り④保健体育の授業に積極的に参加することなどが挙げられる。本講義で学んだこと、感じたことを忘れずに積極的に個別指導に関わっていく。また、普段と違うコミュニティの方々と意見交換をする場はたくさんの発見と学びがあり、非常に有意義な時間であった。今後も積極的に研修会などに参加したい。

1 派遣期日 令和6年10月4日（金）

2 派遣先 学校名 横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校
横浜国立大学教育学部附属鎌倉中学校
所在地 神奈川県鎌倉市雪ノ下3-5-10
<https://fuzokukamakura.ynu.ac.jp/>

3 研修内容

令和6年度 横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校
横浜国立大学教育学部附属鎌倉中学校
小中合同研究発表会

研究主題 自己実現と共生を軸に据えた教育課程の創造
～生活に生きる力の育成を目指した授業デザイン～

（1）研究発表会の目的

- ① 横浜国立大学教育学部附属小学校、同中学校が共同で研究してきた、より良い学校教育を目指した取組を、「地域に寄与するモデル校」として提案する。
- ② 県内外より多くの参観者を招き、本校が提案する取組を基に、より良い学校教育について協議し、明日からの子供たちの学びに生かす。
- ③ 研究的立場の横浜国立大学の教員と行政的立場の神奈川県教育委員会の指導主事、そして、実践者である本校教員の共同研究という研究スタイルの普及を図る。

（2）研究構想について

① 自己実現の3つの姿

ア 「〇〇したい！」「〇〇になりたい！」をもっている姿

「子供は生まれながらにして有能な学び手である」という子供観がある。そこで、子供一人ひとりの思いや願い・個性を大切にしながら、教師が授業を展開していくことで、子供の「〇〇したい！」「〇〇になりたい！」という姿を引き出していく。

イ 解決のすべを知り、使っている姿

子供が、生きていく実生活や社会生活で起こる様々な問題に、適切且つ個性的・創造的に解決できるようになることが求められる。そこで、生活場面での探求を重視し、具体的には、生活科や総合的な学習の時間、特色ある行事を大切にすることで、実生活や実社会に関わる探究的な学びを充実させていく。さらに、各教科の目的を明確にした上で、生活場面で有効に働く汎用的な力や生活場面に生きる力は何かを整理していくことで、解決のすべを知り、使っている姿を培っていく。

ウ 目的の達成に向けて、繰り返し取り組もうとする姿

全ての教育活動の中で、目的を明確にしながら子供が主体となって活動していくことであり、その目的を達成するために粘り強く、繰り返し取り組む姿を想定している。これが自ら主体となって探究する姿であり、時間をかけて目的に向けて試行錯誤し、達成感・成就感を得ることで情意面が育成され、「〇〇したい！」「〇〇になりたい！」をもっている姿に繋がっていく。

② 共生の姿 ～一人ひとりの違いを理解し、よりよい社会生活の在り方を追求している姿～

「一人ひとり違うということの理解」を前提として、クラスやグループで共通の目的を達成するような活動を取り入れ、最適解や納得解を見出す活動を位置付ける。具体的には、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させながら教育活動を展開し、共生の意識を高めていく。

③ 教科D S と授業D S ※D S・・・デザインシート

教科D Sは、「その教科で付けたい力」（小中教科部で育成を目指す力）、「願う子供の姿」（教科で付けた力を、実生活や実社会で発揮している子供の姿）、「小中の取組」（小中共通しての取組・手立て）をワンペーパーでまとめたものである。授業D Sは、教科D Sの考え方をもとに、重点的に取り組む内容を示したものである。いずれも「子供に付けたい力」で語ることに特色がある。

(3) 授業の実際

- ① L I F E（生活・総合） 5年1組 奥平 直子 教諭
単 元 名 （仮）フードロス×伝統文化

【見どころ】

自分たちと社会の抱える問題として「フードロス」を解決したいと考えた子供たち。「もったいない」という気持ちを大事にしてきた日本の「伝統文化」を掛け合わせることで、問題を解決できるのではないかと考え、解決に向けて自分たちにできることを探究している。

- 特 徴 ・「SDG s」といった、今日的な課題。
・子供が学び続けるエネルギーの源となるテーマ設定。
・思考のつながりと学び（学習内容）のリンク。
・「家庭科」と「社会科」の合科的な取組。
・自己決定の場と、思考をグループ内で共有する場の設定。

- ② 国 語 科 2年1組 高橋 裕樹 教諭
単 元 名 読みの創造『走れメロス』を題材に ～「リテラチャー・サークル」という方法～

【リテラチャー・サークル】

アメリカで開発された読書指導法。参加者がそれぞれ異なる役割を担った状態で読書に臨み、読了後の話し合い活動を通して学びを深めていく。

〈コネクター〉

自分とのつながりを見付ける。

〈クエスチョナー〉

問題を提起する。

〈リサーチャー〉

作者やテーマなどを研究する。

〈イラストレーター〉

目に浮かんだ情景などを絵にする。

〈リテラリー・ルミナリー〉

優れた表現や印象に残った言葉に焦点を当てる

- 特 徴 ・リサーチャー・サークルを通した、自分自身の「読み」の創造。
・創造した「読み」を、級友と共有。
・他者の「読み」を参考に、自分自身の「読み」を振り返りながら、考えたことをまとめる場の設定。

4 感想

「L I F E」の授業については、カリキュラム・マネジメントの視点をもって参観した。生活科・総合的な学習の時間を柱とした、子供の視座での授業づくりについて研修を深めることができた。

国語科の授業では、「リテラチャー・サークル」新たな「読み」の手法について学ぶことができた。アウトプットとインプットがスムーズに行われる手法であり、今後の授業実践において、子供に付けたい力と関連付けながら活用していきたい。

- 1 派遣期日 令和6年8月3日（土）～4日（日）
- 2 派遣先 第67回 筑波学校体育研究会・夏期研修会（筑波大学附属小学校）
所在地 東京都文京区大塚 3-29-1
<https://www.elementary-s.tsukuba.ac.jp/>
<https://www.catv296.ne.jp/~tsukuba-taiiku/>

3 研修内容及び感想

1) 授業研究「第3学年 おりかえしの運動 前へならえそくてん」

授業を参観した後に研究協議を行った。「おりかえしの運動」では、その一定期間の単元のみでなく、長い期間をかけて行い、少しずつ子供に基礎感覚づくりを行っている。身に付けさせたい基礎感覚とは、「逆さ感覚」「回転感覚」「腕支持感覚」「手足の協調」「振動感覚」「ボールの投補」「相手のいないところを見つける（ボール運動）」「潜る・浮く」「リズムに合わせて動く」である。

質疑応答では、質問で「ICTの活用はしないのか。」とあったが、『ICTを使わなければいけない』となつてはいけない。必要があれば使ってもいいし、使う必要がないなら無理に使う必要はない。』との回答であった。タイムパフォーマンスを考えると必ずしも使うことが正しいとは限らないということである。確かに、子供どうしの観合いで、十分に他者評価や学び合いできていたし、わざわざ時間をかけて機器の準備をするより、運動頻度を保証する方が大切である。ICT機器のための授業となつてはいけない。

2) 講義「どうやるの？コンピテンシーベースの体育授業への転換」

「コンピテンシー」とは「思考力・判断力・表現力」のことであり、「コンテンツ」が「知識及び技能」のことである。これからの教育はコンピテンシーベースとなっていく傾向であるが、大切なのは、「何が問題であるのかを見付ける力」「原因がどこにあるのか（困り感）を考えていくこと」である。シンプルな授業で多様な学びができる。その一方で、様々な学習の場の設定や習熟度別の指導では多様な学びにつながるかは微妙なところである。

子供たちに寄り添った授業をととして、「課題並列単元」の授業が提案された。従来の単元計画はスモールステップが教師によって配列されているが、「課題並列単元」では、様々な子供のつまづきを局面ごとに想定し、子供の困り感に合わせて課題を決めていく学習である。課題並列単元の難しいところは、教師側にある。各教材に対して教師側がポイントをしっかりとおさえる必要がある。

3) 実技研修「マット運動」

「前転」の前段階として、「ゆりかご」が大切な運動となる。「ゆりかご」には「小さいゆりかご」と「大きいゆりかご」がある。初めのたては、膝を抱えた小さいゆりかごでもいいが、半径が小さすぎて、振動まで小さくなってしまう。しゃがんだ状態から後ろに倒し、しゃがんだ体制に戻る。「後転」の補助は、ゆりかごが一番倒れた状態から膝を曲げ、「せーの」でタイミングをとり、補助者は「腰を持ち上げ」、実施者は「曲げた膝を伸ばす」とうまく起き上がれる。

4) 実技研修「ボール運動ネット型」

中学年でのネット型ゲームにおいて、連携型のゲーム、キャッチバレーやプレルボールを易しくしたゲームであっても、実施が難しいことから、「ハンドアタック（3年生を想定）」と「キャッチ・ハンドテニス」の提案であった。ハンドアタックは、自陣が4m×4mのコートにコーンとバーでネットを作り、下手投げで相手コートにボールを入れ、それをキャッチして、同様に相手コートに投げ入れ、相手がワンバウンドでキャッチできなかったり、コート内に投げ

入れられなかったりしたときに得点の入るゲームである。準備物も少なく、手軽に実施できるゲームであった。

5) 授業研究「第5学年 水泳」

ほとんどプールサイドに上げないのが印象的だった。教師が笛を「ピッピッピッ」と鳴らすと注目の合図だった。低学年から「わにさん歩き」「わにさんバタ足」「いかだひきバタ足」と「泳ぐ」を意識した運動を入れていた。学習指導要領によると低学年では、「泳ぐ」には触れていないが、高学年の「クロール」「平泳ぎ」につなげることを考えると必要だと述べていた。

子供たちみんなよくできる印象であるが、中には、不格好な泳ぎの子供もいた。しかし、教師がどこまでの完成度を求めるかにもよる。授業者がいう通り、「クロールもどき」「平泳ぎもどき」にたどり着けばおおむね満足なのではないだろうか。求めすぎないことも大切である。

特に水泳の学習では、習熟度別の学習形態を選択しがちだが、授業者は習熟度別学習では学び合いや学習評価が成立しないことを指摘している。さらに、佐藤（2004）は、「習熟度別学習は、技能差を広げてしまう恐れがある。」と指摘している。スイミングスクールに習いに行っている子供がいる前提で授業を考えていく必要がある。

6) 講演「学習指導要領改訂に向けて考えること」

学習カードに「課題」「次にどうする？」

思考や判断は何のためにするの？意欲がなければ思考しない。特に単元前半に技能の習得をしっかりしてもいい。教えることはしっかり教えましょう。単元後半で子供たちに任せる。

「知識・技能」「思考・判断・表現」をバランスよくというけれども、軽重はつける必要がある。実態によっては、一斉学習もあり。

新学習指導要領では、「思考力・判断力・表現力」がより重要視されたり、「ターゲット型」「アダプテッドスポーツ」等の項目が付け加えられる可能性が示唆されたりした。

7) 実技研修「なわとび」

「短なわ」を活用した技能講習であった。使用する「なわ」にもポイントがあった。「中身が詰まったなわ」、「長さは、なわを踏んでグリップの高さで調整」、「初心者は長め、上達してきたら短くしてもよい」、「グリップの中で結び目をつくらない」等である。

短なわの学習は、なわとびカードを持たせて自習に近い形の授業が目立つ。段階を追えば多くの児童は、二重回しができるようになる。

4 研修の成果

研究テーマに「ICTを活用した～」とICTありきのテーマが掲げられている例をよく見かけるが、このテーマでは、ICTのための研究になってしまう恐れがある。幅広く物事をとらえ、子供たちの成長に本当に必要なことは何かを考え、ICTありきの研究にならないように留意しなければならない。子供達が「できる」「わかる」「かかわる」を実感できる体育授業をめざして今後も研究を行っていききたい。

上記のように研修内容を書面に報告をまとめたが、より研修の成果を発揮するには、提案授業や伝達講習会等を実施し、多くの先生に体感してもらうことが重要だと思う。そのような機会を設けていただけたら幸いである。

5 引用・参考文献

近藤智康（2024）学習指導要領の改訂に向けて考えること．研究会講演資料．

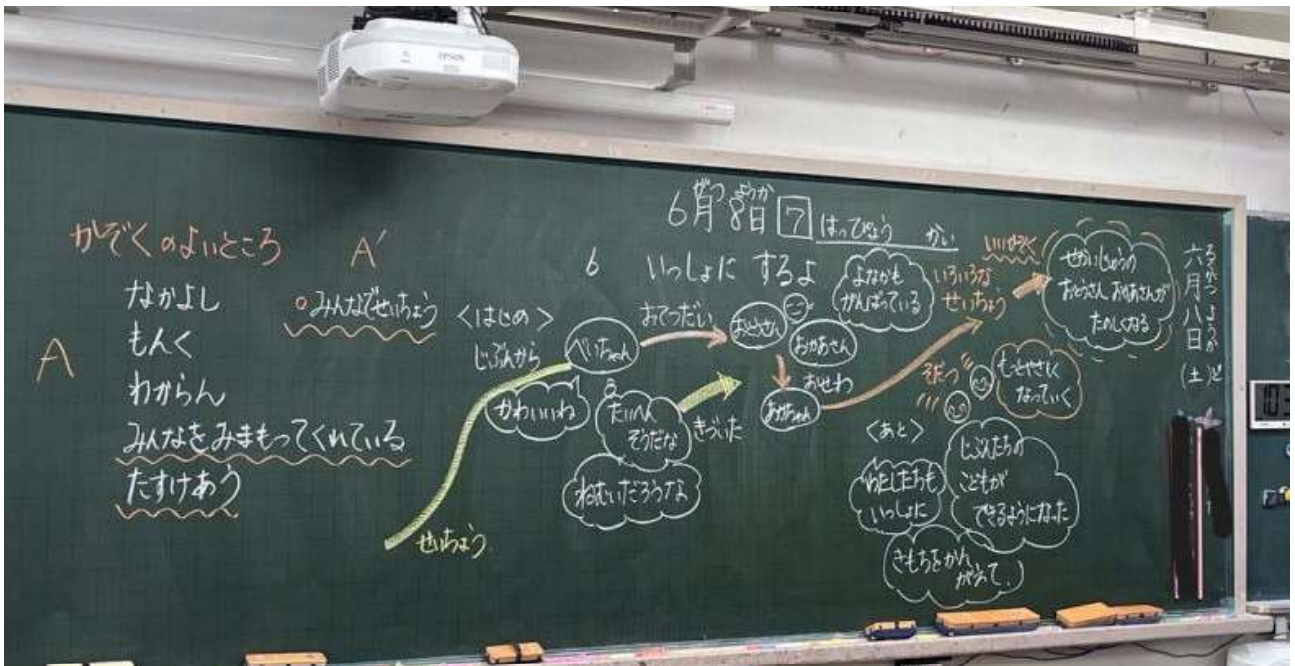
佐藤学（2004）習熟度別指導の何が問題か．岩波書店．

- 1 派遣期日 令和6年6月8日(土)～6月9日(日)
- 2 派遣先 学校名 筑波大学附属小学校
所在地 〒112-0012 東京都文京区大塚3丁目29-1
<https://www.elementary-s.tsukuba.ac.jp/>

- 3 研修内容
研究テーマ
違いを編む『知性』第1年次
ー「違いを編む『知性』」とはー

(1) 公開授業

- 学年：第1学年 教科名：道徳科 授業者：加藤 宜行先生
- 主題名「かぞくのためにできること」
- 教材名「いっしょにするよ」
- 授業の流れ
 - ・これまでの家族との関わりについて考える。
 - ・主人公とその家族のよいところについて話し合う。
 - ・体の成長だけではない「心の成長」について話し合う。
 - ・これからの家族との関わりについて考える。



○協議会

- ・綺麗事ではない本音を引き出せるように、極端な例を出して考えさせるとよい。
- ・考える練習をさせることで、見えないものを見ようとするができる子どもを育てる。
- ・子どもにとって一番の刺激は「これってどういうこと？」と問い返すこと。
- ・低学年のたどたどしい発言も、本質をすくい上げてあげることが大切である。
- ・煽ったり、わざと言ったりするのではなく、「ちがう。」と言える学級をにしたい。

(2) 公開授業

○学年：第3学年 教科名：道徳科 授業者：山田 誠先生

○主題名「友情、信頼」

○教材名「ないた赤おに」

○授業の流れ

- ・大切な友達について考える。
- ・赤鬼はどんな思いで立て札を立てたのか、赤鬼は青鬼を殴っているときどんなことを考えていたのか、赤鬼は青鬼の残した張り紙を見てどんなことを思ったのか等について考える。
- ・旅に出た青鬼をようやく探し出した赤鬼は、青鬼にどんな言葉をかけるのか、赤鬼はどんな受け答えをするのかを考え、役割演技を行う。
- ・今日の学習で分かったこと、これからやってみたいことを感想シートに書く。



○協議会

- ・道徳教育の最終目標は、道徳的な行為の実行である。道徳科では質の高い多様な指導方法を活用することが大切である。
- ・役割演技において、教師が相手役になってしまうと、教師に付度してしまうことがある。
- ・役割演技では、中心発問の場面や教材のその後の場面を取り上げるとよい。
- ・役割演技を効果的に活用することにより、道徳的諸価値の実感的理解につながる。

4 感想

2本の授業を参観し、授業者が、多様な思考を整理しながら板書し視覚化する様子や、するどい問い返しをすることで児童がさらに思考を深める様子が、大変参考になった。また、授業者が児童のつぶやきを取りこぼさず拾って本音を引き出す様子も興味深かった。

協議会では、「考え、議論する道徳」を低学年で実践することの難しさについて話題に挙げたが、授業者の「低学年だからできない、まだ無理と考えるのではなく、低学年だからこそ可能なこともあるのでは。」という言葉が印象的であった。私は今年度2学年の担任をしているが、低学年の児童の純粋でまっすぐによさを見極め、本質に近づこうとする気質を大切にして道徳の授業を行いたいと考えた。今回の先進校視察で得た知識や指導法を生かして、よりよい道徳教育の実践に繋がっていききたい。

- 1 派遣期日 令和6年10月11日
2 派遣先 学校名 静岡大学教育学部附属静岡小学校
所在地 〒420-0856 静岡県静岡市葵区駿府町1-9-4
<http://fzk.ed.shizuoka.ac.jp/shizusho/>

3 研修内容

(1) 研究主題について

静岡大学教育学部附属静岡小学校（以下静岡小）における前研究『夢中になる』において、「〇〇したい」の先にあるその子の目的に着目し、実践における児童のあらわれを分析した結果、『夢中になる』対象やタイミング、プロセスは当然児童によって違いがあるものの、ときにそれらの夢中が影響し合い、児童は、その子らしさをあらわにしながら語り合ったり表現し合ったりしていた。このような、その子らしさがあふれる姿に魅力を感じるとともに、その姿の背景に目を向け、児童の内面に寄り添った研究を一層大切にしていきたいと強く考えた。また、授業において、その子にとってその教材との出会いがどのような意味をもつのか、その子に何を願ってそのかわりをするのか、といった教師の役割の具体についても問い続けることの必要性を感じた。これらのことから、目の前の児童と真摯に向き合い、『その子らしく学ぶ』児童を支えていくことで、児童という存在がもつ可能性や在るべき教育の原理を追究することができると考え、今年度の研究主題を『その子らしく学ぶ』と設定した。

(2) 理科における『その子らしく学ぶ』

児童は、自分なりの見方や考え方を働かせながら、問いの解決に向かい、学び進めてきた。その過程で目にした現象について、児童が自分なりの見方や考え方を働かせながら追究を進めてきたことで、目にした現象の一つ一つがその子の中に積み重なっていった。その積み重ねによって考えが形づくられていくことは『その子らしく学ぶ』よさであり、自分の見方や考え方をさらに広げたり深めたりしながら、考えをより確かなものにしていくことは、より自分事として追究の道筋をつくっていく学びにつながると考えた。

このことから、「自然事象に出合った子どもが、自身の意図を徐々に明確にして対象にはたらきかけたり、明確な意図をもって対象にはたらきかけたりし、自身の目的に向かって、自分なりに実験方法を考えたり、自分の実験にこだわって考えをつくったりしながら、自分事として追究していく」ことを理科における『その子らしく学ぶ』と定義した。

(3) 公開授業参観

① 第5学年 理科「流れる水のはたらきと土地の変化」 授業者：後藤 大紀先生

前次までの活動で、同じ川であることを伏せて上流・中流・下流の3枚の写真を並べ、率直に気付いたことを発言させていた。その後、すべて同じ川であることを児童に伝えると、川幅や石などに着目し、児童はどれが上流でどれが下流か自分なりの根拠をもって考えていた。また、実際の川の様子から自分の考えがもてるよう、下流から上流にかけてドローンで撮影した川の映像を提示すると、事実を共有しながら問いの解決に向かって学びを進めていた。

本時の学習では、「川幅の変化には何の関係しているのか」という課題を設定し、授業を展開していた。ドローンの映像から、上流では川幅が狭く、下流にかけて広がっていることを見出した後、なぜそのようになっているのか、児童が自分の考えを次から次へと発表している様子が見られた。友達の意見に自分の意見を付け加えたり、反対意見を述べたりと、自由に議論できる雰囲気が作られていた。また、黒板を使って絵を描きながら説明していたり、水筒の水をこぼしたときの水の広がり方から傾斜による川の広がりを説明していたりと、自分の考えを工夫して伝える児童が見られたのも印象的だった。

授業の後半では、児童は意見交換をする中で、まだ不確かな部分が多いことから自分た

ちの考えに「ズレ」があることを認識し、自分の意見が正しいと根拠をもって説明できないことに直面していた。ここで教師側が、根拠をもって説明できるようになるために、実験をして確かめてみるように促す発言をすると、どんな実験をすればよいか意見を出し合う児童の姿がみられ、問題に対して自分事として追究していくことができる学びになっていると感じた。

② 第3学年 理科「音の性質」

授業者：相馬 一允先生

前次までの学習で、「ジャンピングビーズ」という音の力でコップに張った膜を振動させ、飛び跳ねる様子を観察できる自作教材（右図）を教師が配付し、児童はビーズが跳ねる様子を観察した。そこで児童は、どうしてビーズが跳ねているのかを考え始め、振動によって膜が動くことや声の大きさによって跳ね方が変わることなどに気づき、音とものの震えの関係についての問題を見出した。



本時の学習では、遠くから音を出すと「ジャンピングビーズ」が振動しない様子を観察し、理由を考えた。ここで、糸電話を想起し、間に振動する何かがあると音が伝わることに気付いた児童がいた。そこから、風船を間に入れると声が音が伝わり、ビーズが振動することを演示で実験すると、なぜ糸や風船で音が伝わるのか児童が意見を出し合い、糸や風船が震え、振動が伝わっていくことを見出していた。その後、自分の考えが合っているかを確かめるため、ビーズを中に入れた風船（振動すると風船の中のビーズが跳ねる）を一人ひとりに配付し、実際に実験をして確かめ、コップとコップの間に振動するものがあると音の振動が伝わることを確認していた。風船を2個以上つなげて試す児童も見られ、児童一人ひとりに合った教材があると学びが広がり、自分なりの見方や考え方を働かせながら追究を進める『その子らしく学ぶ』児童の姿が表出されたと感じた。

③ 研究協議・指導講話

- ・事象に対して予想（想像）をするが、根拠をもった説明をするには情報が足りないので、実験や観察を行って実際に確かめてみる。そして、根拠をもった説明ができるようになり、知識や理解が深まる。この流れが理科の学びである。
- ・資料を与えすぎたり、教科書通りだと学ぶ必要感がなくなってしまうので、児童が自分事として考えるためには、資料の選定や提示するタイミングが重要である。
- ・個別最適な学びとは自分事として考えることであり、協働的な学びとは、考えを深めるための学びであると考ええる。
- ・活発に意見交換する雰囲気があったが、広がりすぎてしまうこともあるので、児童の発言を大切にしながら意見を絞り、まとめる必要がある。

4 感想

どちらの授業でも、問いに対して自分の考えをもち、発表する児童が多かった。また、友達の意見に対して自分の考えを発言したり、思考を更新して新たな考えを構築したりする児童も見られ、友達の考えに触れることで、児童の見方や考え方の広がりや深まりにつながっていることを感じた。なかなか発言しない児童もいたが、発表はしなくても友達の意見を聞く中で、ワークシート上で考えを深めている様子が見られたのも印象的だった。

第3学年では自作教材を活用し、一人ひとりが実体験をもとに学ぶことができる点が非常に魅力的で、自作教材などを活用して児童の学ぶ機会を保障することの大切さを改めて実感した。児童が自分事として理科を学んでいくために、児童一人ひとりに「なぜ？」や「どうして？」という問いや疑問をもたせられる学習指導を行っていききたい。さらに、児童自身の目的に向かって追究していく道筋を支えるために、その児童の意図を捉える機会を大切に、追究したいことを実践できる学習環境を整備していきたい。

- 1 派遣期日 令和6年 8月 19日（月）～ 8月 20日（火）
- 2 派遣先 学校名（会場名）東京富士大学
所在地 東京都新宿区高田馬場3-8-1
<https://www.fuji.ac.jp/>

3 研修内容

【1日目（8月19日）】

①招待講演「生成AI（人工知能）の教育利用

～子どもの知識活用力と創造力を育てる授業実践～

講師 田中 博之 氏（早稲田大学教職大学院教授）

NextGIGAのポイントは、情報活用能力の育成だけでなく、それと教科領域の固有な資質・能力、知識活用能力、創造力を関連付けながら育成を図ることである。

中学校2年の外国語科では、「10年後の自分に手紙を書こう」というテーマで、英語で書いた文章をAIに読み込ませ、文法や語順、スペルチェック等のアドバイスをさせるという実践を行った。この実践では、生徒一人につき教師が一人付いているような形で文章作成・チェックができるため、効率的に学習を進めさせることができた。

小学校5年の図画工作科では、鑑賞の「美しい風景」の学習において、AIにプロンプトを入力して絵を出力し、その絵を各々が思う「きれいな絵」にするためには、色使いをどう変えるべきか、どんなものを絵に描き加えるべきかなど改善点を考え、何度もプロンプトの文章を推敲して出力することを繰り返しながら鑑賞する、「創造的鑑賞」としてよい実践になった。

AIを教育利用する際は、基本原則として「初めは自分で考える」とことと「生成物に責任を持つ」ことが重要であり、AIは、「対話をしながら考えを深める」とことや、「情報の真偽を確かめる」ことに使うなど、AIに頼りきり、丸投げにならないような活動の工夫が必要である。

②パネルディスカッション・ワークショップ「AIがもたらす教育への影響ver2」

TEAM「教育×生成AI」 安藤 昇 氏（青山学院中等部）

鈴木 秀樹 氏（東京学芸大学附属小金井小学校）

安井 政樹 氏（札幌国際大学）

生成AIの進歩によって、教育の現場でもAIを取り入れることが不可避となる時代が迫っている。しかし、生成AIを活用するにあたっては、生成AIがどのような仕組みで動いているかを理解しなければハルシネーション（生成AIとのやりとりが人間とのやりとりであるかのように感じたり、AIに頼ればなんでも正解が導けると思い込んだりすること）に陥る危険性があるが、小学生がそれを理解することは到底不可能である。そのため、生成AIについての態度を、体験を通して身に付けさせることが必要である。

鈴木氏の生成AIを活用した実践では、宿泊学習でお世話になった施設の方への手紙を児童が書いた後、生成AIに同様の内容でお礼の文章を生成させ、自分の文章と見比べた。生成AIに出力させると、それらしい文章ができあがるが、実際に体験したことや、施設の方から掛けていただいた言葉やしていただいたことが書かれていない文章になる。それを見ることで児童は、通り一遍の文章ではなく自分たちが実際に体験したことや感動したことを書くべきであることに気づき、自分の手紙にそういった事項を取り入れて書くことができるようになった。また、生成AIの利点として全児童に即時フィードバックが得られるということが挙げられるが、欠点として、毎回正しいアドバイスが得られないということが挙げられる。しかしその欠点を逆手に取って、生成AIが作成した文例に対して、納得がいかないと感じたことを言語化することで、自らの文章の考え直しに繋がった。例えば、文例を示す際、仮に教員が書いたり教科書の文章を提示したりすると、児童はその文章に対して反論にくく、みんながそれをまねしてしまっただけで自分なりの文章を作ることが難しくなってしまう。生成AIの活用はそういった課題に対処できる一つの方策として有用であっ

た。

現在の学校教育におけるICTの活用は、SAMRモデルにおけるS（代替：Substitution）の段階の活用が多く、紙でもできたことをデジタル化しているだけで、この段階ではデジタルの特性が発揮されていない。今後はA（拡大：Augmentation）の段階へと進み、デジタルの特性を活かして学習効果を伸ばしていくことが必要であり、その先のM（変容：Modification）、R（再定義：Redefinition）へと繋げていくことが重要となる。

【2日目（8月20日）】

③実践発表「超AI世代の教育」

発表者 澤井 進 氏（岐阜女子大学特任教授）

汎用AIは2027までに完成することが予想されている中、今後は生成AI等が生活の一部になった社会に生きることになる。その際必要となるのは、AIによる代替ができないような、新たな価値を生み出す力である。そのような力を身に付けさせるために教育が果たすべき役割は、児童生徒を、AIを使いこなした上で、人間にしかできないことができる、AI技術を越えた能力をもつ人材を育成することである。そのためには、まず教員がAIを理解することが教員の責任となる。その上で児童生徒には、科学技術に関する知識技能を身に付けさせるだけでなく、創造性や倫理観、共感力、批判的思考力といった、「人間」的能力を育んでいくことが重要である。

④基調講演「教育の力で、よりよい未来を創造するために」

講師 寺田 拓真 氏（広島県総務局付課長）

子どもはどのような仕組みで学ぶのかという「学習科学」の観点で考えると、生きていくために必須ではないことに挑戦する際、自発的な取組のうち道りや結果がどうなるか分からないことには子どもは主体的に活動するが、道りや結果がどうなるか分かっていることや、そもそも自発的ではなく強制的な取組には消極的になる。そのため、児童生徒が主体的に学ぶためには、自己決定の場を用意し、協働しながら学び自己有用感を感じられるようにすることと、外発的動機付けの程度を調整し児童の内発的動機に繋げていくことが重要である。

最近の教育現場では「個別最適な学び」の重要性が叫ばれているが、実践事例を見ると、個別最適ではなく孤立的な学びになってしまっている例が見られる。協働的な学びの場面と上手く組み合わせることで、真に個別最適な学びとなるような活動の場の設定が必要である。

○その他複数の講演、セミナー、ワークショップ（計8回）に参加し、研修を行った。

4 感想

技術の進歩に伴って、今後教育に求められる役割がこれまでとは大きく変容していくだろうという予測は以前からもっていたが、その変容の規模の大きさや具体的にどんな変化が必要で、教育に何が求められるようになっていくのかについて、本研修を通じて明確なビジョンをもつことができた。特に生成AIの発展とその教育利用、及びAI技術の進歩に伴う社会の変化予測やそれに備えるための教育について、これまではまだまだ先のことであったように感じていたが、既に教育現場で生成AIを活用した授業が実践されている事例もあると学び、より危機感をもって社会や教育の変化に備えなければならないと強く感じた。生成AIについてや、それを教育利用することの有用性や危険性、及びAIには困難で人間にしかできない能力について職員間で共有しながら、学校全体で変化に対応できるような用意を進めていきたい。そして、科学技術をより効果的に教育に取り入れ、AI社会の中人間にしかできないことができる、よりよい未来を拓く人づくりのために、今後も教育活動に勤しんでいきたい。

- 1 派遣期日 令和6年8月21日(水)
- 2 派遣先 会場名 コンフォール安田ビル 地下1階
所在地 東京都千代田区神田錦町2-9
https://www.elec.or.jp/teacher_training/elementaryschool_workshop
- 3 研修内容 文部科学省後援 2024年度ELEC小学校英語教育workshop
～今、小学校英語教育に本当に必要なこと～

(1) 8/21(水) 午前 講師 宇都宮大学教職大学院 田村 岳充
テーマ：豊かな言語活動を通して児童が主体的にコミュニケーションを図ろうとする授業を作る

① 言語活動とは…

- ・言語材料について理解したり練習したりするための指導とは区別される。実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うという言語活動の中では、情報を整理しながら考えなどを形成するといった「思考力、判断力、表現力等」が活用されると同時に、英語に関する「知識及び技能」が活用される。」
- ・相手意識と中身のある活動
- ・伝え合う目的や必然性のある場面
- ・「伝え合う」ことへの意欲が高まるような場面設定や題材
- ・必然性のある体験的な活動
- ・原稿を読むのではない

② 外国語の授業の目指すものは…

- ・なぜ外国語が好きになったのか → 「分かるから・できるから」ではなく、「楽しいから、なぜ学ぶのかが納得できるから、必要だと感じられるから」ではないか。
- ・賢人たちの教え
ジョン・ホルト(1964) …「子どもは教わるのは苦手である。子どもはもともと知的な存在である。しかし、学校で教師に認められよう、正しい答えを出そうと思うと、その思いだけで努力して、それ以外のことは忘れてしまう。そのため、もともと持っていた知性が失われていく。子どもは幼い頃から自然に周りのことに好奇心を持ち、真実を見極めようと真剣に考える、そんな存在である。」

③ 児童はどんな時に主体的に学ぼうとするのか

- ・自己関連性(自分事であるか、自分と関わりが感じられる)
- ・必然性(なぜ今そのことを学ぶのか、実感がわく、納得感がある)
- ・必要感(学んだことが何につながるのか、なぜ必要なのか、実感がわく、納得感がある)
- ・多様性(いろいろな考えや解き方、答えがある、自分らしさが生きている)
- ・自由度(決められたものを押しつけられない、でも自由すぎない)
- ・感受性(心が揺さぶられる、あこがれや尊敬の念が生まれる、やってみたいと感じられる)

④ CAN-DOリストとは

- ・どの単元で、どの活動で、どこまでの到達度を求めているのかが示されている
→リストのゴールを目指して授業を構想しているか

- 活動を実践しているか
- 指導と評価の一体化を行っているか

◎ゴールを見据えていくと、学習活動が変わる。小学校からの積み上げが、中学校へつながる。

(2) 8 / 21 (水) 午後 講師 文教大学大学院教育学研究科 金森 強
 テーマ：「英語を教える」から「英語で育てるへ」 ～中学校英語の前倒しになっていませんか～

① 教科化から5年…見えてきた課題

- ・音声言語としての英語教育の充実
- ・英語への苦手意識、英語嫌いを生み出さない
- ・中学校の前倒しにしない→中学校が「小学校の後おくり」
- ・小中の接続と連携の在り方
- ・小学校段階にふさわしい教育内容に
 知識としての学び → コミュニケーションの体験
- ・指導者養成、研修

② 小学校における英語教育の質の向上を

- ・覚えたことをくり返させるのではなく、自分の想いや考えを工夫しながら、相手に配慮し、適切に伝えようとする
- ・英文を暗記するだけ、英文を声にするだけの訓練ではなく、子どもたちに言葉の大切さやコミュニケーションの意義を感じさせる教育

③ 自身の想いや考えを表現するには

- ・思ったり、考えたりするための体験（受信活動）が必要
- ・心が動く、「耕す活動」
- ・発問、指示、活動の目的やゴールの明確化
- ・言語材料への慣れ親しみ → 既習の言語材料を総合的、統合的に活用する
- ・一方通行ではなく、相互のプラズマスパークから何かが生まれる

④ 小学校ならではの英語授業とは？

育てたい児童像、学級像を上位目標として明確に意識することで、教育課程全体を通して大切にすべき事が明らかになり、各教科において育てるべき事が何か、教材や実際の指導に具現化されることになる。

↓

子どもたちが表現したいこと、相手を意識した言葉の使い方、人間関係形成力の育成、協働学習の視点を大切にした内容。

4 感想

- ・ワークショップに参加して、外国語における言語活動の重要さが分かった。授業の中で、単語を発音することや作った文章を発表することは言語活動にはならないこと、児童が相手意識をもって必然性のあるやりとりを友達等とすることがよりよい言語活動になるということが分かった。豊かな言語活動を行うことで、児童の意欲が高まり、主体性が育まれることも理解できた。
- ・児童が主体的に外国語の学習に取り組むことができるように、授業のゴールを明確にもって授業づくりをすることが重要だということが分かった。児童が意欲的に取り組めるような活動やゴールを設定することや、CAN-DOリストを活用して毎時間の指導と評価を意識した授業を行うことで、自身の授業力向上につなげたい。

(1) 研究概要説明

その実現のために、三つの働きかけを行った。

- | |
|---|
| ① 児童に合ったカリキュラムデザイン
② 児童の心をゆさぶる教材提示
③ 児童に委ねる場の設定 |
|---|

これらの働きかけを実践したことで、自然と夢中と自覚を繰り返すようになり、これが児童自ら自然の事物・現象と向き合うことにつながると明らかにした。

（３）第１時公開授業 第５学年３組「物のとけ方」

本実践では、目に見えない「溶ける」という現象を捉えるために、①児童に合ったカリキュラムデザイン（全体で共通の実験を行い、その後個人で興味のあるものを調べる）、③児童に委ねる場の設定（複数の教材から児童が選択し、モデル図を使って問題解決する）といった手立てを講じていた。これは、目に見えない「溶ける」という現象に目を向け、モデル図を使って溶けるという現象を表現することで、より深く理解しようとするためのものである。目に見えない現象について「児童が夢中と自覚を往還できるようにする」ための手立てとして意識されていた。

実際に参観してみて、特に参考にしたいと考えたことは二つある。一つ目は、水に溶ける身近な物質の中から一つ調べたいものを決めて実験を行っていたことである。これによって、自分事として問題を解決できるようにしており、児童が主体的に問題の解決を行っている姿が見られた。もう一つは、水の中で起こっている目に見えない現象に着目し、ホワイトボードとマグネットを操作してモデル図を考えられるようにしていたことである。目に見えない世界を視覚化して思考させることで、深い学びへとつながっている姿が見られた。

（４）第２時公開授業 第６学年２組「てこの規則性」

本実践では、日常生活との関連を図りながら、身の回りでのこの規則性が活用されていることを捉えるために、①児童に合ったカリキュラムデザイン（日常生活にあるてこの規則性に気付く導入から身の回りにある道具の改善）、③児童に委ねる場の設定（思考したことを表現したり、自己決定したりできるモデルや大型装置の操作）といった手立てを講じていた。これは、身近に存在しているてこの規則性に目を向け、より深く理解しようとする姿にするためのものである。てこの規則性について「児童が夢中と自覚を往還できるようにする」ための手立てとして意識されていた。

実際に参観してみて、特に参考にしたいと考えたことは二つある。一つ目は、結果を整理して考察した後、学級全体に結果と考察内容をアウトプットさせていたことである。授業全体の中で、考察の時間やアウトプットさせる時間を教師がしっかりと確保したことで、主体的で対話的な深い学びへとつながっていた。もう一つは、洗濯用ハンガーや大型のてこ実験装置で実際に物をつるす活動を行うことで、本時の学びと日常生活とを関係付けられるようにしていたことである。最後に学習内容を日常生活に戻したことで、理科を学ぶ有用性を実感させることにつながっていた。

４ 感想

埼玉大学教育学部附属小学校理科部の研究主題である「自然の事物・現象に自ら向き合う子の育成」は、本県学校教育指導方針小学校理科の努力事項「主体的な問題解決の活動の充実」と大きくつながっていると感じた。研究内容を理解した上で、実際に授業参観して児童の様子を見てみると、本県の理科教育の目指す児童の姿があったように感じる。

埼玉大学教育学部附属小学校理科部の研究で実践した三つの働きかけ（①児童に合ったカリキュラムデザイン②児童の心をゆさぶる教材提示③児童に委ねる場の設定）は、自身の授業作りでも生かしていきたいと強く感じたことである。

先進校等調査研究事業で研修したことを、本校の児童の実態に合わせて、日々の授業作りに生かし、「自然の事物・現象に自ら向き合う子の育成」につなげていきたい。

- 1 派遣期日 令和6年 10月 4日（金）
- 2 派遣先 学校名 横浜国立大学附属鎌倉小学校・中学校
所在地 神奈川県鎌倉市雪ノ下3丁目5-1
<http://www.kamakurasho.ynu.ac.jp>

3 研修内容

（1）LIFE（総合的な学習の時間）授業参観

- ・4年2組「お金よりリアリティーキャリア教育～未来の仕事について考える～」

キャリア教育をもとに、未来を見据えた新しい仕事について探究していくことを目的とし、お金と労働の対価について考えていた。

本時では、児童が実際にものづくりを行っていた。ロボットの作り方を調べたり、図工の廃材を使ったお財布を作ったり、3Dプリンターで小物をつくったりしている児童の活動を参観した。完成したらグループごとでお店に販売してもらったり、自分で売ったりする計画を立てているようだった。

（2）外国語5年授業参観

- ・「This is my town.」

「その場所の魅力について既習表現を用いて、自分の考えを分かりやすく伝えようとする姿」を目標とし、canとhaveを使って、地元の鎌倉や宿泊学習で訪れた群馬県みなかみ町を紹介していた。教師が「Which do you like better, ～?」という表現を使って児童の好みを話題に取り上げて、魅力と感じていることを簡単に話していた。既習表現であるcanとhaveを使い、その場所の魅力紹介を聞き合うことで、互いの良いところを認め合い、伝わりやすい方法を考えたりしていた。「参観している先生に伝わるように」、「日本に來たばかりの留学生に鎌倉のことを分かってもらうために」など、児童が相手意識をもって課題に取り組んでいた。

（3）外国語（英語）中学2年生 授業参観

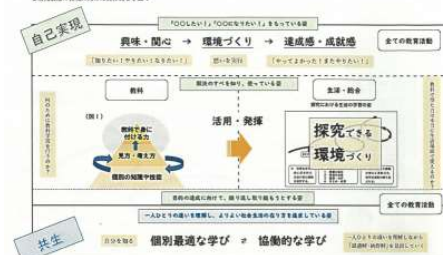
- ・「Story of My life-Let's Tell Autobiography-」

「ペア・グループ活動を含む様々なインプットを通して、自分史を再構築する姿」を目標とし、未来の自分に手紙を書いて、手紙を友達と読み合い、手紙の文章を再構築していた。自己表現の幅を広げるために、教科書の内容やインプットした教材を手元に置いていつでも振り返りができるようにしていた。ペアで手紙を共有することで、生徒たちは相手の表現などを自分のものに取り入れたり、教え合ったりしていた。アンジェラアキの曲を聞いて、自分の未来に期待をもったり、将来の自分を励まそうとしたりする姿が見られた。

（4）研究概要説明

鎌倉小中学校では、鎌倉小中学校、横浜国立大学、神奈川県教育委員会指導主事とが連携して、共同研究を行っている。「自己実現と共生を軸に据えた教育課程の創造」を共通のテーマとし、小中学校9年間を貫く柱として、生活科・総合的な学習の時間を中心に据えている。その上で、他の教科にも広げて、研究協議を行うことで、小中一貫したよりよい文化の創造を目指している。

（5）研究構想の実現に向けた具体的な方策
〇研究構想の実現に向けた具体的な方策



(5) 研究協議（英語）

中高の英語を担当する先生方と協議

- ・発音の良さは、たくさんの英語を聞くことが大切。鎌倉小学校は、ALTがいないが、教師の英語やコンピュータの英語をたくさん聞くことができるゲームを行っている。（カルタ、文を作るゲーム） 鎌倉中学校では、ALTが発音の指導をしており、生徒に何度も繰り返し発音させている。フォニックスのチェック表で確認しテストも行っている。ALTと会話をして聞き返される経験を通して、発音の大切さを実感させることも大事だ。
- ・受験対策とコミュニケーション活動の両立の難しさ
受験にはスピーキングが取り入れられていないことが多いため、中学校では、読み書きの授業がメインになってしまう。生徒たちは将来のことを考えて、「もっとコミュニケーション活動をしたい」と希望するが、「受験の対策に力を入れてほしい」と考える保護者も多いそうだ。今回の授業を参観して、生徒の「やりたい」が受験につながるように、授業の展開を考えていきたいと話した。
- ・学力差について
教師が言うよりも、児童生徒同士の方が伝わることもあり、学び合うことの良さを感じている。教えている生徒にもメリットになっている。

4 感想

県外の学校の様子を見ることができ、貴重な経験となった。国立の学校ということもあり、学校全体の様子は落ち着いており、積極的な児童生徒が多いように感じた。真似できる所は真似てみて、水木小学校の児童に合う指導の方法を見付けていきたい。

午前中に参観したLIFE（総合的な学習の時間）では、年度初めにクラスや学年で児童が課題設定を行って、課題解決に向けて活動を行っていた。参観した4年生のクラスでは、児童全員が課題意識をもって、活動に取り組んでいた。ロボットを作る際のプログラミングで困っている児童は、実際にロボットの会社に問い合わせると話していた。児童を信じて任せてみることでもっと児童が成長していくのではないかと考えた。

外国語の授業では、児童生徒たちの「やりたい」「言いたい」「書きたい」という気持ちが強く感じられた。相手意識や場面設定の大切さを実感した。与えられた場面、状況だけではなく、「誰に何を伝えるか」を児童生徒たちに考えさせることも有効かもしれないと考えた。英語を使う必要性を児童生徒に感じさせられる授業ができるよう今後も研修を続けていきたい。

令和6年度 日立市教育研究会先進校等調査派遣研修報告書

日立市立大みか小学校 教諭 水出 智美

1 派遣期日 令和6年8月5日(月) ～ 8月6日(火)

2 派遣先 学校名 筑波大学附属小学校

所在地 東京都文京区大塚3-29-1

<https://www.elementary-s.tsukuba.ac.jp/3>

3 研修内容 第35回 全国算数授業研究大会

テーマ	本質に導く授業力 ー多様な学びが求められる今、教師の役割を問うー
-----	----------------------------------

(1) 授業参観1 第2学年 算数科「かけ算」 指導者 筑波大学附属小学校 森本隆史先生

研究主題	教科書をスタートにして、「かけ算」の導入の授業をどのように創ることができるのかを探る。
------	---

この授業は、学校図書の教科書の遊園地で遊ぶ子供たちの挿絵に白い帽子をかぶせ、授業の途中でその帽子がクラスカラーに変化することで算数の見方が広がりやすいという意図のもと、教科書の挿絵を用いた導入を行った。そして乗り物に乗っている人数について「調べましょう」と問わず、「何人でしょう」との問いから、乗り物の人数の違いに気がついたり、まとめて考えたりとそれぞれの方法で人数を出そうとしていた。児童は、立てた式の計算方法や10のまとまりをつくって数える方法に焦点がいきそうになったが、教師が「式に表しやすいかどうか」を問い、同じ数ずつ足している式を「かけ算」という新しい学習内容を提示した。また、 4×5 と 5×4 の違いをどんな図で表せるか確認することで、1つ分といくつ分の違いが理解できるようにしていた。授業の後半には挿絵の帽子がクラスカラーに変わり、『何人でしょう。』と言われたらどんなことを考えるか、どこの人数を考えられそうか」と問い、それぞれの乗り物の人数をかけ算の式で表す学習になった。

授業後のパネルディスカッションでは、授業者の森本先生から、初めて習う「かけ算」の学習で、数のまとまりを意識するために白帽子をかぶせたこと、 5×4 と 4×5 の違いを押さえること、まとまりのあるものを式で表すことをねらいとして授業を行ったことが発表された。パネラーの先生からは「数えやすい」とはどういうことか、かけ算の式にするよさは何か、いくつ分をわかりやすくするために 4×5 だけでなく 4×6 、 4×7 など変化がみえるとよかったことなど話し合われた。最後に森本先生から教科書にあるものを使ってどう解けばいいのか、隠したり動かしたりせずどう見せてどう解くかの提案授業だったとまとめられた。

(2) 公開授業2 第5学年 算数科「割合」 指導者 仙台市立寺岡小学校 中村佑先生

研究主題	割合の本質に導く算数授業のあり方を探る。
------	----------------------

この授業はキャベツを1個買ったときの値段を確認し、個数が整数の2個分の値段を求め、その後半分するとき、4等分の時の値段を考えることを導入で行った。次にキャベツを1個120円引きにすると、2個分、半分、4等分したキャベツの値段はいくらになるか考えた。キャベツ2個分では割引が120円ではなくなることに気づき、それぞれ半分の金額が変わることに気がつき、それぞれの値段を求めた。そして360を1と見たとき、720が2となり1080や1440など割合が整数になる表し方を確認し、180や90など割合が小数や分数で表せるものにつなげた。その後各自どこを基準にして考えるか確認し、120を1と見たとき、240を1と見たときなど、簡単な場合の割合の見方を想起させ、小数での割合の見方を押さえた。

授業後のパネルディスカッションでは、割合の本質を確認し、4年生の簡単な整数の割合の学習内容から5年生の小数値の割合へのつながり、比較する割合の意味、比較しなかったら割合をどう見るのか、比較しないと割合の本質が見えない、などをテーマに話し合いがもたれた。最後に指導者の中村先生から、キャベツを買うときには半分にすると割高になりたくさん買うとお得になる日常生活と本時の学習内容がかけ離れていて、日常生活とつなげられるような課題設定が大事だとまとめられた。

(3) 基調提案 筑波大学附属小学校 中田寿幸先生 雙葉小学校 永田美奈子先生

テーマ	本質に導く授業力」～多様な学びが求められる今、教師の授業力を問う
-----	----------------------------------

- ・算数の本質→教えるべき内容の根本にあるもの、算数の学びの楽しさ、算数のよさや美しさ、単元で最もポイントとなる内容の数学的な見方・考え方。
- ・目指す子供像→子供自身が問いを持つ、子供自身が決める、子供が個人で考えを進めていける、子供の見え方を見方に高めていこうとする、算数のよさや美しさを味わう。
- ・子供がなぜ？と考え出したとき、本質へとつながる。
- ・教師のしかけが、子供の「なぜ？」を生み出す。
- ・授業を子供任せにするだけでは、本質へと結びつけることはできない。
- ・本質はどこか、子供から引き出せるように。

(4) 公開討論 昭和学院小学校 二宮大輝先生 筑波大学附属小学校 田中英海先生

テーマ	教育のICT化は授業の本質を見つめているのか、授業力低下につながっていないか
-----	--

- ・タブレットを使った授業は楽しい→算数が楽しい？タブレットを使うことが楽しい？
- ・ICTの使い方 ①提示 ②表現 ③操作 ④共有
- ・子供たちが学ぶための道具→子供たちが使いたい場面を選択する。
→みんなの考えをみたいからタブレットを使おう。
- ・提出箱でいつも見ることができていると、できない子はいつもできない→差別化？
- ・数時間単位で授業構成を考える。

(5) ワークショップ 札幌市立帆南小学校 田中尚宏先生

テーマ	こどものつまずきから本質へ向かう算数の授業
-----	-----------------------

- ・今はつまずかないための問題集がある。
- ・つまずかせない（予防型）指導→つまずきを活かした（活用形）指導。
- ・間違っただけをしている児童へどんな言葉かけができるか。
- ・「つまずき」は算数の本質へ向かう大切な原石。

(6) 講演について 筑波大学附属小学校 盛山隆雄先生

テーマ	「本質に導く授業力」～多様な学びが求められる今、教師の授業力を問う
-----	-----------------------------------

- ・算数の本質を学ぶこと、よさにふれさせることが授業の目的。
- ・算数科で身につけさせたいゴールは、数学的な見方・考え方やよさを感じさせること。
- ・数学的な見方・考え方が授業の最初と最後に変化することが最適な学び。
- ・いかに自分たちで発見したかを児童が感じるか、教師の関わり・教材研究が重要。
- ・教師は問題提示、言葉かけ、授業構成、板書などを通し、子供の主体性と見え方を引き出し、子供の変容を促す役割。
- ・算数は決まったことを注入するのではない。
- ・算数は楽しいと思える授業、算数を楽しいと思わせる教師を目指す。

4 感想

たくさんの方の授業公開の中から、自分で選んだ授業を参観した。どの授業も日常生活の中や教師と児童の対話から課題へと導かれ、子供の発表だけでなくつぶやきやノートに書いた考えを取り上げ、学習内容の深まりにつなげることができていた。

今回の授業研究会では、「算数の本質」という言葉が何度も取り上げられていた。教師が教材研究を行ったことで、ねらいを見据え、教える内容の本質を見極め、本質が分かったことで授業の構成や指導の構成が考えられる。子供が生き生きと学ぶことを支えるために教材研究をしっかりと行う必要性を感じた。今後もよりよい授業ができるよう、研修や研究に努めていきたい。

- 1 派遣期日 令和6年8月1日(木) ～ 8月2日(金)
- 2 派遣先 会場名 ロームシアター京都(8/1)
京都経済センター(8/2)
所在地 ロームシアター京都：京都市左京区岡崎最勝寺町13
京都経済センター：京都市下京区四条通室町東入函谷鉾町78
<http://nie-kyoto.com/>

3 研修内容

第29回 N I E 全国大会京都大会
探求と対話を深めるN I E
～デジタル・多様性社会の学びに生かす～

(1) 実践発表Ⅰ 『読み書き交流する「デジタル新聞」』(京都教育大付属桃山小学校)

① デジタル新聞を用いた新しいN I Eの形として

これからの時代において、新聞のデジタル化は避けて通れない。学級で新聞購読している家庭は半分以上で、児童が新聞を紙面で読む週間はほとんどない。スマートフォンは児童の6割が所有しており、児童が一番使うメディアはテレビ、インターネットである。時代の変化やデジタルのメリットとデメリットを検証することで取捨選択しながら学習を進められることから、「デジタル」にこだわり実践している。

ア デジタル新聞のスクラップとグループ交流

6年生の国語科において、ロイロノートで実践している。一週間に1回、自分の気になる記事をスクリーンショットで記録し、記事を選んだ理由や感想を記述して、デジタル新聞スクラップの提出箱に提出する。これにより、定期的に新聞を読む習慣が付き、他の授業の隙間時間でもデジタル新聞を読むことができる。

提出したデジタル新聞のスクラップを用いた意見交流(選んだ理由やその記事についての質問)を小グループで行っている。記事を媒介とすることで自然と対話が生まれ、自分が選んでいない記事を選んでいる人がいることや同じ記事を選んでも理由や観点が違うことを知ることができる。約1分ずつという限られた時間で発表を進めていくので、要約をして伝える力も養われ、思考に関わる語彙も習得できる。

グループ交流で時間の確保が難しいときは、互いが選んだ記事を読んでデジタル上でコメントし、相手にカードを送るようにしている。このことで、なんとなく記事を読んで意見を書いて終わりではなく、友達に伝わるような意見や理由の書き方を意識することができる。

イ 社会科におけるデジタル新聞作成アプリを用いた実践

6年生「世界の中の日本」の単元で、日本と関わりの深い国調べ(教科書の例で出ている中華人民共和国、アメリカ合衆国、大韓民国、サウジアラビアから選択)を班で行った後、自身が深めたい内容を「かんたん号外くん」というアプリを用いて新聞で表現した。今までは、書く内容の下書き、図や写真の印刷、清書と、かなりの時間を要していたが、このアプリでは推敲を簡単に行え、1時間程度で完成させることができる。

② 児童の変容

- ・ 紙新聞の読み書きから、デジタル新聞の読み書きへ挑戦したが、デジタルネイティブの児童にとってはデジタル化することの抵抗はほとんどなく、むしろ新聞離れになっていたところから、新聞を読む習慣を身に付けることへとつながった。

③ 成果と課題

- ・ 成果としては、家庭での新聞購読率が低下している中、デジタルを活用することで、隙間時間に新聞を読むことができ、時間や場所を問わずに新聞を読むことができた。新聞を書くことでは、デジタルは字を書くことが苦手な児童にとっては大きな支援となる。デジタル新聞作成アプリは、フォーマットが新聞を再現しているので、児童自身も本物のような新聞を作成できたという喜びを感じることができた。
- ・ 課題としては、デジタル新聞は紙新聞と違い記事の内容が読みやすく「限定」されていた。それが、良い効果につながったのか、読み手の興味の広がりを限定していたのかは検討の余地がある。



(2) 実践発表Ⅱ 『取材力、表現力を伸ばす「新聞」フル活用』（京都市立羽束師小学校）

① 新聞のエッセンスを取り入れた羽束師モデルの実践

「校内環境・学習」「学力向上」「ICT」に新聞のエッセンスを取り入れた実践（羽束師モデル）を行い、それらを積み重ねてこれからの学びにつなげている。

ア 校内環境・学習に新聞のエッセンス

- 廊下に、各新聞社の当日の朝刊を置いて自由に読めるようにしたり、食べ物やスポーツなど、児童が興味をもちそうなことの記事をまとめた新聞コーナーを設けたりしている。また、教室の本棚にも新聞を置いて、児童がいつでも新聞を手にとれるようにしていることで、対話が生まれている。
- 新聞記事により親しみがもてるように、令和5年度より委員会活動の中にNIE委員会を立ち上げた。コラージュ新聞を作成し、廊下に掲示することで、他の児童も興味をもって新聞を読んだり、コラージュ新聞を見たりしていた。特に、コラージュ新聞は友達が書いていることもあり、興味を示す児童が多い。
- 各教科の中で、新聞を使った学習をどこに取り入れるのか、各学年で学期ごとに話し合い、関連単元配列表を作成した。また、教科横断的に学習できるように、NIEの項目を位置付けた。各学年、概ね1学期に1単元（年間3単元）重点的に取り組むように設定した。他教科や学校行事との関連性を見える化することで、系統立てて指導できた。実践した反省を付箋に書いて残すことで新しいアイデアが生まれ、付けたい力がより明確化され、次年度につながった。

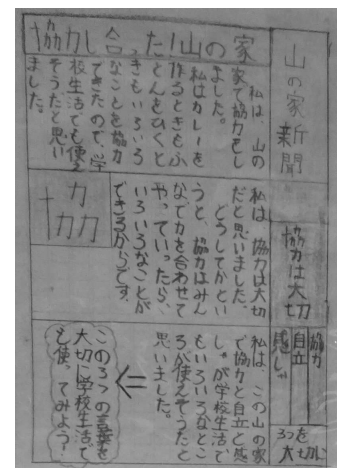


↑ コラージュ新聞

↑ 関連単元配列表

イ 学力向上に新聞のエッセンス

- 各教科での単元のまとめや行事、学期の目標などで、はがき新聞づくりを行っている。はがき新聞は、コンパクトなサイズで文字数も少なく、イラストや図表、写真などを入れて自由につくれるので、取り組みやすい。文字数は少ないが、読み手に伝わるように文章を書くために適度な難易度があり、構成を考える必然性もある。また、完成に向けて試行錯誤を繰り返すため、児童の「書く力」や「表現力」を育むことができる。発信ツールとしても有効で、児童は掲示した友達のはがき新聞にも興味を示し、交流も行える。はがき新聞には見出しが必要であるが、その見出しを友達に付けてもらう取組も行っている。そのため、書き手は読み手（友達）により伝わるようにするため文章を推敲する力が付き、読み手は内容に合った見出しを付けるために書き手（他者）の考えを汲み取る力が付いた。



↑ はがき新聞

② 児童の変容

- 自分の周りに新聞がある環境が当たり前になり、新聞を読むことが増えた。はがき新聞づくりを繰り返し行うことで、必要な情報を選ぶことに慣れ、書く力がついた。

③ 成果と課題

- 成果としては、教員が資料として新聞を意識できるようになり、活用の幅が広がった。
- 課題としては、児童の意欲を高めるための、資料選定力を高めることが必要である。

4 感想

大会1日目に、京都大会実行委員長（橋本祥夫氏）より示唆に富んだ基調提案があった。

① 新聞の活用として、「紙かデジタルか」は重要ではなく、教育の質の向上のために、発達段階や学習場面等により、どちらのよさも適切に組み合わせて生かしていくべきである。

② 答えのない問いにどう立ち向かうのかを考え、生み出した新しい解（探究したこと）を限られたスペースの中で新聞にまとめることは、思考力・判断力と結びついた表現力の育成となる。

③ 情報過多時代の中、新聞を読み、様々な情報について立ち止まって考えたり、他者と意見を交流したりすることで対話が生まれ、考えが深まり広がる。これこそ、新聞を使う意義である。

2日目はこれらを意識して、デジタル・多様性社会におけるNIE実践はどうあるべきかという視点で実践発表会に参加した。どちらも参考になる取組がある実践であった。今後、基調提案を意識して、これらの実践を参考にしながら同僚とアイデアを出し合い、NIEに取り組んでいきたい。

- 1 派遣期日 令和6年7月27日（土）
- 2 派遣先 学校名（会場名）筑波大学附属小学校
所在地 東京都文京区大塚3-29-1
<http://www.elementary-s.tsukuba.ac.jp>
- 3 研修内容

(1) 視察校における研究の取り組み

研究主題：「道德教育のもとに立ってこの一点に迫る発問を考える～内容項目を手掛かりに子どもと共に人間のよさを理に立って考えた情にまで深めるために～」

今回実施された研究大会は、日本道德基礎教育学会による授業の実践である。日本道德基礎教育学会では、「道德教育のもとに立ってこの一点に迫る発問を考える～内容項目を手掛かりに子どもと共に人間のよさを理に立って考えた情にまで深めるために～」をテーマに令和3年から研究を深めている。

ア.「この一点に迫る発問」について（淑徳大学名誉教授 新宮 弘識教授の講話より）

(ア) この一点に迫る発問」とは何か。

道德の授業は、発問の乱発によって散発的な授業になって、子どもは授業で何を学んだかを的確に把握できない。集中した道德授業ができるように余分な発問をできるだけカットして「この一点に迫る発問」をするという考えである。「この一点に迫る発問」とは、「一つの発問」という意味ではなく、授業の要点に迫る発問のことである。中心発問は気持ちを問う発問がほとんどであるが、これに対してこの一点に迫る発問は、人間のよさを理に立って考える発問と、それを情にまで深める発問によって構成されている。

(イ) 「この一点に迫る発問」によって学ばせたいことは何か。

道德の授業の中でも教材による学び合いは、授業の中心である。教材を読んでどのような道德的行為を生む心がみえてくるかを考えることで「この授業を通して何を学び合わせたいか」がみえてくる。そのために今研究で提案されたのが、右の表の活用である。事前にどんな反応が予想されるかを整理することで、どのようにして子ども達の『よりよくありたい』と願う心に働きかけるかがみえてくる。子ども達は、「教材を読んでみえてくる人間のよさ」と「人間のよさの内包する属性」がみえることで、当然のわかりに止めないで、心に沁みるまで深めることができる。

教材～		
子どもと共に考えたい問～		
登場人物の象徴的な行為	行為を生んだ心	
	教材を読んでみえてくる人間のよさの内包する属性	人間のよさ

〈表〉

イ. 教師の授業力について（淑徳大学名誉教授 新宮 弘識教授の講話より）

(ア) 道德授業にみられる教師の指導力としてのタクトの力

この一点に迫る発問による道德授業にみられる教師の指導力とは、あらかじめ計画されたものではなく、子どもの反応によって臨機応変に対応する指導力である。これが、タクトの力であるといってよい。教師の指導力は、教育論によって導き出された授業論に立って、予定できる指導力と、子どもの反応によって臨機応変になされるタクトの力という指導力によって成り、このような二つの指導力によって、子どもの考えが道德的に生かされて、人間のよさの学び合いが広げ深められ、子ども達は学んでよかったと目を輝かせる授業が実現されると考える。

(イ) 教師のタクトの力を生む「もとになるもの」は何か。（タクトの力に大切な3つの「もと」）

①「この授業では、このような人間のよさを子どもと共に学び合いたい」と授業の向かう

方向を熟慮すること

- ・内容項目を教えるのではない。内容項目を手掛かりに人間のよさを理に立って考え情にまで深めることを子どもに求める前に、1人の人間として自分はどうかと自問すること。

②教師の立ち位置に関する認識の問題

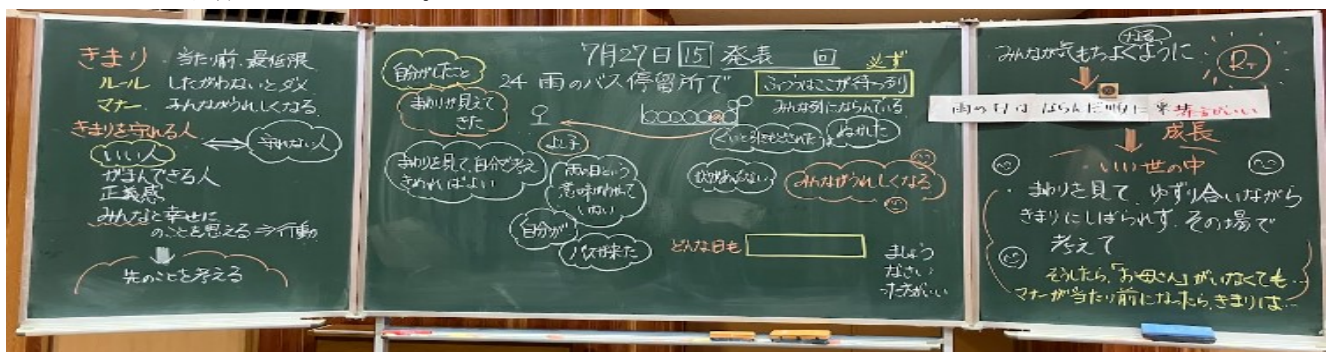
- ・ねらいや教材の研究を深めていけばいくほど、価値の強要に関する教師の立ち位置問題が生じる。子どもが行き詰まった時に、教師の考えを理に立って話せば、価値の強要ではない。教師は子どもの学友であるとともに、先達でもあり、司者ではないことになる。

③教師の道徳授業に対する基本的な心構え

- ・教師は道徳の授業を通して、人間のよさを子ども達と共に語り合う心があってこそタクトの力が生まれる。

ウ. 研究授業（「雨のバス停留所」4年 筑波大学附属小学校 加藤 宣行先生）

本教材は、「社会のきまり」が主題名になっている。加藤先生は「きまりを守ること」が最終ゴールではなく、「決まりを守ることの先にあるもの」を改めて考え直すことにより、「〇〇のために規則があり、だからみんなで守っていこう」という主体的に社会的ルールに関わっていくことのできる子どもに育てたいというねらいをもって授業にあたっていた。あらすじを教師が範読し、導入では「きまり」とは何かを尋ねた。子ども達からは「当たり前」「最低限のこと」という言葉が出てきた。そこから子ども達の言葉を拾ってどんどん展開していく。教師の問い返しはねらいを明確にして進めていたため、どんな発言であっても受け止める覚悟を感じた。まさにタクトの力を感じる授業であった。あらすじは追わず、気持ちを聞かず、子どもに合わせた授業展開になっていた。本研究のテーマである「この一点を考える発問」の意義を感じた。板書にも工夫があり、形式にとらわれず子ども達の言葉を拾って広げていく板書になっていた。子ども達のノートも自分の考えが自由に書けるようにA4ノートを使用していた。終盤で、「きまりを守るとはみんなが気持ちよくなるためにある」というまとめになるところで、1人の児童が「体の不自由な人がいても、きまりを優先させるのか」という疑問が出た。そこで、「周りを見て、ゆずり合いながらきまりにしばられずにその場で考える。」という言葉が出てきて加藤先生のおっしゃっていた、まさに「きまりの先にあるもの」が見え、より考えが深まる授業になっていた。



4 感想

これまで実践してきた道徳の授業は、指導書に沿った発問、中心発問で展開し、教師がルールを敷いた展開だった。授業を進めるにあたり、教材を分析し、ねらいをきちんともつことで子ども達に育ってほしい心が明確になり、意義のある授業になることを改めて感じた。また、子ども達の言葉をもっと拾って子ども達が主体的に学べる場の確保をしなければならないと思った。そのためには、発問を精選して今回の研修で学んだ「この一点を考える発問」を大切にしていかなければならないと感じた。今回の研修では、授業参観、基調提案、授業づくりに参加させていただき、その中で、「人間のよさ」を起点とした「道徳授業づくり」について学ばせていただいた。今回の研修の内容を校内の「道徳だより」で発信し、全教員で共有する。研修で学んだことを生かし、さらなる研鑽を積んでいきたい。

- 1 派遣期日 令和6年9月14日（土）
- 2 派遣先 学校名（会場名） 東京ドーム
所在地 東京都文京区後楽1丁目3-61
<https://npb.jp/> 日本野球機構

3 研修内容

今回実施された研究会は、一般社団法人日本野球機構が「エデュすぽ！～教員のための体育授業研究会～」として開催されたものである。教員が「運動が苦手でも安心して楽しく授業を展開できる」、児童が「体育の授業を通して運動、スポーツとの出会いの場を大切にする」をキーワードとして、すぐに日々の授業に取り入れられる内容のプログラムであった。

今年度はNPB（野球）とJFA（サッカー）の2部制で行われ、前半と後半に分かれて両方の実技を実施した。

研究会の内容は、以下の通りである。

（ア）NPB（野球）内容

① 超初級編：キャッチ＆ランゲーム

- ・攻撃側はボールを手で投げる。守備側は投げられたボールをキャッチもしくは追いかけて捕る。捕ったところに全員集まったら「アウト」と声を上げる。それまでボールを投げた人は、カラーコーンなどで距離が決まっているところを往復し通ったカラーコーンなどの数で点数が入るゲーム。攻撃陣が1周したら交代する。
- ・難しいルールもなく簡単に実施できるので、低学年での野球型の授業の導入などで取り入れるとよいゲームであった。

② 初級編：バックホームゲーム

- ・攻撃側はボールを手で投げたりバットで打ったりする。攻撃側は、守備側に「アウト」と声をかけられるまで、ひたすら走り得点を取る。進んだ塁の分だけ得点が入る。打者一巡で交代。守備側は、素早く本塁に投げ返し、本塁を踏んで「アウト」と声をかける。
- ・守備側がどこに守るかが学習のカギになり考えながらプレーできる。バックホームのため守備側が投げる動作が入る簡単なゲームであった。

③ 中級編：フォースプレーゲーム

- ・攻撃側はボールを手で投げたりバットで打ったりする。ボールを持った内野よりも、先にベースを踏んだ塁が得点となる。守備側は、走者の動きを見て判断し、先の塁に投げたり、走ったりしてベースを踏んで「アウト」と声をかける。守備側がどこに投げるか判断する必要がある、少し高度なゲームである。

④ 応用編：学校にあるもので教具を自作し、狭いスペースや少ない人数でできるゲーム

- ・段ボールを丸めたバットやティーの代わりにペットボトルとカラーコーンを使った教具を作成して実施できるので、用具がなくても工夫次第でゲームができる。

（イ）JFA（サッカー）内容

① ウォーミングアップ

- ・みんなで楽しむ雰囲気作りである。30秒等と時間を設定し、歩きながらじゃんけんをする。時間経過後「○回勝った人」と聞きながら指導者はその人とハイタッチ。指導者は「強度を上げるために次はどうしたらよい？」と聞いて「スキップ」や「体じゃんけん」などと出た内容で強度を上げていった。終始楽しい雰囲気で、ウォーミングア

ップが行われた。

② 活動1：全学年に応じたボールフィーリング

- ・グループで輪になって手をつなぎ、1人1個分のボールを全員で運ぶゲーム。一度終わった後に、チームでどうすれば速くなるか相談して作戦を立てる。その後、2回目を行う。終了後どうやって速くなったのかを各グループに聞いて確認した。

- ・人数分のボールがあることで得意な人も苦手な人も参加することができる。みんなで楽しく行え、協力して行う雰囲気作りもできた。ボールにも工夫があり、普通のサッカーボールと新聞紙を丸めたサッカーボールがあった。普通のボールの数が足りない場合にも使える活動であった。

③ 活動②：全学年に応じたドリブルやゲーム

- ・2人組でドリブルの練習をした。その際、普通のボールと新聞紙で作ったボールをそれぞれ1つずつ使った。全員が決められた範囲内でドリブルをするのだが、2人組で前後に並び、前の人を後ろの人が追いかけるという内容であった。1回ごとに前後を交代したりボールを交代したりしながら練習を行った。

- ・指導者はドリブルをする際には、「どうしたらぶつからないかな?」「どんなところへドリブルすればよいかな?」などと考えさせてから行った。終わった後に、どちらのボールの方がやりやすかったか問いかけ、得意な人は普通のサッカーボール、苦手な人は新聞紙のボールと違いが出たのが新鮮だった。苦手な人は、ボールが転がってしまうサッカーボールの方が扱いにくかったようである。苦手な児童が多い場合は、ゲームでも新聞紙のボールを使うのも工夫の1つであると感じた。

④ ゲーム：全学年に応じた3対3ミニゲーム

- ・コートの上に右側チームと左側チームに分かれて全員並び、中央に近い人から3人ずつコートに出てくる。点数が入ったらメンバーを交代し、また3人ずつ出てくる。プレーしていた3人は一番後ろ（反対側の中央）に再度並ぶ。コートの上に並んでいる人は、ボールが来たら中に蹴り返すようにし、ボールがコート外に行かないような工夫がされていて活発な試合になった。

4 感想

NPB 内容では、簡易化したゲームの進め方について4種類実施し、それぞれのゲームでのポイントを押さえることができた。自分が授業を行う時に、技術指導が多くなってしまい、運動が苦手な児童が試合を楽しむことができないことがあった。しかし、今回実習した内容では、どの試合方法も、運動が苦手な児童も楽しめる内容で、児童全員が楽しめる授業について学ぶことができた。

また、野球型のゲームを行う際に、ボールが飛んでこなかったり、守りっぱなしになったりなどが原因で運動量が確保できない課題もあった。今回のゲーム方法では、これらの課題も解決することができた。

他の球技と同様に児童が楽しめるルールや用具を工夫したり、特にベースボール型では難しい、「判断しなければならない場面」を減らしたりすることで、ゲームを簡易化できることがわかり、授業の作り方への考えが広がった。

今回の研修で、非常に心に残った言葉が「ベースボール型の授業は野球の指導ではない。」ということである。野球を子どもの技能に合わせることから始めるべきだということを話しており今後の授業づくりに生かしていきたいと思った。

- 1 派遣期日 令和6年11月27日(水)
2 派遣先 学校名(会場名) かすみがうら市立下稲吉小学校
所在地 〒315-0052 茨城県かすみがうら市下稲吉 1623-5
<http://edu.city.kasumigaura.ibaraki.jp>

3 研修内容

(1) 研究主題について

かすみがうら市立下稲吉小学校では、今回の茨城県教育委員会学校体育研究推進校の指定を受けて、研究主題を「主体的・対話的で深い学びに向けた体育指導の在り方～体育授業のユニバーサルデザイン化を通して～」と設定し、「体育授業のユニバーサルデザイン化を通して、主体的・対話的で深い学びを実現するための体育授業の在り方を追求する。」ことをねらいとしていた。体育授業においてユニバーサルデザイン化を図れば、児童の誰もが「できる」「分かる」「関わる」を感じることができ、主体的・対話的で深い学びにつながるであろう、という仮説を立て、目指す児童像として、「やってみたい」「友達と一緒に運動しながらよりよい方法を考えたい」「何度も挑戦したい」と、自ら運動に親しむ児童としていた。

(2) 公開授業1について

◎第1学年「走の運動遊び」T1：山元 有紗 先生 T2：川崎 宏幸 先生

<学習内容>

- ①整列・あいさつ ②慣れの運動 ③本時のねらいと内容の確認
④障害物の並べ方をグループで考えたかけっこ
⑤他のグループが考えた並べ方でのリレー遊び
⑥片付け
⑦振り返り

①では、声に出しながら、姿勢や取り組むべき行動を全員で確認していて、行動が遅い児童も安心して活動することができていた。

②では、準備運動の時間を取らず、主運動につながる感覚づくりの運動を主運動の前に入れていて、驚いた。運動が得意な児童も苦手な児童も活動量を確保することができ、素晴らしい取り組みだったと感じた。

③では、児童の声を拾いながら、一緒にねらいを設定していて、児童も何をこれから学習するのかを自分事として捉えられていた。

④では、4人程度のグループで話し合い活動からスタートしていたが、どの児童もこれまでの学習をもとに、建設的な話し合いがなされていた。小型のホワイトボードと障害物の絵の描いてあるマグネットを活用していて、視覚的に児童は場の設定をイメージしやすそうだった。どの児童も傾聴する姿勢があり、日々の体育授業の成果が表れていた。

⑤では、一定時間練習をすると、グループごとに友達のかけっこの良いところを発表し合う時間を設定していた。活発な話し合い活動をしていて、ねらいに沿った褒め方をしていた児童もいたのが驚いた。

⑥では、音楽をかけながら活動しやすい雰囲気をつくっていて、参考になった。どこに何を置くのかを絵や写真などを壁面に設置し、視覚的に分かりやすくしていた。

⑦では、ねらいに合わせて、言葉で振り返りをしていた。1年生で書くこともままならない児童もいると思ったが、どの児童もしっかり書けていて、体育以外の授業でも指導が行き届いていた。

(2) 公開授業2 第5学年 器械運動「マット運動」 市川 幸代 先生

<学習内容>

- ①整列・あいさつ ②本時のねらいと内容の確認 ③慣れの運動
④各グループの演技構成

⑤グループでの練習 ⑥片付け ⑦振り返り

①では、1 学年同様、声に出しながら、取り組むべき行動を全員で確認していて、学校の組織としての共通理解がなされていると感じた。

②では、本時でやるべきことを端的に確認して、素早く活動に移っていた。

③では、準備運動の時間は設定せず、感覚づくりの運動で体を温めていた。笛ではなくリズム太鼓を活用していて、音に敏感な児童も安心して活動していた。また、太鼓をたたきながらタイミングを取りやすくしたり、太鼓をたたきながらポイントを言葉で説明していたりしていたので、これからの授業の中で活用できるころはあると感じた。

④⑤では、前時までに課題を設定していたため、確認だけしてすぐに活動に移っていた。1 年生同様、音楽をかけながら、素早く準備する雰囲気をつくり、活動時間を確保していた。今回の授業では学習のまとめとして、シンクロマットで発表する形を取っていたが、自校でも今年度シンクロ跳び箱を行ったことがある。グループで取り組むことで仲間の技を見て学ぶことができたり、音楽に乗せて楽しく活動したりできる良い面がある反面、技能差があったり、高い技能をもつ児童を看取れなかったりすることもあると感じていた。しかし、今回の授業では、前半と後半に分けて個人練習とグループ練習に分けた活動にしている、その問題も解消されていた。場の設定に無駄な動線がなく、タイムシフトカメラを固定で置いておくという ICT の活用の仕方、今後の授業で参考にしていきたいと思った。

⑥では、音楽をかけながら活動しやすい雰囲気をつくっていて、参考になった。どこに何を置くのかを絵や写真などで視覚的に分かりやすくしていた。

⑦では、学習カードは活用せず、大学ノートに課題や振り返りをしていたのが驚いた。振り返りの仕方「わ（わかったこと）」「で（できたこと）」「と（友達のよかったこと）」「つ（次に頑張りたいこと）」という視点が全学年共通であり、先生が「今日は「わ」と「で」で書こう」と言うと、その視点で振り返りをしていた。

(3) 全体会

体育授業のユニバーサルデザイン化の取組は以下の通りと報告があった。

- ①学習環境の構造化（並び方・固定小集団・ルール・指示・場）
- ②6 学年を見通した系統的な授業づくり（感覚づくり運動・スモールステップ・焦点化）
- ③多感覚化（口伴奏・ポイントやコツの言語化・変化のある繰り返し運動）
- ④児童間補助の行い方の共有化
- ⑤個別の配慮を意識した I C T の活用
- ⑥系統的な振り返り
- ⑦休み時間の外遊びの充実、体育館の活用

以上のようなことを行うことで以下の成果・課題が出たという報告があった。

◎成果

- ①学習環境の構造化によって、運動時間を確保することができた。
- ②学習課題の焦点化により、学習活動がシンプルになり、楽しく学んだり、主体的に取り組んだりする児童が増えた。
- ③ I C T 機器・作戦ボード等の活用により、自分の動きを確認したり、グループで話し合ったりする中で対話的な学びが行われ、目標が明確になった。

●課題

- ①児童補助の仕方の共有化、児童補助による達成感の向上
- ②休み時間の外遊びの促進
- ③単元計画の見直しと工夫

5 感想

指導している内容に関しては、自分が日頃授業で取り組んでいるものと差はないように思えた。しかし、アプローチの仕方や場の設定、児童の動線などを少し変えるだけで、教育的効果が違うということを感じた。また、体育科だけでなく、他教科でも組織としてユニバーサルデザイン化を行っており、今回の研究発表が終わっても、持続可能な指導であると感じた。組織として目指すべき方向性が明確になると、教職員も迷いなく児童に関わることができ、教育的価値を高めることができることが分かった。実態を踏まえて、できることから取り入れていきたい。

- 1 派遣期日 令和6年10月25日（金）
- 2 派遣先 学校名 港区立小中一貫教育校 赤坂学園
所在地 〒107-0052
東京都港区赤坂9丁目2番3号
<https://akasaka-ej.minato-tyo.ed.jp/>

3 研修内容

（1）研究主題について

区立小中一貫教育校、赤坂学園赤坂小学校は「自ら学びを深めようとする児童・生徒の育成～ICTを活用した日常的な授業実践を通して」を研究テーマにしている。赤坂学園では、小中一貫教育校として「個別最適な学び」を実現するための学び方を系統的に育成している。小学校低学年から中学年にかけては、学び方の選択肢を増やすことを授業に取り入れ、同時に授業の目的に応じた情報スキルの習得も進めている。

小学校高学年から中学生にかけては、習得した情報スキルや学び方を選択して活用することで、個別最適な学びを実現していくことを目標にしている。令和5年度からスタートした小中一貫教育校の強みを活かした、9年間を通した系統的な学び方の実現に向けて日々研究を進めている。

（2）公開授業について

今回参観した授業は、7年生の国語「作品の魅力を語り合う 星の花が降るころに」である。本時の目標は「作品の登場人物の中から一人選び、登場人物の魅力と言動に着目しながら語り合う。」であった。導入では、前回の振り返りを確認するときにスプレッドシートを活用して、前時までの振り返りを短時間で言い、課題解決のための時間を多く確保している工夫があった。また、誰がどのような感想を書いているのかが明確になるため、感想を見落とししたり、記録を紛失したりするリスクも軽減される。授業の進行だけでなく、つまずきも把握しやすく、ICTの強みを感じた。課題解決の際は、スプレッドシートに魅力を感じた登場人物を選択することによって、席が離れていてもクラスメイトの中に自分と同じ魅力的な登場人物を選択している児童が一目で分かる工夫があった。ある児童が「夏美って選択しているから席を離れて話しに来た。」「どこに魅力を感じたの。」など、スプレッドシートでまとめたことによって、誰に魅力を感じたのか分かるような工夫があった。また、振り返りもタブレットで200字程度にまとめており、鉛筆で書くより短時間でアウトプットの量が増えていた。また、次回の導入でも活用することができるので、生徒の課題解決の時間が確保できる。

（3）講演について

ICTを活用すると進捗状況の管理ができるため、児童・生徒が何につまづいているのか把握したりこれまでの学習内容を次時で生かしたりすることができる感じた。研究主題に迫るために、何を使って学習するのいいのか児童・生徒自身が考えながら進め、教師はICTを活用することで、児童・生徒の個別最適な学びを実現している。

ア 赤坂学園の学び

課題解決のために、何を活用するのかを自分たちで考えた自由進度学習で、児童・生徒たちが自ら学習している。集中して取り組める学習環境を意識して、無駄

な時間をつくらないことを心がけている。教師がスプレッドシートを見れば進度や考えが一目で把握できるので、称賛する機会を増やすことができる。また、児童・生徒のレスポンス（アンケート）を参考にしており、97%がこの授業スタイルがよいと答えている。アンケートを活用して、児童・生徒の声を聴きながら授業を計画していた。

タブレットを学習用具として、効率よく活用している。持ち運びをして、データをクラウドで管理しており、よさを生かしている。PCや本などをツールとして、画像や情報を扱う際に、適切な使い方を低学年から教えている。低学年の場合、振り返りで写真を貼るなどの活用の仕方をしている。発達段階に応じて活用し、情報モラルについて学習していた。他人の意見を参考にしながら、自分の学習スタイルを確立することで、学ぶ情報量が増える。小学校での自由進度学習は、習熟度別スタイルのため、コース分けもしやすい。子供の“こうしたい”大人の“こうしてほしい”の一致を意識しているため、児童・生徒と教員の視点に差がないと感じた。情報活用能力と探求的な学びのためにアウトプット量を意識して授業づくりをすることが重要である。

イ これまでの授業と本日の授業を振り返り。

一斉学習で始まり、自由進度学習を行い、一斉学習という授業を展開している。

自由進度学習にループリックを示す。分かったことの振り返りもループリックを示し「できた」などのドロップダウンをできるようにする。

学習の目的を明確に示す。そして、児童・生徒が仲間と吟味して交流することで、他者を参考にしながら学習していた。何を使って学習したかなど学び方の振り返りも大切にしている。

ウ 質疑応答について

☆ 学力の高まりはあるのか（理科）

→思考判断は上がった。小学校数学も少しずつ伸びた。

☆ 自由進度で進めるにあたり、どこまでが全体でどこから自由に進めるのか。

→自由進度で何時間か進めたあと、全体での復習の時間をとる。実態に応じて使い分ける。

4 感想

今回、「第50回全日本教育工学研究協議会全国大会」の参加を通して、ICTの活用が児童・生徒の主体的な学びを促進し、個別最適な学びを実現するための重要なツールであることを再確認した。特に、赤坂学園が取り組む「自由進度学習」や情報スキルの系統的育成の実践例は、これからの教員生活において参考になる点が多くあった。

公開授業では、スプレッドシートを活用して児童・生徒が共有し合う姿が印象的だった。同じ登場人物を選んだ仲間と積極的に意見を交わし合う様子から、ICTが交流のきっかけをつくり、学びを深めるための効果的な支援ツールであることを実感した。また、タブレットを使うことでアウトプット量が増えたことや、進捗状況を教師が即座に把握できる点も、効率的な学習環境の構築に役立つと感じた。

講演では、ICTを活用した学習の進捗管理や学習方法の選択肢の広がりについて学ぶことができた。特に、「児童・生徒の“こうしたい”と教師の“こうしてほしい”が一致する」学びの場づくりが重要だと感じた。この姿勢は、児童・生徒と教師の相互理解を深め、学びの質を向上させるためにとても大切だと思った。

今回学んだことを活かし、児童・生徒が主体的に学び、成長できる授業を目指していきたい。ICTを活用することで、より多くの可能性を引き出す授業を展開していけるよう努力したい。

- 1 派遣期日 令和6年11月2日（土）～11月3日（日）
- 2 派遣先 学校名（会場名）新潟大学附属新潟小学校
所在地 951-8535
新潟県新潟市中央区西大畑町5214番地
<https://www.fusho.ngt.niigata-u.ac.jp/>

3 研修内容

(1) 視察校における研究への取り組みより

- 研究主題 「独創力」を発揮する子供
—授業研究を基点とした教育課程の編成—

本視察先は、大学の附属校であり、大学や地域と連携しながら、今日的な教育課題解決に向けて校内研修を進めている。

研究主題については、変化の激しい現代や未来を切り拓く子供を育てることを目指して設定されている。生成AIの登場により、「人間だからできることは何か」を問い直す契機となっている。人間の強みの1つとして、「個人の経験に根ざした見方や感じ方」がある。今後、未知なる状況に直面した時、未来を切り拓く資質・能力として『独創力』（自分の見方や感じ方に基づいて自ら追究し、新たな価値を見出す力）と設定し、本研修先の教育活動全体で育成を目指している。

○ 研究の取り組み

① 教材を『材』として捉え直す

授業において子供が『独創力』を発揮できるようにするために、本研修先では、教材を『材』として捉え直すことを提案している。

教材 子供の日常生活に位置付いている事物や事象を、教授すべき内容が見えやすいように加工したもの

→

材 子供の日常生活に位置付いている事物や事象そのもの
※教授すべき内容が内包されている

例 社会科3年「地域の安全を守る」

教材 「交通事故現場の写真」を提示

材 「児童の通学路の写真」を提示

『材』として捉え直すことで、どの子供の日常生活にも位置付いているとともに、教科で教授すべき内容を内包させる。子供が『独創力』を発揮できるようにするためには、教授すべき内容を円滑に導くことよりも、子供が自分の見方や感じ方を表出できることに重点を置くべきだとしている。

② 材と出会い、出会い直す学習過程

材と出会う

子供自身が自らの生活に位置づくものと実感する文脈で『材』と出会い、自ら追究する

→

材と出会い直す

子供が自ら追究する過程で目的を更新する。

例 算数科2年「100より大きい数」

お店屋さん（算数科・生活科・図画工作科と教科横断的に計画）

材と出会う

- ・ お店屋さんで使う仮想の通貨
目的 「簡単に、正確に数える」

→

材と出合い直す

- ・ 児童「1以外の単位もあったらいいのに」
目的更新→「必要な紙幣の単位を明らかにする」

(2) 公開授業及び協議会より

算数科5年 「Intuition Power Hall 全開！ ―正方形と円―」

授業者 附属新潟小 教諭 石塚正人

本視察で参観した単元では、「三角形」を材として扱っていた。これまでの算数科の学習や日常生活で児童が多く触れてきた三角形をハロウィンパーティの飾りやゲームという文脈で出合わせ、学級全体で三角形の内角の和が 180° であることを学級全体で確かめたとのことであった。

参観した本時では、4種類の三角形を組み合わせて点数を競う「図形づくりゲーム」に取り組ませ、「材との出合い直し」の機会を設けた。授業では、三角形を組み合わせると多様な図形が作る、点数の高い正多角形の作るためにどんな三角形が必要かを考える姿が見られた。

協議会では、指導者が「材」と出合わせる文脈として取り入れたゲームと学習の関係が議論になった。ゲームを取り入れることにより、児童の視点は勝敗に向いてしまい、「活動あって学びなし」になる恐れが呈された。『材』がきっかけになった気づきが児童の学びになるためには、作った図形の名前を調べる、辺の長さを測定するなどの追究のプロセスを経るための働きかけがあるべきだという意見があった。一方で、ゲームのルールで不明な点がある度に、学級全体審議する学級文化は、定義を共有・確認し、価値付けするプロセスと同じであり、お互いが分かりあうという算数科学習の基盤が形成されていると評する参加者もいた。



図1 三角形のハロウィンパーティ飾り

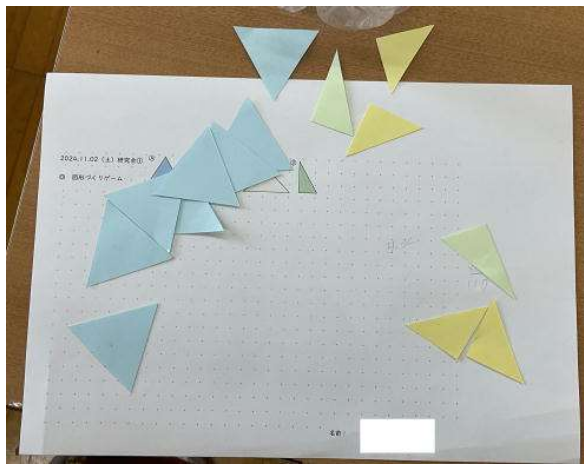


図2 図形づくりゲームの台紙と三角形

4 感想

現行の学習指導要領へ改訂される際の論点整理では、中央教育審議会は、子供たちが直面する未来を「将来の変化を予測することが困難な時代」と表現したが、誰もが予測しなかったコロナの時代を経た。そして、生成AIとの関わり方について考える時代も迎えた。子供たちが今後切り拓く未来はさらに予測困難な時代であろう。そんな未来で子供たちの糧になる力こそが、本視察先で研究を進めている『独創力』であると感じた。本視察先で学んだことを校内の教職員で共有すると共に、自分自身も各教科等の内容を扱いながらも、児童が追究する学び方について、今後の授業研究の中で検討を進めていきたい。

1 派遣期日 令和6年 9月12日（木）

2 研修先 学校名（会場名）ぐんま国際アカデミー初等部
所在地 〒373-0033 群馬県太田市西本町6-9-1
<https://www.gka.ed.jp/>

3 研修内容

（1）概要説明 ～ぐんま国際アカデミーの特色ある教育について～

ぐんま国際アカデミーでは、日本人教員と外国人教員による英語イマージョンプログラム（教育）に基づいたカリキュラムを用いた教育を行っている。また、初等部から高等部までの一貫教育を通して、英語を媒介として物事を客観的に捉え、思考し、判断する力を養い、人種や国籍の違いにとらわれない国際人の育成を目指している。

ぐんま国際アカデミーの教育の特徴である英語イマージョン教育とは、教科内容を英語で学ぶ学習方法を指している。その目的は、英語力の習得ではなく、英語を通して知識や概念を修得することである。初等部では、国語と社会、家庭科を除くすべての教科の授業（約70%）を英語で行っており、児童は自然と英語力を身に付けていくことができる。

また、ぐんま国際アカデミーでは、英語ネイティブの外国人教師とバイリンガルの日本人教師による二人担任制で指導にあたっている。授業だけでなく、学級では常にチームティーチングの体制がとれることで、児童は多様な文化や言語に触れながら学校生活を送ることができる。

（2）校内の視察、授業参観

初等部のキャンパスは、階段のない平屋の構造である。また、教室に壁がないオープン・エデュケーションも特色の一つである。このような、広々とした環境で、物理的な壁だけでなく、型にはまった教育や習慣にとらわれない、オープンな空気を保つことを心がけているとのことであった。

教室内や廊下の掲示物はほとんどが英語で作られたものであった。学年によって、夏休みの絵日記を英文で書いたり、自分で英語の新聞を作成したりするなど、作品の内容は様々であった。

（3）授業参観

①外国語活動（第1学年）/外国人教師

モニターに映し出された文字のない絵本を見ながら、外国人教師と児童が英語でやり取りを行っていた。“What do you see?”という教師の問いに対して、多くの児童が挙手をして、動物や物の名前を答えていた。教師はさらに質問を広げ、その動物がどこにいるのかや、どんな表情であるのかと尋ねていた。児童は、教師の質問の意味を理解し、“It’s on the tree”など、前置詞を正確に使い答えることができていた。また、ある児童がジョークで回答したことに対して、クラス全体でリアクションをとっていた場面から、1年生であっても英語でコミュニケーションを取る力が身に付いているように感じられた。

②音楽科（第3学年）/外国人教師

子どもたちが3～4名のグループになって、教師の流したリズムに合わせて体を動かす活動を行っていた。グループでは、子どもたちが日本語、英語の両方を使いリズムに合った振付を話し合っていて決まっていた。最後は、グループごとに発表を行い、工夫

したところを説明したり、周りの児童が感想や一番良いと思ったところを伝えたりしていた。

③外国語科（6年生）/外国語教師

10月に予定されているオーストラリアへの修学旅行で訪れる現地の学校の児童に、日本を紹介するために自分の好きなトピックからスピーチを作成していた。日本の食文化、習慣を選ぶ児童もいれば、スカイツリーなどの観光名所を選択している児童もいた。子どもたちは、自分の決めたマッピングを英語で広げていき、スピーチを構成していた為、日本語を訳すのではなく、伝えたいことを英語で伝える力が備わっているように感じられた。

4 感想

今回、ぐんま国際アカデミーへの視察を決めた理由は、英語習得や英語教育の分野に興味があったからである。また、英語に対して苦手意識のある児童が多いと感じた経験から、現在自身が勤める学校や、これから先関わる子どもたちが楽しく英語に触れたり、学んだりするのに知識を増やしたいと考えたからである。

ぐんま国際アカデミーの特色ある教育プログラムについての説明を聞いたり、実際に子どもたちが学んでいる姿を見たりしたことで、英語イマージョン教育が児童の国際感覚を養う助けとなることを実感した。しかし、児童の様子を見て、どうしてここまで英語を話せるようになったのだろうか疑問に思った。そのことを野澤副校長先生に尋ねると、やはり入学時は全く英語を理解できない子や、話せない子は多いとのことであった。しかしながら、英語に囲まれた環境で生活することや、チームティーチングによる授業、生活の手厚い支援によって、子どもたちはみな英語を習得していくそうだ。視察をしていて授業やささいなやり取りにおいて、教師は子どもたちに英語で話すことを強制していなかった。そこに見られたのは、自然なコミュニケーションを重視するアプローチであり、このことが子どもたちの英語習得にも繋がっているように感じられた。このような環境では、子どもたちが自らの意見を表現することが奨励され、彼らの自信にもつながっていると感じた。また、時と場合に応じて言語を使い分けることで、様々な状況に適応する力を身に付けているのではないかと考えた。

授業の中では文化的背景や国際的な視点も織り交ぜられ、子どもたちが多様な価値観を理解する機会が与えられていた。このような教育プログラムは、ただ英語を学ぶだけでなく、異なる文化を尊重し、グローバルな視野を育むために非常に有効だと実感した。日本人教師による国語科の授業では、学校全体として単元終末の言語活動に力を入れているという話を聞いた。英語だけでなく、母語に対する親しみや奥深さを子どもたちが感じることができるよう授業を工夫しているという点は、自身が日頃国語科の授業をするにあたって留意していることに類似していると感じた。

また、視察中に会った児童の学習意欲や自発性も印象的であった。特に高学年の児童は、自分の意見をしっかりもち、日本語でも英語でも活発に議論を交わしていた。これも、様々な教育環境が、子どもたちの自己表現や主体性を促進しているからだと考えられる。自身の勤める学校でも、「自律した学習者の育成」を目指して職員が一体となって研究や実践を行っている。子どもたちは、一人一人が有能な学び手で、多くの可能性を秘めており、その力を最大限生かせるように学習環境を整えていくのが教師の使命なのだと再認識することができた。

全体として、ぐんま国際アカデミーの視察は、私自身に多くの学びをもたらす貴重な機会となり、今後の教育の在り方を考える上で、非常に示唆に富んだ経験であった。自身の学校でも、このようなイマージョン教育の要素を取り入れ、子どもたちが楽しく英語を学びながら、同時に国際感覚を育てられるように、英語を使った活動を実施していきたい。特に、日常的な事柄や、やり取りを国際的な視点と結び付けて、英語に触れる機会を増やすことで、学びの楽しさを感じることができるよう工夫していきたい。

- 1 派遣期日 令和6年12月2日（月）
- 2 派遣先 学校名（会場名）秋田大学教育文化学部附属小学校
所在地 秋田県秋田市保戸野原の町13-1
<https://www.aes.akita-u.ac.jp/index.html>

3 研修内容

(1) 視察校における研究への取り組み

研究主題：自律した学習者を育てるⅡ
研究副題 子どもと教師でつくる「学びのものさし」

秋田大学教育文化学部附属小学校では、1874年の創立以来「自律」を学校教育目標に掲げている。本研究は、前研究「自律した学習者を育てるー学びをつなぎ資質・能力を高めるー」の3年間の取組をさらに進めたものであり、本年度は3年計画の最終年である。

① 研究主題と前研究の成果及び課題について

「自律した学習者」とは、自分自身の学びを省察し、自ら設定した目標に向け必要な方法を決定し、学び続ける学習者である。前研究では、課題解決に必要な「見方・考え方」を働かせる力や、学びを見通す力を高める手立てが明らかになった。また、省察を効果的に配置し、思考・表現・判断と往還させることで「見方・考え方」を自覚的に用いる姿がみられた。しかし、児童自身が現在の学習状況を見つめ直す面で課題が残った。児童が生涯にわたり豊かな学びを実現していくためには、自身の学びをゴールと照らし合わせ、適切に自己評価し、見通しをもって粘り強く自己調整的に学ぶ必要がある。「何に着目し、どのように考えるのか」という学びを深める視点や方法（ものさし）を学習者自身が自覚できるようにし、その有効性を実感して必要な場面で意識的に使えるようになる手立てを追究する必要がある。そして「楽しい」「使えた」「役に立つ」という経験を積み重ねることで学ぶ楽しさや意義が自分事となることが、自律して学ぶ礎となる。

② 本研究の副題について

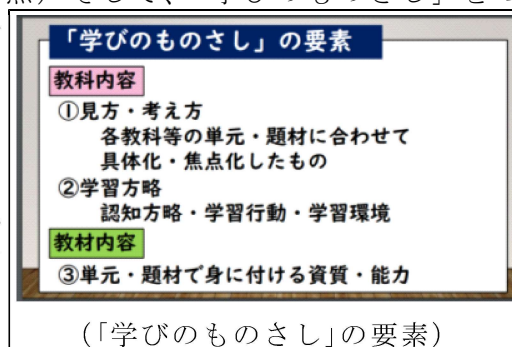
前研究の課題から、研究主題の具現化のために、副題「子どもと教師でつくる『学びのものさし』」を設定した。「学びのものさし」とは、児童にとって自らの学習状況の到達度や達成度を見定める規準であり、省察で何度も使い、学びを深めるために働かせ、学びの方向性を見い出すための指針である。教師にとっては、子どもに身に付けさせたい資質・能力であり、評価規準と言える。（図参照）そして、「学びのものさし」をつくることは、この評価規準や学習方略といった指針を教師と子どもで共有することである。

共有といっても、教師が一方向的に与えるのではなく、子ども自身が学習過程で見い出し、学びのよさを実感できるよう教師がコーディネートしていく。児童が「学びのものさし」を指針として働かせていくためには、納得と理解を伴い、自分自身の言葉で表現できることが不可欠である。

③ 1～2年次の実践について

1年次の重点は「子どもの中に、自己の学びを見つめる『ものさし』を生み出す手立て」である。自己の学びを見つめ直す規準の自覚を促すために、困り感や揺らぎを表出したり、自分の解釈を説明したり、目標に対する到達度や達成度の根拠を基に分析したりする等の手立てが明らかになった。また、教科等の原理原則を用いて最適解を追究したり、「選ぶ→試す→修正する」活動を複数回設定したりすることで、よりよい問題解決のために思考し直す姿が見られた。しかし、必然性をもって自分の学びを見つめ直し、深めていく点において課題が残った。

2年次の重点は「『学びのものさし』を更新する手立て」とした。学びを深めている子どもの姿を教科等の専門的な見地から見取る。問題解決に向けて選択・決定する場を設けることで、自分事として問題解決に向かう姿が見られた。また、友達やゲストティーチャーなど自分のモデルを発見し、思考や表現のよさを取り入れて学びの質を高める



姿が見られた。さらに、思考や表現を可視化して比較する場や、ゲーミフィケーションの手法で協働的な省察が生まれるようにすることで、必然的に学びの見つめ直しが行われた。これをさらに全体に広げ、一人一人が切実感をもって自らの学びを見つめ直し、よりよい問題解決のために学びを進める授業デザインを具体化することが課題となった。

④ 3年次の実践について

3年次の重点は『学びのものさし』を働かせる学びのデザインである。自分の経験や興味・関心・学びやすさに応じて問題解決過程を選択・決定でき場を設ける。また、仲間との情報交換や相互評価を求める自律した学びの場面を広げるために、互いの考えや感じ方のずれや隔たりを顕在化する活動を設定し、吟味・検討する協働的な省察の場を設ける。

(2) 視察校における授業の実践

① 第2学年 算数「1を分けて～分けた大きさの表し方は?～」

この単元は、身近な具体物を操作する活動を通して、分数をつくり、分数の意味を実感できるようにすることで分数のよさに気づき、生活に生かそうとする資質・能力を高めることを目指している。本単元における「学びのものさし」を働かせる姿は、身近な具体物を操作する活動を通して分数をつくることや、もとの大きさに着目して等しく分けた大きさを捉えたり比べたりして、分数の意味やよさを理解しようとする姿と捉える。本時は総時数6時間の5時間目であった。1枚の板チョコレート(縦3×横4)を示し、「チョコレートを、1人分が同じになるように友達と分けます。どんな分け方があるでしょうか」と問いかけ、続きは自分で問題を作成する課題であった。「問題(文)を自分で作成する」という課題に対して児童の戸惑いが予想以上に大きかったようだ。しかし、チョコレートを量として捉えるか、数として捉えるかの二つの見方に広げるといねらい通り、児童は「半分に分けて2人に分けるから $1/2$ 」「12個を $1/2$ に分けるから6個ずつ」「1の $1/2$ が6個で 6×2 で12個」など具体物や図や式など、自分なりのやり方を選択して表現することができた。数量の関係を双方向に見て除法と乗法の素地となる見方が育っている姿が見られた。

② 第3学年 体育「跳び箱運動～ビヨーンと跳んで、ピタッと着地! みんなで目指せ金メダル～」

この単元では、技の出来映えを高めるためのこつに着目して、自己の能力に合った課題を解決するためにこつを伝え合うという資質・能力を高めていくことを目指している。本単元における「学びのものさし」を働かせる姿は、自分や友達の課題を見付け、解決のために場を選んだり友達と話したりして、こつを伝え合う姿と捉える。授業では、跳び箱の高さや向きを自由に選べる場があり、児童は自分で選んだ場所で自分の技を練習し、それを同じグループの友達がタブレットやタイムシフトカメラで撮影して助言をしていた。事前に「金メダル」の基準を話し合い、自身も意識したいポイントを明確にして臨んでいるので、助言をする側も求める側も話し合いの焦点が絞られ、効率良く開脚跳びの練習ができていた。「手をつく場所はよくなったけど、勢いが足りないから今のところ70点」「もっと助走を長くしたら」「怖いなら低い跳び箱で試す?」「手をもっと押すといいよ」等、具体的な助言をする姿が見られた。

4 感想

最終年ということで、これまでの研究成果から自律した学習者を育てるための様々な手立てを知ることができた。授業は入念に準備をしても、思わぬ反応や予想外のつまづきが生じる。しかし「何を身に付けさせるか」を軸として、実態に応じた効果的な手立て(学習活動・発問・問い返し・個別か協働か、全体共有等)を選択・決定し、その選択が適切だったのかを、教師自身も省察することが教師としての資質・能力を高めるのではないかと感じた。また、その選択、環境や場づくりが、児童にとって必然性を伴い、学びの楽しさが実感できるようデザインされているかという視点も忘れないようにしたい。

自校の実態から、全ての児童が無条件に学びの楽しさを味わい、粘り強く自律できるとは限らない。失敗を恐れて表現することを戸惑ったり、協働や対話に抵抗を感じたりする児童もいる。自己肯定感を高め、安心安全な人間関係のもと、児童自身が他者と協働する良さを感じて対話を重ねる中で学びの楽しさを実感できる環境づくりに努めていきたい。

1 派遣期日 令和6年9月24日（火）

2 派遣先 学校名（会場名） お茶の水女子大学附属小学校
所在地 〒112-0012 東京都文京区大塚2丁目1-1
<https://www.fz.ocha.ac.jp/fs/sitemap/>

3 研修内容

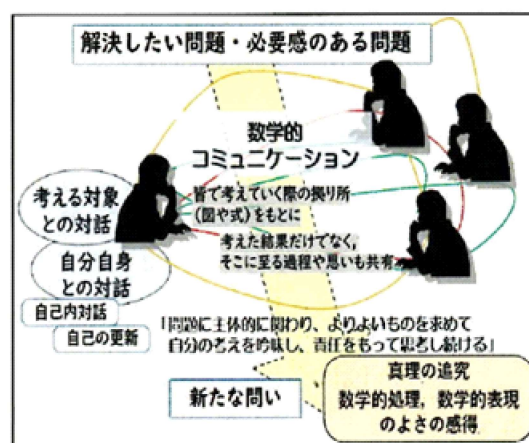
（1）視察校の研究について

研究主題 学びをあむ（5年次）
－新領域「てつがく創作活動」を中核とする教育課程の開発－

お茶の水女子大付属小は「学びをあむ」という研究主題のもと、自分の思いを大切に、様々なひと・もの・ことと関わりながら新たなものを創り出し、自己を更新していく児童の育成を目指している。社会の変化と主体的に向き合い、民主的な社会を支える市民として創造的によりよく生きるために、自ら学びを構想し、様々なひと・もの・ことと関わりながら探究していくことを通して、他者と協働しながら主体的に思考し、行動する市民を育むことを目標としている。

（2）算数部会「自分事の算数」における数学的コミュニケーションについて

算数科においては、『「問題に主体的に関わり、よりよいものを求めて自分の考えを吟味し、責任をもって思考し続けていく」学びが展開されていく時、学んでいる算数が自分事になっていると言える。そして、このような学びを「自分事の算数」とする』としている。解いて終わりではなく、他者の考えや問題場面と関係づけながら自分の考えを吟味し、思考し続ける学びとするためには、問題に対して主体的に関わることが第一歩であり、自分事として捉えた学びであれば、問題解決を通して学んでいる算数のよさの感得に繋がっていく。



資料 「自分事の算数」と「学びをあむ」の関連

（3）視察校における授業について

視察校では、第3学年算数科の研究授業を参観し、研究協議に参加した。「自分事の算数」における数学的コミュニケーションが、個々の「学びをあむ」姿にどのように繋がっていくのかについて、子供たちの具体的な姿を観察した。

①単元について

「わり算や分数を考えよう」の単元から、本時は分数のものの長さに着目し、4分の1の長さと同じになる理由を考える学習を行った。「□の4分の1」と「□÷4」、さらに「○の4倍は□」というわり算と分数、倍の見方を関係づける

ことがねらいとなっている単元である。授業では、既習事項である分数について、もとの大きさに着目すべき場面なのにもかかわらず、分母の数字にのみ注目して意見を交わし合う場面が多く見られた。そのため、本時のねらいとしている部分に迫る前に授業が終了してしまった。

②学習の様子

第3学年の子供たちは座席をコの字型にして学習しており、自分の意見や考えを相手の顔を見ながら発言することができる学習形態になっていた。また、友達の考えを自分の言葉で説明したり、マス目や罫線のないノートに自由に図や式を書いて考えをまとめるなど、自分事の算数となるような授業の工夫がたくさん見られた。学習中、児童は教師の問いかけに対して頷いたり、「〇〇だと思う」や「〇〇ってこと？」など、自然とつぶやきが出る場面が多かった。算数部会が目標としている「問題に主体的に関わり、よりよいものを求めて自分の考えを吟味し、責任をもって思考し続けていく学び」に近づく児童の姿が多く見られた。板書は最低限になっており、ICT機器は使わず、デジタル教科書での提示等もなかった。教科書も使用せず、児童は問題と白紙のノートのみ机に出ている状態だった。算数の授業は、解き方を自由に書かせたり述べさせたりするために、意図的にデジタル機器を使用していないという授業者の思いがあったということだった。

③研究協議

協議では、授業記録を元に、ねらいに迫ることができなかった原因について意見交換を行った。最初に指名した児童が課題を正確につかんでいなかったことや、学級の実態として既習事項である分数が定着していなかったことなどが挙げられた。また、初めに用意していた掲示物の提示が子供たちにとって見づらかったことや、小さくて分かりづらかったこと、分数の大きさを確認しづらかったことなども挙げられた。一方で、児童の考えがまた別の児童の考えにつながり、議論が深まった部分もあった。友達の考えに対して、「それ代わりに証明できるよ」など、学び合う姿も見られた。誰かの意見を自分事の算数と捉え、コミュニケーションを図りながら学習していく様子がたくさん見られた。

4 感想

○学習形態の工夫

児童が黒板を中心にして向かい合い、授業者を囲むような学習形態は、全員の表情がよく見えるので、発表する児童が意見を述べやすい雰囲気だった。また、全員が向かい合っているので、近くに座っている児童同士がすぐに話し合い活動に入れる工夫だと感じた。算数に限らず、どの教科でも実践しているとのことだったので、児童がどの教科においても協働的に学ぶ上で有効な手立てだと感じた。自身の授業や学校全体でも取り入れてみたい取組だと思った。

○児童への問いかけと机間指導

学習課題や問題を提示する際、教師が児童に対していくつかの問いかけをしていた。「△△で合ってる?」「□□だったっけ?」など、既習事項を振り返り、本時の学習への意欲付けになるような言葉かけだった。いくつかの問いかけによって、児童がつぶやいたり、ノートにメモしたりする様子があり、児童の主体的な学びに繋がる効果的な手立てだと感じた。

また、自分の考えをノートに書いている際の机間指導も、同じような問いかけをしていた。教師の問いかけに答えるように、児童が自分の考えを説明しつつ、さらにノートに書き加えていた姿がとても印象に残った。教師の問いかけで児童の学びが深まっていると感じた。

先進校視察は、自分にとって大きな学びとなった。今後の教育活動に役立てていきたい。

- 1 派遣期日 令和6年7月15日(月) ～ 7月15日(月)
- 2 派遣先 学校名(会場名) 茨城大学教育学部附属小学校
所在地 茨城県水戸市三の丸2丁目6番8号
<https://www.esch.ibaraki.ac.jp/>

3 研修内容

(1) 視察校における研究への取り組み

研究主題：学びの文脈をつくる(第1年次)

ー子どもがつくる単元「Re-WISHプラン」ー

①研究主題について

茨城大学教育学部附属小学校では、平成28年度からの3年間の研究テーマ「未来をつくる子どもを育てる」における研究や、令和元年度からの4年間の研究テーマとして「学びを楽しむ」の研究を積み重ねてきた。過去の7年間の研究の成果として、学習材・他者・自己の三者とのかかわりの中で必要な資質・能力を身に付けたり、それらを駆使して問題を解決したりすることに没頭し、成長していく姿を「学び」を楽しむ姿として捉え、今年度からは、学びたくって学ぶ子供の姿を目指して研究を推進している。

②「学びの文脈をつくる」について

「学び」とは、各教科等の知識及び技能のみならず、「学ぶっておもしろい」「〇〇が好き」「もっと追究したい」という態度の形成こそ、将来にわたって基本的に重きを為すものと考えている。これは、学習する上で大切になってくる学習の衝動であり、「学び」の根源的なものといえることで、この「学びの連続性」の概念を大切にし、自ら学びをつくりだし、学びたくって学ぶ子供の姿のことを「学びの文脈」と捉えている。

「文脈」とは、ここでは、各教科の単元を貫く文脈、各教科等の枠組みを超えた文脈であり、様々な学びの連続性や発展性を意味している。

「学びをデザイン」するとは、学習案として立てる学習計画とは違い、子どもたちが学びの中で感じる「読み取ったことを絵にしてみたい」「△△を変えたらどうなるかな」といったふりかえりをもとに、学習計画を再構成していくことである。つまり、「学びをデザイン」という考え方をもとに、子供たちが主体となって「学びの文脈」をつくっていくことを表している。

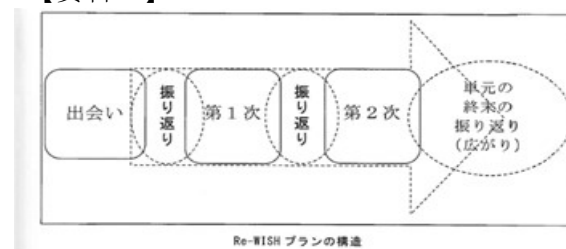
③単元計画(Re-WISHプラン)について

先行研究を紐解いていくと、プランについてのイメージが資料1の通りになる。私たちが、「評価」を考えていく上で単元まるごとの視点をもつと、評価はわたしたちの「願い」であるといえる。学びの入り口にある子供の「～したい」を大切にし、そこから展開される学びの過程で、子供たちが様々な感動に出会いながら「できた」「わかった」などの「満足」を感じ、さらに次への希望となって学びが広がっていく。この一連の学びをまるごと見つめていくことが評価の構想である。本研究では、学びと学びの間に振り返りを組み入れ、単元を貫く矢印部分である学びへのエネルギーが生み出されることに取り組んでいる。(資料2)

【資料 1】



【資料 2】



(2) 視察校における授業の実際

①第2学年 道徳科 たいせつないのち

視察校では、道徳科(じぶんの時間)と学級活動(なかまの時間)の二つの内容を併せもつ「このころの時間」と関連させながら、「心を温め合う」学習の構想を立てていた。

本時は、いのちのすばらしさについて、読みもの資料「たんじょう日」を読んだり、生活体験を話し合ったりする活動を通して、家族の思いに気付き、自分の生命を大切にして生活していきたいという心情を育てることをねらいとしていた。まずは、これまでのRe-WISHプランを振り返り、生活科で花や野菜を育てている活動から、自分たちの生活にあふれているいのちを感じたり、食育や食事を通して家族に大切に育てられている自分に気付いたりすることができるよう、子供たちの発言を繋いでいく導入の工夫が見られた。次に、「たんじょう日」の経験を伝え合い、なぜ誕生日を祝うのか考えた。資料から、主人公の思い、主人公の母親の思い、自分事として考えた思いなど、様々な視点からいのちの誕生について考え、グループで話し合う様子が見られた。指導者は、子どもたちの考えを板書する際に、それぞれの立場や思いが一つの円になるような板書構成にしており、考えを深め、広げるためのしかけとなっていた。

②第5学年 社会科 ならでは発見隊～気候編～

Re-WISHプランでは、「茨城県よりも〇〇な県？」という単元の出会ってから、日本の国土に目を向け、同じ時期の沖縄県と北海道の様子やそれぞれの土地で収穫した農産物を茨城県と比較し、茨城県よりも〇〇な県「ならでは」の生活に迫る学習を深めていた。この時間では、気候が異なるということに着目し、茨城県との共通点や相違点をまとめたり、話し合ったりしていた。児童にとっては、暖かい土地は過ごしやすそう、寒い土地は、雪が降って冬が楽しそうという印象があるようだったが、調べていくと、「暖かい地域は台風が多く、水害が起りやすい」「積雪が多いと、雪かきをする必要がある」など、グループで分かったことを付箋で視覚化してまとめることができていた。その際に、感心できることを「お～」、驚きを「え～」と表現するという共通認識をクラス全体でもって取り組んでいたことで、その後の振り返りからも、学びを共有している様子が見てとれた。

4 感想

- 子供の「～したい」は、学びのエネルギーであり、その力を引き出すためには、教師が単元との出会いのしかけや、指導、支援のバリエーションを多くもっていることが必要であると感じた。さらに、学年や発達段階に応じて子供たちの反応を想像し、適切に意図してしかけていくことによって、子供を主語とした学習となっていくところが印象に残った。
- 子供たちが、学びたくなくて学ぶ姿を目指す授業の実践は、連続性の学びとなり、学校生活や家庭生活の態度に結びつくという話があった。これからは、教科の学習で終わることなく、個々の学びに繋がるよう、今回の研修を通して得られたことを今後の授業や指導、支援に生かしていきたい。

- 1 派遣期日 令和6年6月14日（金）
- 2 派遣先 学校名 福井大学教育学部附属幼稚園・義務教育学校
所在地 〒910-0015 福井県福井市二の宮4丁目45-1
<https://www.f-edu.u-fukui.ac.jp/~fuzoku-g/>
- 3 研修内容
 - (1) テーマ 探究し協創するコミュニティ ～共に学びを拓くカリキュラムを創る～
 - (2) 児童生徒によるオリエンテーション参観
 - (3) 公開授業Ⅰ参観（6年算数 拡大図と縮図）
 - (4) 公開授業Ⅱ参観（7年保健体育 陸上競技(短距離走)）
 - (5) 算数・数学科分科会（義務教育課程における協働探究の在り方について）

4 感想

(1) 派遣校の研究について

附属義務教育学校としての特長を生かし、1年生から9年生までの縦のつながりをもって、一致した方向性で研究しているところに、福井大学教育学部附属義務教育学校の素晴らしさを感じた。また、各学年がどのような学びを展開していくのか、カリキュラムデザインについて教職員だけでなく児童生徒が関心をもち、学年を超えた交流の機会をもったり研究集会のポスターラウンドを進行したりするなど、普段の生活から関わっているところに感銘を受けた。

研究会当日は、児童生徒によるオリエンテーションから始まった。説明の中には「先生の言葉から、ぼくたち子どもが授業をつくっています。」「低学年で学んだことを、中高学年で探究しています。」「私たちのつぶやきを、先生は否定せずに一度やってみたら！と声かけしてくれます。」などの説明があった。附属義務教育学校の教職員は、授業中に児童生徒が安心してつぶやける環境をつくり、ファシリテーターとしてより良いゴールに導いていることが分かった。

(2) 公開授業Ⅰについて【算数・数学科(6-1)】

単元名： インスタ映えする写真をうまく撮るには？「拡大図と縮図」

図形の拡大と縮小について、「インスタ映えする写真」「ふくまちブロック」などの児童が興味関心をもっていたり、町にある身近な建物を活用したりすることで、導入における児童の意欲はとても高まっていた。また、教師の身長については、児童のつぶやきを拾いながら必要な情報であることを確認し、身長計で実際に図る活動を通して現実世界と数学世界のつながりを感じることができていた。

児童の机上には常にタブレットが置かれ、教師が発する言葉でよく分からない所があるとその場で検索し、解決する姿が複数見られた。また、課題解決のためにふくまちブロックから校庭までの距離が必要だと気付くと、一斉にグーグルアースを使い始め、「約3000mだね！」「わたしもそうだったよ！」などのつぶやきが、競うように発せられていた。

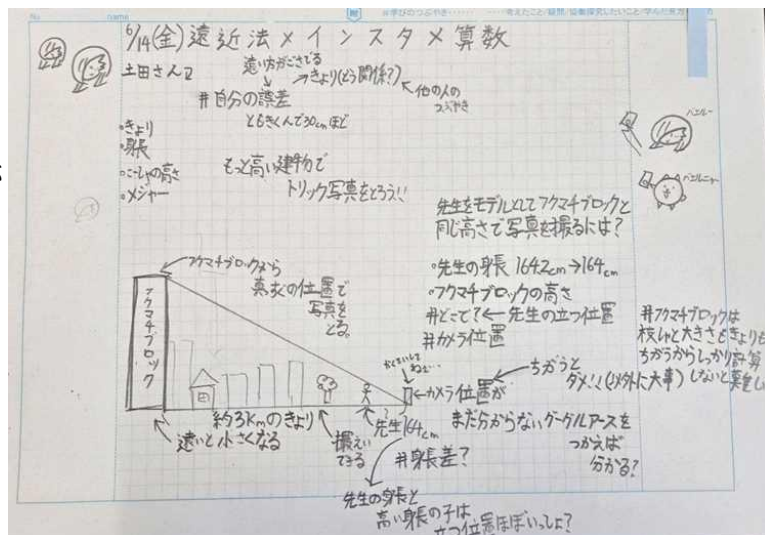
自力解決の場面では、タブレットを活用した児童同士で協働したりと、ダイナミックな活動が授業の終盤まで継続されていた。一方で、一人で長い時間考え込んでいたり、距離の単位が混在したまま計算を続けて回答を導けない児童が、モヤモヤしたまま授業を終えていた。このような場合、自宅学習で個人で解決する習慣があるのか、次時以降の授業においてどのように解決に向かうのか、これからの展開についても是非見てみたいと思った。

【授業の様子・児童のノート】

教師の言葉や友達のつぶやき、自分の疑問や思いを積極的に書き留めている。日高小にもノートスタイルがあるが発達段階や学年の特色に応じて取り入れ、意欲の向上や学びの



深まりにつなげることは可能ではないかと感じた。



(3) 公開授業Ⅱについて【体育・保健体育科(7-B)】

単元名： 結果にコミット～ あなたに最適プログラムをおとどけ～ 「陸上(短距離走)」

陸上競技の短距離走について、生徒は記録会というゴールを意識しながら、猛暑の中でも最後まで熱心に学習していた。チームの中でリーダーや各コーチに分かれ、それぞれの役割で声を出しながらコミュニケーションを取ったことで、陸上競技の個人という捉えから集団への意識の転換も図られていた。グラウンドにひかれたマス目のラインも、マーカーやミニハードルを設置しやすく、場の工夫を改めて学ばせていただいた。省察の場面で、教師の「次時に、先生に準備してもらいたいものはありますか？」の問いかけに、生徒から「砂で滑るのでスタプロがほしいです」「正面にカメラがほしいです」等の発言があり、ここからも教師と生徒が共に授業をデザインしている姿が見えてきた。

(4) 算数・数学科分科会

付属義務教育学校の学びについて、教職員と参観者だけでなく、9年生の生徒も参加した語り合いが行われた。生徒から、「聞いてばかりの授業はつまらない」「つぶやきから学びが広がっている」「先生が上手くりードしてくれる」などの話があり、附属義務教育学校の教師が児童生徒一人一人の思考を大切にしながらファシリテーターとして授業を展開していることが改めて分かった。また、「授業中のつぶやきには、他教科とのつながりもたくさん出てくるので、学びが深まる」との話もあり、参観者からは、教師だけが授業をつくり、教科の隔たりをつくっていることが多くあるかもしれないとの反省が出てきた。

今回の授業者である齋藤先生から直接お話を聞く中で、「下学年からの仕込み」「児童生徒の気づきを待つ」「つぶやきはワークシートや発言から」「好きにやっていたいぞ(児童生徒を信じる)」など、たくさんのキーワードをいただくことができ、自分自身や職場全体の授業力向上に向けてたいへん参考になった。

(5) その他

初めて福井大学附属義務教育学校の研究集会に参加させていただき、教職員が児童生徒と共に授業をつくっていること、児童生徒のつぶやきから学びを深めていることが分かった。また、1人1台端末を効果的に活用し、学習したことをデータとして積み重ね、学年が上がっても振り返りながら新たな学習を進めていることが分かった。それと同時に、ノートによる記述を大切にしている姿も参観することができ、改めてICTと用紙のハイブリッドによる効果的な学習を確認することができた。

研究集会のオリエンテーションや分科会に児童生徒が参加し、学びの様子や本人たちの気持ちを直接聞いたのは貴重な時間となった。自分自身も児童生徒に耳を傾け、より良い経営につなげていきたい。

- 1 派遣期日 令和6年11月9日(土)
- 2 派遣先 学校名 横浜市立山元小学校
所在地 〒231-0851 神奈川県横浜市中区山元町3丁目152
<https://www.edu.city.yokohama.lg.jp/sch/es/yamamoto/>
- 3 研修内容
 - (1) テーマ 自分の成長を確かめながら意欲的に学び続ける子の育成
～『一人ひとりが探求し、変容や成長する姿』を大切にした生活科の授業づくり～
～『その子なりの納得の姿』を大切にした社会科の授業作り～
 - (2) 公開授業1参観
 - (3) 公開授業2参観
 - (4) 生活科1学年分科会(講師 鎌倉女子大学 武山 朋子先生)

4 感想

(1) 派遣校の研究について

山元小学校で研究を進める上で大切にされている『授業で学級をつくる』という言葉が印象に残り、授業を参観した後、なるほど、こういうことかと納得できた。また、①教師が子ども一人ひとりの思いや願いをしっかりと見とり、理解し、子どもの思いや願いに沿った授業をつくること、②子どもが共感的に相手の話を聴き、対話しながら協働的に問題解決を図る授業をつくることの2つを大事に考えて授業を進めている先生方の姿をみて感銘を受け、自分の今後の指導に生かしていきたいと強く思った。

(2) 授業公開1について【1年1組生活科】

单元名:「スーパーあきあそび」

～ほいくえんのらいおんぐみさんとスーパーあきあそびをたのしもう!～

本時の授業は、「らいおんぐみさんとのスーパーあきあそびのかいのめあては、花丸になったかな。」というめあてをもとに進める話し合い活動であった。担任の先生は、子どもの考えや意見を引き出す役割に徹していて、子どもたちは相手の意見をよく聞き、それに対してつぶやいたり、自分はどう思うと意見を述べたりしていて、担任の先生の仲介がほとんどなくても話し合いが進んでいくところにとっても驚いた。

一人の児童が、「どんぐりごまが壊れちゃったんだよね。」とつぶやくと他の児童が「したらまた作らなくちゃ。」とつぶやいていて、ささやき声での言葉であったにも関わらず、相手の話を聴いて、それに対して自分の意見も言えるということも驚きであった。何人かが中心となって意見を述べていくような話し合いではなく、全員が必ず1回は意見を発表する。周りの子どもあの子がまだ話していないから先に話せるように自分は待てようという相手を思いやる自然な空気が作られていて、まさに『授業で学級をつくる』とはこういうことなんだと勉強になった。

もう一つ、この学級の素晴らしさが見られたのは、授業が始まる前のことである。5分前には全員着席をしていて、「始まるまでの時間は何をして過ごすのだろう。」と思っていると、子どもたちは、「じゃんけんしていいですか。」と先生に提案し、近くの友達と楽しそうにじゃんけんをし始めた。それぞれバラバラに何かやる訳ではなく、全員で同じことを楽しむ雰囲気もとても素敵であった。

1年生でもこのようなことができるのは、毎時間の積み重ねが児童を成長させているのだと思った。話の聞き方や意見の述べ方の指導はもちろんだが、自分の意見をもつことができる児童に対しても、時間をかけてその子が自分の意見をもつことができるように寄り添ったり、児童の思いや願いを先生方が見とり、受け止め、それに沿った授業を構成したりするからこそ、子どもたちが生き生きと楽しそうに活動できているのだと学び、先生

方の配慮の仕方も見習っていきたいと思った。

(3) 授業公開Ⅱについて【2年～6年、個別級を短時間ずつ参観】

どこのクラスも子どもたちが主体となって話が進んでいくところに、日々の積み重ねを感じた。タブレットを活用して調べる時間や、自分の意見をもつ時間が十分に確保されていて、だからこそ活発な話し合いができるのだと実感した。

先生は、子どもたちの意見を引き出して繋ぐ役割に徹し、児童の発言を丁寧に受け止めて繋ぎながら授業を進めていた。しかし一方で、5年生のクラスは、1人の男子児童が自由に発言をしており、授業の趣旨とは少し違う発言も出てきていて、若い担任の先生は軌道修正を行うのに苦労している様子が見られた。子どもの自由な発言を受け止めることは大事だが、自分の意見ばかりを述べたがるような児童に対しては、発言のルールを決めるなどの個別の配慮が必要だと感じた。

授業公開の関係で自習となったクラスも参観したが、一人一人が自分のやることを理解していて、全員が集中して課題に取り組んでいるところに驚いた。休み時間になると一気に賑やかになったが、メリハリのある学習態度が身に付いていた。

(4) 生活科1学年分科会

自分たちが楽しんだ秋遊びを、らいおん組の園児と共有したい、楽しませてあげたいという思いをもたせるために、自然や園児と繰り返し関わる時間を設定していた。また、偶然を装って公園で出会い、一緒に遊んで楽しかったという思いと、もっと仲良くなりたい、うまく話しかけられなかったからまた会いたいという思いにつなげ、相手意識を高める工夫もしていた。そして、今回のような園児との交流は、保育士との打ち合わせも大切になってくる。単元の最初からどの時間にどんな交流をして、どんなまとめをするのかを細かく設定し、保育士とも密に打ち合わせを行ったことから、子どもたち同士が互いを意識して楽しむことができたのだと、単元構成の重要性と関係職員との情報共有の必要性を改めて学んだ。

また、本時の授業の中で、遊んだ後の感想をビデオレターで小学生に送るという取り組みもしていた。らいおん組の園児たちが楽しめたか、1年生の活動はどうだったかを、自分たち目線での振り返りだけではなく、相手の意見も知る方法としてビデオレターを取り入れていて、本時のめあてに迫る手立てとして有効だと参観者の先生から意見が出ていた。

今回の秋遊びの単元では、自分が十分すぎるくらいに秋遊びを楽しみ、秋を味わったからこそ、相手（らいおん組の園児たち）にもこの楽しさを感じてほしい、一緒に遊びたいという気持ちにつながった。教師が「今日はこれをやろう。」「みんなが楽しんだから、次はらいおん組さんにも伝えよう。」などと誘導的に進めるのではなく、子どもたちから出た気づきや願いから授業づくりをしていくことが、『意欲的に学び続ける子』を育成するために大切なんだと勉強になった。

(5) その他

山元小学校の研究で大事にしている一つとして『対話しながら協働的に問題解決を図る授業をつくる』ということが参観を通してよく分かった。教師は、子どもたちの主体的な学びを支援する“伴走者”として、一人一人の学びを最大限に引き出すような声かけや教材作り、授業づくりをすることが求められると改めて感じた。今回の研修で学んだことを常に意識して、授業づくり、学級経営等に生かしていきたい。

1 派遣期日 令和6年11月2日（土）

2 派遣先 学校名（会場名） 東京学芸大学附属小金井小学校
所在地 東京都小金井市貫井北町4-1-1
<http://www2.u-gakugei.ac.jp>

3 研修内容

テーマ：教科教育における「個別最適な学び」のあり方について考えよう！

（1）第4学年国語科 鈴木秀樹教諭 「言葉から連想を広げて」の授業について

①教材について

まど・みちお作「ニンジン」という一行の詩を手掛かりに、一つの言葉から別の言葉を連想し、表現を工夫することを考える教材である。単元の目標は、以下のとおりである。

○自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして、書き表し方の工夫をすることができる。（思考力、判断力、表現力等B(1)ウ）

○必要な語句などの書き留め方を理解し使うことができる。（知識及び技能(2)イ）

②単元構成

第1時 まど・みちお作「ニンジン」読み、連想を広げて、思いついた言葉を書き出し、一行の詩をつくる。

第2時 生成A Iを活用し、一つの言葉の連想を行い、一行詩をつくる。

③協議会について

〈指導者振り返り〉

- ・本時（第2時）のねらいは、「一つの言葉から別の言葉を考え、一行詩をつくる。」であった。生成A I（tomoLinks）のよさと難しさを児童自身が実感することで、必要なときに、取捨選択しながら、ICTを活用できる児童に育てたいという意図があった。

〈意見〉

- ・生成A Iを活用することで、ものの見方・考え方の補助となっていた。活用するときに、どんなことに使えるか可能性を探ることも、よい学びにつながる。また、評価に生成A Iを活用することで、教師の業務改善につながる。
- ・効率性を重視する学びも必要であるし、非効率性の中から生まれる学びも必要であるので、どちらの学びも経験を積むことが大切である。
- ・生成A Iの使いどころを間違わないように注意したい。生成A Iに任せて終わりにならないように、工夫があるとよい。
- ・第1時で詩の世界観を味わったり、面白さについて共有したりすると、第2時で生成A Iを活用しても、よりよい表現の工夫につながったのではないかな。
- ・思考のプロセスを吟味する時間があるとよかった。言葉への自覚を高めることにつながる。
- ・授業の振り返りを丁寧に行うことで、本時で活用した生成A Iのよさや難しさに気付き、次に生かせるのではないかな。
- ・ICTを活用するときには、児童の実態をしっかり把握し、活用するものを吟味したり、個別支援を工夫したりすることが必要不可欠である。

- (2) 東京学芸大学より、堀田龍也先生、登本洋子先生、大村龍太郎先生によるシンポジウム
- 自分で課題を設定し、解決できる児童生徒に育てていきたい。それには、教科教育の意義を再考する必要があるのではないか。児童の実態に合った学習にできないか。(教員が連れていってあげる授業になっている。)
 - 不登校の理由の中に、「学校の授業、学習にやる気が起きない」という意見がある。学習の主体を児童にするべきである。そして、協働できる学習環境をつくらねばならない。
⇒ICTが必要！！
ICTを活用すると・・・
 - ・全員の考えを簡単に共有できる。
 - ・みんなの考えを参照できる。
 - ・学びの足跡が残ることで、自分の変化が分かるようになる。
 - 「個別最適な学び」とは、最もよい学びという意味ではなく、自分にとって最適な学びを選び、自分で決める学びのことではないか。教師は、児童が自分で決められないときに、寄り添って助言するぐらいでよい。
 - 「個別最適な学び」とともに大切になってくるのが「協働的な学び」である。「協働的な学び」は、他者との交流を通して、自分なりの納得感や現時点での最適解を調整しながらつくる学びであり、自己決定だけでは出会えない学びの価値の実感を得られる。
 - 授業を計画するときに、『子どもが「知りたい」、「できるようになりたい」、「謎を解き明かしたい」などの思いが生まれるような導入や対象世界との出会わせ方をしているか。「問い」や「学ぶ目的」が子どもの中に生まれているか。授業の内容自体に学ぶ・探究する価値があるか。』ということを確認してほしい。
⇒学びの形態や様相ばかりに目を向けるのではなく、子どもが「教科等の本質に根差した問い(『解決したい』、『成し遂げたい』)が生まれる対象(コンテンツ)」と出会うことに目を向けることがとても重要！

4 感想

- 教師はどういう児童に育てたいか、しっかりとしたビジョンをもち、授業を計画することが大切であることを実感した。
- 自分たちで課題を見付け、解決していく児童に育てるために、どのように教師が関わっていくか考えることが必要であると感じた。
- 「探究的な学び」の問いを作る経験を十分に積んでいないので、研修の必要がある。
- 「個別最適な学び」や「協働的な学び」が確かな学力につながるような指導の工夫と検証が必要である。
- 授業参観を通して、十分な教材研究や板書計画に合わせて、学級の実態に応じた発問をすることが、児童のより深い思考を促し、自分なりの考えをつくり出す手立てとなることが分かった。発問を吟味し、児童の主体性や学習意欲を引き出せるようにしたい。
- 授業だけでなく、学びの定着を図るためには、螺旋的・反復的に繰り返しながら学習することが大切だが、授業外での取組、つまり家庭学習についてもアップデートする必要がある。
- ICTを「個別最適な学び」に活用することは容易であり、学びに活用するイメージが湧きやすいが、「協働的な学び」に活用するときのコンテンツやアプリケーションの選び方、効果的な方法について、もっと研修したいと思った。
- 情報化社会において、取捨選択する力や自己決定する力は必要であり、「個別最適な学び」を実現するために、上手にICTを活用できる児童に育てていきたいと思った。低学年は、タブレットPCを活用しようとする、使い方の指導だけでなく、マナーやルールへの指導に時間が掛かることがあるが、ポイントを絞って指導すること、指導員等の手を借りて複数で指導すること、授業の中で繰り返し活用すること等に気を付けて、根気強く指導したいと思う。

- 1 派遣期日 令和6年11月2日（土）
- 2 派遣先 学校名（会場名）東京学芸大学附属小金井小学校
所在地 東京都小金井市貫井北町4-1-1
<http://www2.u-gakugei.ac.jp>
- 3 研修内容
テーマ：教科教育における「個別最適な学び」のあり方について考えよう！
○各教科の授業研究
第6学年算数科 加賀希支男教諭 「比例」の授業について

（1）教材について

伴って変わる2つの数量について、比例や反比例の意味を理解し、その変化の様子や関係を式、表、グラフを用いて調べたり考えたりすることをおして、関数的な見方・考え方を深めるとともに、生活や学習に活用しようとする教材である。

○比例や反比例の意味や性質を理解し、比例や反比例の関係を、式や表、グラフに表すことができる。（知識・技能）

○数量の変わり方や関係に着目して比例や反比例する事象について考えたり、比例関係を利用して問題を解決したりしている。（思考・判断・表現）

（2）授業について

①前時の学習の振り返り

②ワークシート配布

（問題）縦の長さが5cmの長方形があります。縦の長さ、横の長さ、長方形の面積の関係を式に表しましょう。

「問題を解いた後、どうやって考えたのか・着目ポイントを書けるようにしましょう」

③自力解決

- ・表にして考える。
- ・図で表して考える。
- ・式で考える。

→できた人はMicrosoft Teamsに投稿

この時間の中で、教師は児童のよい意見を探り上げる。また、その意見を書いた児童のところに実際に見に行くなど児童は自由に動きながら問題を考える。

④応用

他の児童が考えた解き方や教師のつぶやきの方法で問題を解く。

⑤全体で確認

黒板やMicrosoft Teamsの投稿で確認をする。

⑥振り返り

（教師）世の中は、比例だけでは生活できない

（児童）長方形がなくなる。足し算ができない。

（3）協議会について

〈授業者振り返り〉

- ・一斉授業はコントロールできるが、情報量が多くなる。比例しかやらないのではなく、着目の視点を変えながら、比例にこだわらないのが個別最適。
- ・Microsoft Teamsの使い方としては、振り返りや前時の板書の写真の確認で活用している。
- ・ICTを使って投稿された様々な考えを見て悩んでいる児童には、同じ考え方で解いている児童のところへ直接行くよう机間指導を行っている。

- ・児童の見取りで気を付けていることは、「解きましょう」という問題は児童は辛い。視点をもって考えましょう。ノートよりも言葉での発表を記録している。名簿にチェックが付かない子を中心に見とるようにしている。
- ・ICTを活用するときには、児童の実態をしっかり把握し、活用方法を吟味したり、個別支援を工夫したりすることが必要。

②東京学芸大学より、堀田龍也先生、登本洋子先生、木村龍太郎先生によるシンポジウム

- 「個別最適な学び」とは、最もよい学びという意味ではなく、自分にとって最適な学びを選び、自分で決める学びのことではないか。教師は、児童が自分で決められないときに、寄り添って助言するくらいでよい。また、「個別最適な学び」とともに大切になってくるのが、「協働的な学び」である。「協働的な学び」は、他者との交流を通して、自分なりの納得感や現時点での最適解を調整しながらつくる学びであり、自己決定だけでは出会えない学びの価値の実感を得られる。
- 学習の主体は児童にすべきである。そして、協働できる学習環境をつくらねばならない。そこでICTを活用することで、全員の考えを簡単に共有できたり、みんなの考えを参照できたりして、学びの足跡が残ることで、自分の変化に気が付きやすくなったりする。
- 学級経営が大切になってくる。誰とでも関われる力を付けるのが学校であり、席替えを工夫する必要がある。「自由に動いていいよ」では、抵抗がある。「グループやペアで考えましょう」の発言は先生が決めているから自主的に動けない。「いい考えがあるよ」と自らが動きたくなるような声掛けが必要である。

4 感想

- 学習経営ももちろん大切だが、学級経営の大切さを改めて感じた。授業中、休み時間、行事など、誰とでも節度をもって関われる力が、話し合い活動や教え合いなどに活かせるため、学級の雰囲気が必要であることを実感した。
- ICTの活用では、振り返りに活用することが効果的なことが分かった。考え方を共有したり、比較したりすることに有効である。また、学習の板書を写真で残しておくことで、自分が見たいタイミングで前時までの復習ができる。効率性と自分のものにすることのバランスのために、たくさんの経験が必要であり、問題を発見する力、これを解決したいという強い気持ちのもと、膨大な情報を取捨選択し自己決定する力を育てていきたい。
- 研修中、4学年の国語科「生成AIを活用し一つの言葉の連想を行い、一行詩をつくる」では、生成AIのよさと難しさを児童自身が実感するといったように体験してみることもICTを用いる場合には必要なことだと分かった。
- 今後は、どういう児童に育てたいか、しっかりとしたイメージをもち、授業を計画することが大切であると実感した。自分たちで課題を見付け、解決していく児童に育てるために、どのように教師が関わっていくか考えることが必要であり、そのためにも教材研究の充実に努めていきたい。
- 県外の授業見学が初めての経験であったため、授業への取組の工夫や重点項目など様々なことを体験することができた。また、協議会では、全国各地の先生方の意見や大学の教授の考え方など、新たなことを学ぶことができたため、今後も研修に参加し力を付けていきたい。

- 1 派遣期日 令和6年10月31日(木)
- 2 派遣先 学校名 岩沼市立岩沼南小学校
所在地 宮城県岩沼市桑原4丁目4-1
<http://www.iwaminamisho.iwanuma-ed.jp/>

3 研修内容

岩沼南小学校は、リーディングDXスクール協力校として、GIGA 末端の標準仕様に含まれている汎用的なソフトウェアとクラウド環境を活用し、児童の情報活用能力の育成を図りつつ、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実や校務DXに取り組んでいる。

「徹底的なクラウド化」をキーワードとして、まず職員が校務のDX化、クラウド化を進めており、授業のICT化を妨げる職員の抵抗感をなくす取組を学校、教育委員会が連携しながら進めている。



(1) 授業DX【「授業」×「ICT」】

研究テーマ『子供が主体的に学ぶ授業～各教科等における本質的な学びを通して～』

【第5学年 理科「物のとけ方」】

ア 導入：「Kahoot!」による全員参加型の早押し理科クイズ
前時の復習を兼ねて、楽しみながら意欲的に学習に取り組む姿が見られた。

イ デジタル理科ノートの活用
iPad を活用し、文字入力だけでなく写真や動画を撮影したものを貼付していた。学びの記録が写真・動画でも蓄積されており、振り返りも容易だった。教師はその場で評価し、返却していた。

ウ 展開：「Fig Jam」による実験方法、結果の共有

デジタル理科ノートを全員で共有できるようにすることで、よりよい実験のやり方、考え方が共有できていた。

エ 振り返り：Google スプレッドシートによるスタディ・ログの活用

振り返りを全員で共有することで、友だちの考えから自分の考えがより深まっていた。

オ 方法選択型探究学習

①～④を組み合わせながら、児童が受け身ではなく、自分で実験方法やまとめ方を選ぶなど能動的・主体的に学ぶ授業(方法選択型探究授業)を進めていた。

① 『Kahoot!』による全員参加型の早押し理科クイズ

→ 意欲付け、復習、見方・考え方、本時へのつながり

② 「デジタル理科ノートの活用」

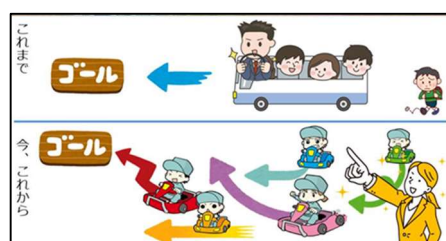
→ 見方・考え方、提出、他者参照、コメント、個に応じた支援、再提出、評価

③ 『Fig Jam』による実験方法、結果の共有

→ 個別最適、協働、他者参照、自由進度、個に応じた支援、共同編集、評価

④ 『Google スプレッドシート』による進捗状況の確認、振り返り

→ 個別最適、蓄積、メタ認知、共有、変容、評価



(2) 校務 DX【「校務」×「ICT」】

ア Google アプリの活用

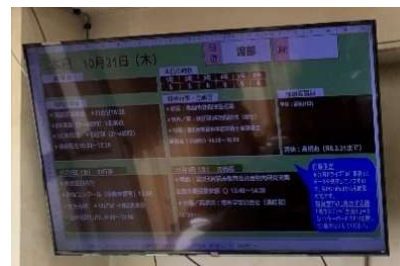
ICT を活用して児童を指導する立場の教員が ICT に抵抗感をもつのではなく、日常の業務で日々活用している。Google ドライブで情報管理、Google チャットで情報共有や連絡、Google スプレッドシートで日課表作成等の仕事をクラウド上で行っている。受付文書は一切印刷せず、データでやりとりしている。必要な場合は、自分で印刷している。

イ ポータルサイトの運用

欠席、遅刻連絡の集約を Google スプレッドシートで共有していた。リアルタイムに更新されるので、校内どこにいても同時に確認することができ、素早い対応が可能になっていた。

ウ 職員室の情報集約

教務主任がホワイトボードに手書きで予定等の情報を書くのではなく、月案、週案、1日の予定がリンクしている Google スプレッドシートで情報を共有しており、負担軽減につながっていた。



(3) 教育委員会との連携【「市教委」×「学校」】

ア ICT 環境の整備

教育委員会が、ICT を活用しやすい環境整備を整えるサポートをしている。一例として、以下の3つがあった。

- ①床材：カーペットの色を意図的に配置して、グループ毎に集まりやすくしている。
- ②イス：縦でも横でも使えるイス。横に倒し、タブレットを置くとテーブルになる。
- ③プロジェクター：電子黒板より大きな画面で指導することができる。天井吊り下げ式。

①床材の意図的配置



②縦にも横にも使えるイス



③大きく映るプロジェクター



イ Google ドライブ、チャットを活用した情報共有

教育委員会からの文書データはドライブに保存してあり、PC、タブレット、スマホ等あらゆる末端からアクセスすることができるようになっている。また、市内各教科部会や市教委と学校の間などにチャットルームが開設してあり、電話ではなく文字やデータでやりとりが残されているので、連絡漏れもなく、共有もしやすい状態になっている。

4 感想

- ・ ICT 化を図ろうとすると、(1)授業 DX で示したような取組をどうするか考えることが多いが、岩沼南小の参観を通して、まず必要なことは「校務の DX 化」であることが分かった。特別高いスキルが必要なものではなく、ある程度のスキルがあれば使いこなせるように、児童の末端に入っているソフト（岩沼南小では、Google 等の標準アプリ）に関しては、教員も日常の中で使用することが大切である。
- ・ 教員自ら ICT を活用して校務を遂行していけば、自ずと ICT 機器を授業内で効果的に活用するスキルが高まったりアイデアが生まれたりするはずである。ハード面は整ってきているが、それを使う教員が ICT 化を避けていては、児童の指導に生かすチャンスを自ら逸してしまうので、失敗を恐れずにどんどん活用し、よりよい方法を共有していきたい。
- ・ 児童は PC ができて当たり前の中を生きるなので、デジタルの良さや正しい活用の仕方を今教える必要がある。教員が ICT を学び、使ってみることが必要であると考えている。

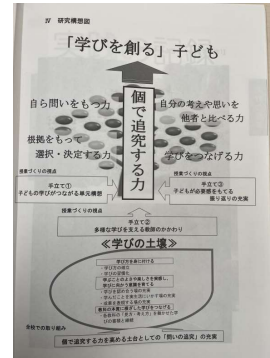
令和6年度 日立市教育研究会先進校等調査派遣研修報告書

日立市立久慈小学校 教諭 柴田 颯人

- 1 派遣期日 令和6年11月22日（金）
- 2 派遣先 学校名 福島県郡山市立金透小学校
所在地 福島県郡山市堂前町5番21号
<http://koriyama.schoolweb.ne.jp/0710028>

3 研修内容

金透小学校は、「学びを創る」子どもの育成を目指し、「個で追求する力」を育てることに着目し、研究を進めている。「個で追求する力」を育てるための手立てとして、「子どもの学びがにつながる单元構想」や「多様な学びを支える教師のかかわり」「子どもが必要感をもてる振り返りの充実」に力を入れて授業づくりに取り組んでいる。また、「個で追求する力」を高める土台として「問いの追究」の充実に全校で取り組み、子どもたちの学びの土壌を整えることに力を入れている。



研究テーマ『学びを創る-「個で追求する力」を育む授業の創造-』

(1)【第5学年 社会 「情報産業とわたしたちの暮らし」 授業参観】

導入では、実際に福島民報が掲載しているネットニュースを確認し、情報が正確であるのかについて考えていた。また、登録者数が約30万人である点にも触れ、「なぜ多くの人が登録をしているのか」という問いを子ども達の言葉から引き出していた。

子ども達は、まず情報の受け手として、これまでの学習内容や生活経験から、問いに対しての自身の考えを伝え合っていた。自身の考えを伝える際には、ICT機器を活用してデータをもとに説明している姿も見られた。受け手としての考えがまとまったところで、教師は「なぜ多くの人に情報を発信しているのか」と問い、情報の送り手としての立場も考えるよう促していた。

情報の受け手と送り手、双方の考えや思いを考えたところで、クラスでまとめた送り手としての考えが正しいのかを確かめるため、授業内で実際に福島新聞社に電話をかけ、情報の送り手として意識していることを聞く時間を設けていた。クラスで話し合っている内容がすぐに確かめられると同時に、話し合いの意義を子どもたちが感じられる授業となっていた。

【第5学年 社会 「情報産業とわたしたちの暮らし」 授業をともに考える会】

授業について考える中で、まとめが情報の「受け手」と「送り手」に分かれて構成されているが、2つの立場をつなぐまとめとなるとより良いものとなったという意見があった。また、ICT機器を授業内で検索ツールとして活用する場面は見られなかったため、社会的視点を考えると、疑問点などを検索する時間が取れると良いという指導助言もあった。しかし、ICT機器を活用することで、子どもたちは根拠を明確にしながら自分の考えを伝えることができおり、自分の考えを伝える上で非常に有効な手段であった。

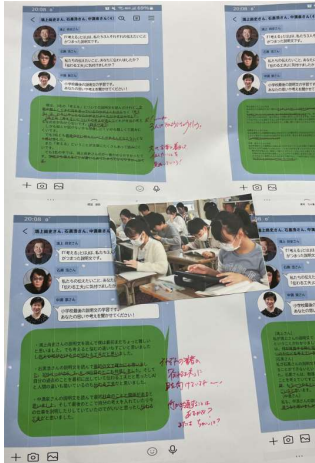
授業のでの子どもからの発言で、「新聞社が出している情報だから正しい」「インターネットの情報は間違いが多い」というものがあった。授業内では深く追求することはできなかったが、情報リテラシーの観点からも、より子どもたちに考えさせなくてはならない点であるという反省が挙げられた。

(2)【第6学年 国語 「筆者の考えを読み取り、テーマについて考えを述べ合おう」

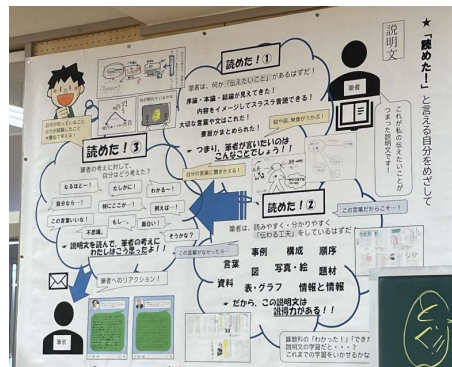
～「考える」ということについて、自分はどう考える？～ 授業参観】

子どもたちの「読めた」という姿を目指し、教材の読み取りや「筆者LINE」といった取り組みを行っていた。「筆者LINE」を通して、筆者の考えに対する疑問から「個別の問い」を引き出していた。

授業の展開では、ロイロノートを活用してミラーリング機能を使い電子黒板に投影して、自分の考えを全体に共有し、根拠が可視化できるようになっていた。



(筆者LINE)



(「読めた」という児童の姿)



(板書構成)

(3)講演 演題「2030年を見据えた これからの授業づくり」

講演者 福島大学人間発達文化学類 准教授 博士 坂本 篤史氏

- ・ICTは「環境」として捉える。→教室環境と同じ位置付けで考える必要がある。
- ・学びの環境を整えて、「子どもを一人にしない」学びを実現させる。
- ・今後の教育で求められることは、「子どもが自ら気付いていく力の育成」「情報を取捨選択する力」「多様性を認める」「日常生活との繋がり」である。
- ・ラーニング・コンパスを持ち、自分で判断し進んでいく子どもの育成が求められている。

4 感想

金透小学校の研究実践を参観し、授業づくりにおいて、子どもが主体的に学ぶ単元構成の必要性を改めて感じる事ができた。教師主導で授業づくりをおこなうのではなく、子どもが自ら追究したいと考える「問い」をもつことができるよう授業づくりをおこなっていきたいと感じた。社会科の学習においては、教科書だけでの指導ではなく、地域人材などを活用することで、子どもたちが実生活と結びつけて内容を理解していくことが大切であるのだと感じた。今回参観した授業では、子どもたちが自分の考えを伝えるツールとして、ICT機器を活用していた。検索するツールとしてだけではなく、ミラーリング機能やマークアップ機能等を活用することで、より分かりやすく自分の考えを伝えることができていた。低学年の頃から、段階的に活用を始めているとのことだったので、成長段階に合わせて根拠を明確に伝えるためのツールとしても取り入れていく必要性を感じた。自分も、今回の参観を通して学んだ指導方法や手段を、今後の指導に生かしていきたいと思う。

1 派遣期日 令和6年8月10日(土)

2 派遣先 学校名 東京学芸大学

所在地 東京都小金井市貫井北町4-1-1 <https://www2.u-gakugei.ac.jp/~kokoro/>

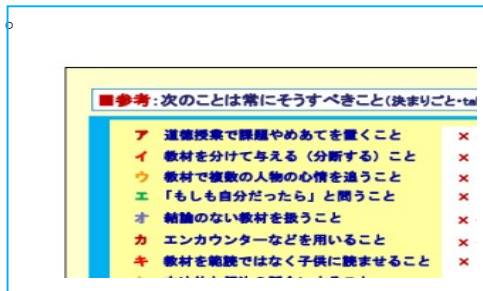
3 研修内容

私は、これまで研究授業や研修会で様々な教科の学習を行ってきた。ただ、道徳に関してはあまり学習する機会がもてていなかった。そのため、この研修会を通して、道徳の授業の進め方や発問の仕方を学べればと思い希望した。研修会のテーマは、「令和に活かす次世代型の道徳授業をつくる」である。その研修会の中で、授業づくりに活用できるものに焦点をあて、3つにまとめて報告する。

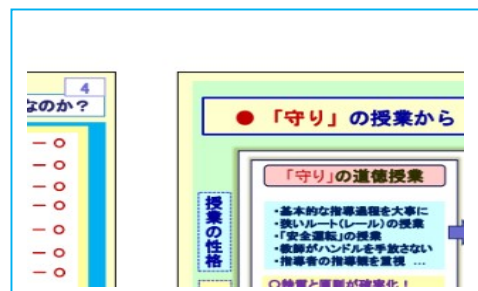
(1) 授業づくり ～次世代に活かす～

① 100%という道徳授業のきまりはない

平成の道徳の授業にはきまりがあった。(資料1) 同じ流れ・やり方で行うので授業が硬直化しがちである。このような授業は、変化の激しい時代を生きる子どもたちには適していない。子どもが問題を自分事と捉え、多様な考えを引き出せるように、攻めの指導(資料2)が大切である。



【資料1 道徳の授業のきまりチェックリスト】



【資料2 攻めの授業】

② ウェルビーイングの観点

ウェルビーイングとは、幸福な状態・持続的な幸福を指す。よくハピネスと類似されるが、ハピネスは一瞬の幸福でウェルビーイングは、持続的な幸福という意味で使われている。この考え方を道徳教育にも生かすことが大切である。

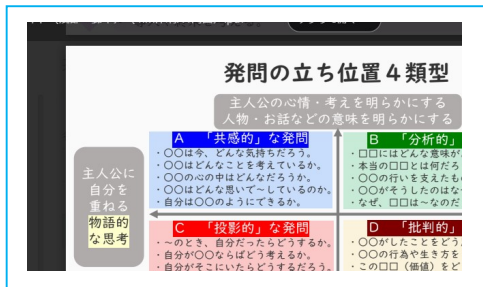
(2) 授業づくり ～問いの作り方～

① 中心発問の作り方の流れ(この流れは一例で、全てこの通りに行う必要はない。)

- ・先入観をもたずに教材文を読む。(内容項目は読まない)
- ・中心発問を考える。(多様な考えが生まれる発問)ねらいを検討する。
⇒教師の視点で学習が意義あるものになっているか整合性を図る。
- ・中心的な発問の前後を考える。

② 発問の立ち位置4類型

発問の型となる指標があり、これを基に適切な中心発問を作ることができる。(資料3)



【資料3 発問の立ち位置4類型】

③ 重層的な発問

子どもの発言から発問を考えることを重層的な発問という。例えば、「改めて共感・納得したものはどれ。」や「この意見とこの意見を比べると。」や「もう少し聞いてみたいものに質問してみよう。」などの問い返しをすることで、深い学びへとつながる。

(3) 授業づくり ～創意工夫～

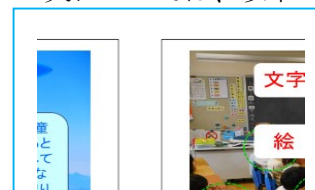
これからの社会の変化を乗り越え、豊かな人生を切り開き、持続可能な社会の創り手となるための資質・能力を引き出すためには、個別最適な学びを実現する必要がある。個別最適な学びを

実現するためには、指導の個別化と学習の個性化の2点を行っていく必要がある。

① 指導の個別化

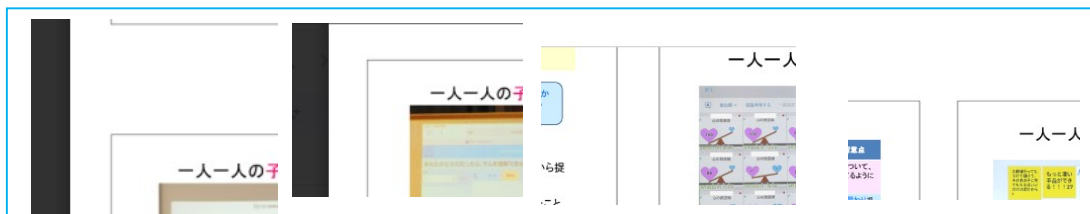
指導の個別化とは、一定の目標を全ての子どもたちが達成することを目指し、個々の子どもたちに応じて異なる方法で学習を進めることである。指導法の工夫については、以下のものがある。

- | | |
|---------------------|-----------|
| ア 教材を提示する工夫 | イ 発問の工夫 |
| ウ 話し合いの工夫 | エ 書く活動の工夫 |
| オ 動作化、役割演技など表現活動の工夫 | |
| カ 板書を生かす工夫 | キ 説話の工夫 |



【資料4 ア教材を提示する工夫】

例えば、アの教材を提示する工夫では、教科書の文字だけでなく、プロジェクターの絵や文字、教師の範読による音声など様々な所から自分で情報を選んで得ることができる。（資料4）このような選択肢を事前に準備することが大切である。また、最近では、一人一台タブレットがある。ワークシートや発言による表現方法のみならず、タブレットを活用すべきである。（資料5）ただあくまで ICT 機器での共有は、対話するためのきっかけである。そのため、「なぜそう思ったのか。」「どうしてこういう結果なのか。」を問い返し、深めていくことが大切である。



【資料5 ICT 機器を活用した子どもの心の可視化の方法】

② 学習の個性化

学習の個性化とは、個々の子どもたちの興味や関心等に応じて異なる目標に向けて、学習を深め広げることがを意味している。道徳科の授業だけでこれを実現することは、難しい。そのため、教育活動全体で行っていく必要がある。例えば、給食の時間に「いただきます。」と号令する時間がある。その時に、だれに対して「いただきます。」をするのか、子どもに決めさせる。食べ物に対してであれば、「自然愛護」となり、給食を作っている人に対してであれば「感謝」になり、友達に対してであれば「友情」など、一人一人違った内容項目の価値を持つことができる。給食以外にも、特別活動や清掃活動など様々な場面で意識していくことが大切である。

4 感想

（1）授業づくり ～次世代に活かす～

これから先、予測困難な時代が訪れる中で、授業づくりも今までの通りに行うのではなく、社会の変化に対応できるような授業改善が必要だと思った。私は、子どもの発言を板書して、次に用意していた発問で授業を流していた。そうではなく、子どもの発言から、問い返しをして、他者につなげたり、みんなで考えたりして、深めていける授業にチャレンジしていきたい。また、児童の考えをさらに深めていくときには、ウェルビーイングの視点から「長期的に考えるとどうすればいい？」や「自分だけでなくみんながハッピーになるためにはどういう方法があるかな？」など発問して、他者とよりよく生きていける力を身に付けさせていきたい。

（2）授業づくり ～問いの作り方～

今まで、教科書通りの発問を準備し、問いに関して考えたことがなかった。しかし今回の研修を通して、教師が子どもの実態を把握した上で、身に付けさせたいことを考えることが、主体的な学びに繋がるのだと感じた。多様な考えが出てくるようにしたり、2者対立になったりする問いにすることで、多面的・多角的に物事を考えられる力が育っていくと思った。

（3）授業づくり ～創意工夫～

教師の指導方法の工夫によって、「分かりやすい」と感じる子どもが増えるのだと改めて思った。視覚優位の子、聴覚優位な子、発言が苦手な子、文字でなら考えが書ける子など、教室には様々な特性の子どもがいる。その子ども一人一人が「分かりやすい」と思えるよう、選択肢を広げ、自分の判断で活動できる授業を作っていきたい。様々な指導の工夫で、課題を達成できる子を増やすことが教師の最大の仕事であり、魅力であると感じた。

1 派遣期日 令和6年7月5日（金）～ 7月6日（土）

2 派遣先 学校名 千葉大学教育学部附属小学校
所在地 千葉県千葉市稲毛区弥生町1-3-3
<http://www.el.chiba-u.jp>

3 研修内容

千葉大学教育学部附属小学校における令和6年度公開研究会の視察をしてきた。テーマは「子どもが没頭する授業」（3年次）である。私は算数専科担当として、自らの授業力向上のため、主に算数の授業を見学してきた。算数科主題は「活用をめざす算数科学習～数学的な見方・考え方の検証から生まれる学び～」である。研修内容は以下の通りである。

7月5日（金）

・公開授業① 第2学年「三角形と四角形」

この授業の視点は「点構成によって作図することにより、いろいろな図形を作り出すことができるか。」であった。主な授業展開は、点や枠のないところに任意の点を選択し、いろいろな図形を作図することであった。児童からはいろいろな図形の発想が生まれ、それらの図形を弁別していった。一般的な三角形や四角形は弁別できていたが、凹四角形になると三角形、四角形、どちらでもないという考えに分かれた。その後、多くの児童から様々な意見が出て、とても活発な話し合いとなった。最終的には三角形、四角形の定義を基に弁別することでまとめ、児童は凹四角形のような複雑な図形でも、自信をもって判別できるようになった。

・公開授業② 第3学年「わり算」

この授業の視点は「つくったわり算の問題について友達と確認し合うことは、わり算の意味を特定することにつながるのか。」であった。主な授業展開は、等分除や包分除の意味を特定できる力を高めるために問題づくりに取り組むことであった。2枚の日常場面のイラストから見出した算数の問題を、図、数、式、ブロックなどの具体物を用いながら、5ページのわり算ブックに個人でまとめていった。その後、ペアや同じ題材で問題を作った仲間同士でわり算ブックを見せ合う中で、自分の図や言葉を使ってわり算の意味を積極的に話したり、ブロック操作で等分除と包分除の違いを確認したりしていた。また、式や商の求め方に共通点があるかを考えることで、等分除と包分除のわり算を統合的に捉えることができた。

7月6日（土）

・公開授業③ 第4学年「割合」

この授業の視点は「数量間のきまりを意識することで、倍による比較の妥当性に気付くだろうか。」であった。主な授業展開は、平ゴムを伸ばしたときにもとの長さからどのくらい伸びたかを考えることを通して、二つの数量間のきまりを実感し、割合で比べるよさを実感することであった。これまでの学習から、もとの長さが異なる平ゴムの場合、切って長さをそろえてから伸ばして確かめる操作的活動を行った。その後、伸びた長さを表にまとめることで、倍の見方で考えることができることに気付かせた。そのことで、伸ばした長さがもとの長さの何倍になるのを調べれば、わざわざ切らなくてもよいという思考にたどり着くことができた。

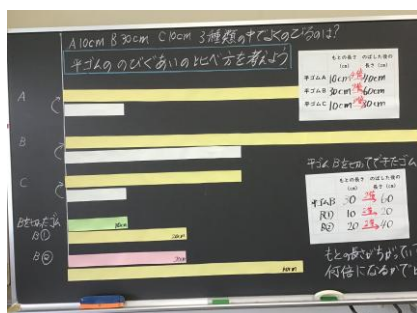
・公開授業④ 第6学年「円の面積」

この授業の視点は「円の面積を精度を高めながら挟み込んでいくことは、円の面積が半径を一辺とする正方形の面積の3.14倍になっていることの気付きにつながるか。」であった。主な授業展開は、半径10cmの四分円をおうぎ形に等分割し、内接する三角形と外接する三角形で挟み込んで面積を見積もっていくことであった。個別で1つの三角形で考えることから始まったが、余分な面積が多く範囲が広いため、さらに精度を高める方法を考える意

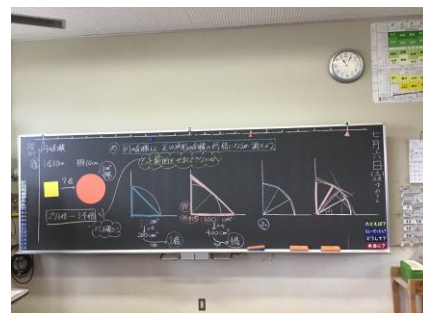
見が出始めた。そのためには、三角形をさらに小さく分けて考えなければいけないことに気付くことができた。



授業②のわり算ブックの作り方



授業③の板書



授業④の板書

4 感想

・公開授業① 第2学年「三角形と四角形」

この授業では、改めて ICT の必要性を感じることができた。点構成によって作図する際に、デジタル教材「GeoGebra」という Web アプリを使用していた。そのアプリは1点を先に固定し、残りの2点・3点を決めて、線を引くだけで自動的に三角形や四角形を作成することができる。よって児童たちは個人のタブレットを活用して、没頭して作図に取り組んだり、凹三角形などの多様な考えを出したりすることができた。また、このアプリでは個人で作成した図形を教員が集約し、全体ですぐに共有することもできた。よって児童が考えた図形のモニター提示が素早くできたり、弁別する際に活発な意見が出る手助けになったりしていた。今後機会があれば関数や図形の単元を中心に、このアプリを活用していきたいと感じた。

・公開授業② 第3学年「わり算」

この授業では、わり算ブックにとっても魅力を感じることができた。等分除と包分除で色分けしたり、ページごとで題・図・文章・式・商と類別したりして作成させていた。また、黒板の脇にわり算ブックの図の作り方（ドット図、アレイ図など）を掲示していたので、個人で作成する際はやることが明確になり、児童達は没頭して取り組むことができていた。さらに、ペアで見せ合う場面では友達が作成したわり算ブックを、ブロックなどの具体物で等分除と包分除を表現したり、式が同じなどの共通点を見つけたりするなど、活発に活動する姿がみられた。これらのことから、わり算ブックの作成は、今後に大切になってくる題・式・図などを相互に関連付けて考える力の育成になると感じ、機会があれば活用していきたいと感じた。

・公開授業③ 第4学年「割合」

この授業では、操作的活動から生まれる新たな気付きの重要性について感じる事ができた。「どのばねが一番伸びるか」の問いに、最初に立てた予想通りになるかどうか、同じ長さに切って確かめることを没頭して行っていた。その後の話し合いなどにより、児童から結果を表にまとめる提案がなされた。表にしたことにより、倍にして比べることができると気付くことができた。振り返りには、操作活動もよいが、倍にして比べる有用性やよさに気付くことができたというような記述も見られたことから、自分も探求的な学びを大切にしたい授業を実施していきたいと感じた。

・公開授業④ 第6学年「円の面積」

この授業では、教師の短く的確な指示・発問の重要性について感じる事ができた。授業の開始時には、前時の内容を児童から引き出させ、本時の内容に入っていた。児童が発言する内容で板書が構成されていき、1つの三角形では余分な面積が多く範囲が広がってしまった。そこでの教師の発問から、さらに精度を高めることを児童達は自然と考え始め、最初の考えと比較できる板書が作られていった。最後に今後重要となってくる面積の関係の一般化を促す短い発問が教師からなされると、学習した内容から結論や根拠を懸命に導き出そうとする児童の反応が見られ、常に授業に没頭していたと感じた。自分も短く的確な指示・発問により、児童の発言や活動をする時間を多くし、主体的な学びとなる授業を展開していきたいと感じた。

1 派遣期日 令和6年10月4日（金）

2 派遣先 横浜国立大付属 鎌倉小学校
所在地 〒248-0005 神奈川県鎌倉市雪ノ下 3-5-10
<https://fuzokukamakura.ynu.ac.jp/research>

3 研修内容

第4学年総合的な学習の時間と第5学年外国語の参観、教科協議会に参加した。

(1) 第4学年 LIFE（総合）

LIFE（総合）の単元名は、「お金よりリアリティー キャリア教育 ～未来の仕事について考える～」である。キャリア教育をもとに未来を見据えた新しい仕事について探究していく児童の姿を目的とし、お金と労働の対価について考えるとしている。複線型の授業を通し、各教科の見方・考え方と総合的な学習の時間との往還から社会につながる資質・能力を考えしていく。今回の学習では、学級内でチームを作り、仕事を通してお金を得る方法を考え、仕事の企画、製作段階の様子を確認した。商品をデザインし、材料調達、商品製作を行い、販売まで行うチームや、イベントの企画を行うチーム等があり、様々な仕事に目を向けていた。商品製作では、使用済みの端切れや牛乳パック等のごみのリサイクルや、3DCAD で制作した商品を3Dプリンタで出力する様子がうかがえた。イベント企画では、イベント（ポケモンカード大会）の宣伝のためのポスター制作をCANVAで行っていた。ICT機器の活用により、データを各自で共有し皆が同じものを見て作業することができていた。前時の授業では、ゲストティーチャーとして、ポケモンカードの四天王である「ササキヒロム」さんを招いて講話いただいたことを話していた。担任の先生は、児童の「やりたい」という気持ちを大切にしながら、主体的に取り組むことができるように進めていた。この単元の最後について児童に尋ねると、実際に企画して商品化したものを売り出す、お店ごっこをすると話しており、目的が明確に示されていることで計画的に進めることができていた。

(2) 第5学年 外国語活動

外国語活動の単元名は、「Unit8 This is my town.」である。自分の町の魅力を伝えるために、パンフレットを作って紹介する活動が設定されている。こういった学習を通して、1つの単元の中で聞くこと、読むこと、話すこと、書くことという複数の領域を扱う。今回の学習では、「You can ～.」「… have ～.」という表現を使用し、場所について紹介する活動を行った。授業の導入として、英単語カードゲームを行っていた。教材付属のネイティブの音声データを聞いてのカルタ、ババ抜きゲームである。次に、教師が「Where is this?」という問いかけをしながら、場所を表す写真を示すクイズを行った。場所の写真は教室、自分の学校、修学旅行先といった、児童になじみのある場所を使用した。さらに、児童にとってなじみのある2種類のお菓子の写真を見せて、「Which do you like better?」という問いかけを行った。まずは、教師が問いへの回答例として自分の好みを伝え、続いて児童に好みを尋ね、挙手で回答した。その後、児童にペアを組ませてやり取りをした。そして、事前に作成した、自分たちに関わりのある場所を紹介するスライドを用いて、友達にその魅力を英語で紹介する練習に取り組んだ。発表の途中で、良い事例として、自分の感想や気持ちがあると説得力が増すということを紹介していた。交流の中では、友達の発表を聞いて良かった点を積極的に自分の発表に取り入れるよう指導があった。その事例を踏まえ、さらにクラス全体で交流を行い、最終的に代表者数人による、全体への発表があった。今回は留学生（大学生）を招いており、日本語を母語としない方に英語を利用して自分の考えを伝えるという経験をした。留学生からも前向きな感想をもらい、次時の活動に繋がる内容となった。

(3) 教科協議会（外国語）

小中一貫して、「自分の言葉で語る力」というテーマで授業を行っている。「自分の言葉で

語る力」というテーマに対し、他者を意識して考えることを指導している。英語科の目標として、外国語を使用する目的や場面、状況を設定すること、インプット・アウトプット活動を大切にしていることが紹介された。

研究授業を行った佐宗先生の自評では、児童共通の思い入れのある場所の紹介をテーマとして取り上げることで、親近感をもって取り組めるよう試みたことだった。題材としては、学校がある鎌倉市に限定して紹介するのではなく、宿泊学習で訪れた群馬県みなかみ町についても取り上げた。このように実際に体験したことの中から児童が魅力だと感じたことを選び取り、紹介していくことができる学習の機会をもちたいとのことだった。この単元の最後には、4年生の児童への発表と横浜国立大学の留学生へのビデオメッセージという形で自分たちの体験を通して魅力の紹介を行う予定である。今回の授業では、ゲストティーチャーとして横浜国立大学の留学生を招いて、児童が紹介し合うところを見てもらい、最後に感想を話してもらっている。それは、児童の英語は十分に通用するという内容で、自信に繋がるものになったと話していた。その後、参加者同士の協議が行われ、次の課題が挙げられた。小学校では学校によって外国語を教える教師のレベルが異なり、ALT の来校する回数にも差がある。外国語専科が教える学校もあれば担任が教える学校もあり、担任が教えている場合、ALT 不在時に外国語を教えることに苦労しているという話題が出た。

神奈川県教育委員会指導主事から、学習指導要領には外国語の背景にある文化を理解しコミュニケーションを行うことが大切であり、具体的には会話する相手を意識することが大切であるとのことだった。また、児童の発表に対するフィードバックを与えることも重要であるとのことだった。教師という職業は生成 AI に取って代わられると言われており、単なる技術の伝承は AI には敵わないかもしれないが、相手を思いやる心の育成は AI にはできないことであり、これが教師としての本分と考えると話があった。

横浜国立大学教育学部教授の講話では、相手に伝えよう、相手を理解しよう、というリスpektするマインドが必要であり、異文化理解のマインドにも繋がるという内容だった。原稿を読むのではなく、相手を見て、伝えよう、理解しよう、という姿勢を示すことからコミュニケーションが始まる。今回の授業では、伝える相手に目を向けて、紹介することができるとなおよかったと話していた。また、多様な表現を引き出すには、インプット (teacher talk) を与え、意識的に使わせたり、フィードバックしたものを書き直しさせたりすることが重要であるとのことだった。

4 感想

鎌倉小学校の児童は、一人一人が自分の考えをもち、その考えを説明したりプレゼンテーションソフトにまとめたりすることが当然のようにできていることに驚かされた。どの児童も主体的に取り組む姿が見られ、素晴らしいと感じた。教師の指示を待ってから行動するのではなく、自ら考えて行動する児童がほとんどであった。基本的なルールがしっかりと身に付いているため、自由度が高い取組もできると感じた。そして、何より学校や教師が児童の考えを尊重しているところが児童の意識の高さや成長に大きく関わっていると感じた。LIFE の時間にイベント (ポケモンカード大会) の宣伝のためのポスター制作を行っているチームにその取組のきっかけを聞くと、以前ポケモンカード大会で「ササキヒロム」さんに出会い、児童の一人がダイレクトメッセージを送ったことで学校での講話が実現し、興味をもったとのことだった。児童の望みを実現するために受け入れた学校側の姿勢にも感銘を受けた。児童にリアリティーをもたせることのできる質の高い取組だと思った。児童は、自分たちがやりたいと思ったことを実現するために試行錯誤しながら進めている。総合的な学習の時間の在り方は、児童が主体的に取り組むことが重要であると改めて感じた。また、外国語では、大学の留学生や4年生に向けて紹介するというゴールの設定が素晴らしいと思った。目的が明確で、相手意識をもって取り組むことができ、テーマも自己関与度が高いものになっている。児童にとって、活動の意味を理解して取り組むことは大切である。小中一貫して、「自分の言葉で語る力」というテーマで授業を行っているという紹介があったが、その通りであった。子どもたちが英語で楽しそうに話している姿から十分に伝わってきた。

- 1 派遣期日 令和6年11月23日(土)
- 2 派遣先 大洗町立南小学校・南中学校
茨城県東茨城郡大洗町大貫町1212-4
<https://www.minami-j.oarai.ed.jp>

3 研修内容

5・6年生総合的な学習の授業参観、講演会、分科会に参加した

令和6年度 大洗町立南小学校・中学校 第19回教育実践研究発表会

研究主題 「対話」から新たな価値を創る

—教科や学校の枠を越えた学びのデザインを通して—

(1) 研究主題について[大洗南小学校・中学校研究紀要より]

令和5年度から第Ⅶステージとして『「対話」から新たな価値を創る』を研究主題としてスタートした。副主題を「三つの対話（課題・仲間・自分）を土台に、「教科等横断的な対話」や「地域・学校外の機関との対話」を意識し、一つの教科の中での問題解決だけでなく、教科や学校の枠を越えた「問い」「単元構成」「場の工夫」「協働的な学び」「学校評価」など、教科の特性や児童生徒の実態に応じたデザインを提案し、新たな価値を創るための学びのデザインの有効性について検証している。

中学校では、総合的な学習の時間において、縦割り班での学習をスタートし、生徒たちが考えた大洗町の課題ごとに四つのプロジェクトを発足させた。問題解決を図っていくために、町役場や地元の施設へ生徒が連絡を取りながら、1年間のイベントや活動の計画を立て実践してきた。

小学校では、STEAM教育や教科等横断的なカリキュラムマネジメントの視点を意識して授業実践を行っている。また、生活科では地域の人との交流会や町探検に、総合的な学習の時間には、大洗町の「文化」「観光・産業」「歴史」「自然」の学習に各学年で取り組み、中学校へのつながりを意識した学びを推進している。

(2) 公開授業

今年度公開された授業は、小学校では5・6年生の総合的な学習の時間、中学校では、国語科、数学科、美術科、総合的な学習の時間だった。今回参観した小学校の総合的な学習の時間では、どちらの学年も「20年後の大洗町」をテーマに授業が展開された。

5年生の授業では、『大好き大洗人・もの～「わたしたちの20年後の大洗町マップ」をつくろう～』を題材に、平らな土地、高い土地、海岸周辺の3つの地区を6つのグループに分け、それぞれのプロジェクトを完成するため、「地域の魅力を生かした町づくりを進める」という目的意識をもって、児童の興味・関心をもとに産業について話し合い活動が行われた。話し合い活動では、ジグソー学習が用いられていた。ジグソー学習とは、学習者同士が協力し合い、教え合いながら学習を進めていくアクティブラーニングの実践法の一つである。他のプロジェクトとの意見交換の場としてジグソー学習を取り入れることで、見方や考え方を広げ、新たな価値や気づきを得て、自らのプロジェクトに考えを付け加えることができていた。また、プロジェクト進行計画に付箋を貼りながら、「聞きメーター」という掲示物をもとに話し合い活動が行われていた。「聞きメーター」は、自分の聞き方がメーターのどこに該当するかを把握することで、相手の意見を更に引き出すことができる工夫がされていた。掲示物があることで、児童一人一人が手順を追いながら、自分の考えに自信をもって発表することができていた。

6年生の授業では『20年後も住みたいまち「大洗」～まちづくり参画プロジェクト～』を題材に地域の方をゲストティーチャーに招き、大洗町のもつ魅力や、大洗町が抱えている様々な課題について、ゲストティーチャーと「よりよい大洗町を創造していく提案（大

洗町ブラッシュアッププラン)」をゴールに検討会を通して、対話が行われた。児童はタブレットを活用し、プレゼンテーションを行った。自分たちの提案を考える過程で、ゲストティーチャーとの対話は、自分たちとの繋がりをより明確にすることができ、自分事として捉えることができていた。また、ゲストティーチャーをローテーションすることで、様々な視点から考えを広げることができていた。今回のゲストティーチャーは、大洗町が設置している「大洗・うみまちコミュニティースクール」を介して派遣されていた。対話から生じた気付きについて付箋を活用し、ワークシートにまとめ、改善点や明確になった点をグループで話し合うことで、考えを整理することができていた。

(3) 講演会

講演会では「ひらかれた、つなぎあう学びーG I G Aの先にあるリアルをめざしてー」を題材に早稲田大学名誉教授小林宏己先生から、これからの学びについて講話があった。コロナ禍を経て、授業はA I、I C T、オンライン化されるなど高度化され、授業の可能性を広げてきた。しかし、I C Tの活用を前提に、対面授業の質的向上が一層求められている。授業は構築型、教授型、構造型の三つに分類され、教師伝授型の授業だけではなく、学習者中心型の授業である構造型授業が重要であり、今後増えていって欲しいとの話があった。

今回の公開授業において、ゲストティーチャーを招くことで、共通体験を通じ、情報だけではなく人柄に触れ、一方向の話だけでなく対話を行うことで、人間的交流が生まれることが学びを深めることに繋がった。人間味のある学びと現実味が増す学びこそが、G I G Aの先にあるリアルであり、構築型授業であるということを実感した。また、「型」(聴型・話型／模範・手本／ワークシートなど)を示しながら真似る指導は、有効な指導法ではあるが、多くは形骸化されてしまう。教師はその「型」を必要としなくなるタイミングを見逃さないようにすることが重要である。「型やモデル」の掲示物よりも、教師の言動と見通すことが重要である。そのためにも、教師がモデルとなって児童・生徒に接することが大切であることを再認識した。

(4) 分科会

大洗町立南小学校・中学校では、校内授業研究及び授業公開での分科会等において、以前からワークショップ型の研究協議が行われている。今回参加した総合的な学習の時間の分科会においても、ワークショップ型で研究協議が行われた。ワークシートの中央に授業者の目指す「学びのデザイン」が記載され、色分けをした付箋を使いながら、効果があった手立てや改善すべき課題について意見交換が行われた。少人数のグループで協議が行われるため、活発な意見交換をすることができた。その中で、自分たちの住む大洗町を題材に挙げたことで、児童にとって自分事として捉えることができたことが良かったという意見が多くでた。また、いつも接している家族や友達、教師とは違う大人をゲストティーチャーに招くことで、緊張感と真剣味が増し、よい「対話」が生まれていたという意見がでた。課題として、グループの編成の仕方や時数の問題、発問の仕方や課題の設定、特別な支援を要する児童への手立てが必要である等の意見が挙げられた。また、日頃からI C Tの有効な活用法についても話題に挙がっていた。

4 感想

大洗町立南小学校では、これまで自分たちが調べてきたことや考えたこと、授業や夏休みの宿題として取り組んできたことが、壁やホワイトボードに軌跡として残されていた。また、空間やスペースを有効的に活用することで、他のグループの声を気にせずに「対話」ができる工夫や、学年に応じて掲示物の工夫等「対話」を繋げることの手立てがされていた。今回の研修会を通して、主体的に学ぶには、「対話」を大切にすることが重要だと改めて学んだ。今後、自分自身も「対話」を活かし繋げることを意識した指導を行っていきたい。

- 1 派遣期日 令和6年6月8日（土）～ 6月9日（日）
- 2 派遣先 学校名（会場名）筑波大学附属小学校
所在地 112-0012 東京都文京区大塚3-29-1
<http://www.elementary-s.tsukuba.ac.jp/>

3 研修内容

筑波大附属小では、情報があふれ、多様な価値観の時代に、「異質なものを受け入れ尊重する心と情報に流されず、自分らしく考えることができる子どもを育てる」を目標に、研究主題「違いを編む『知性』」（1年次）について教育活動を進めている。今回、国語科弥延先生の授業参観（オンライン含む）と道徳科研究部の分科会に参加した。国語科において研究主題である「違い」を、「身体・感覚」、「心情」、「関係」、「論理」、「表現」、「価値」という観点からとらえ分析し、「方法に関する知性」「みえないものをみようとする力」「目的とする知性」と位置付けていた。

国語科では特に「ことば」の学びについてを新しい主題としていた。矢延先生は「読後感」を起点とした授業を示し、子ども同士の意見交流を通して、相手の意見について共感的にとらえることや、自分の読後感と比較することで得られる「知性」が違いを編んでいると考え、また、教師の「問い返し」が、授業の中での「価値づけ」や「考えの整理」になるとしていた。読後感を比較することで、主題にせまるための方法に関する「知性」としての物語の中の登場人物の「関係」に着目できた。国語科研究部では「知性」を次のように捉えている。「方法に関する『知性』は、「論理」や「表現」、「関係」などを観点とした読み方を発揮すること」「目的とする『知性』は、言葉のもつよさを見ようとする力である」とし、それらの知性が発揮された先に豊かな言語生活へつながってゆくとした。今回の授業では「一つの花」の中で戦争前と戦争後の場面が大きく変わるところから、「一つだけの花（コスモス）」と「コスモスのトンネル」という対比的に書かれているところを扱い、そこから題名の意味を考えさせていくという活動をした。具体的には物語を読んで最も心に残ったことを短くまとめて書くことで「ことば」を使った言語活動を広げていくものだった。

分科会では、道徳の授業の在り方にふれ、「編むべき違い」とは何かを考えるとところから始まった。道徳の授業では、「そんなことを言うてはいけない」という無意識のバイアスがかかっていることがあるという。違いを出すこと自体はばかられるようなプレッシャーを感じる子どもたちが、初めから議論の余地がないと感じるのは当然のことである。それは道徳の授業において今年度の研究主題である「違いを編む」ことの難しさであるとともに必要性でもある。「違い」と一言と言ってもそれは自己と他者の違いもあるが、授業を通して自分自身の考え方が変わる、つまり45分前の自分とは違う自分がいるという認識である。着目したいのは「本音を言わせる」という展開。正解ではなく「人間の弱さ」に焦点を当て、理想に対して現実を見つめさせる授業にすることである。道徳科の授業において「編むべき違い」とは、固定化され思考停止に陥っている価値観にくさびを打ちこみ、いったん崩してから再構築するための必要な多様な考え方であるといえる。ある子どものノートには「道徳は人生の土台だ。」とあった。道徳教育は単に教科としての存在ではなく、人間性にストレートにアプローチできる学問であるとしている。また、その学びを受ける子どもの土台がどれだけ肥沃に耕され育っているかで学びの成果が異なってくることは明らかなので、様々な生活体験を実り多いものとしていくことが大切であるといえる。道徳において「違いを編む」ことは目的ではなく、手段である。手段である「違い」を否定的・悲観的にとらえず肯定的・前向きにとらえることで、新たな世界を自らの力で切り拓いていく教科なのだと実感した。また、自分の考え方とは違うものや別の見方に触れることによって、自分自身の視野が広がり、今まで気づくことができなかった世界に思いをはせることができるようになる。授業の中で

は「ちょっと待てよ、もっと考えたい」という意識が、思考を「編む」スタートラインに立つために欠かすことのできない下準備である。「道徳的には」から始まっても、友だちとの対話を通して意見交流が行われ「編む」活動が生まれる。ものごとの本質にせまる気づきを得る思考は自分たちで実際に考え獲得させなければならない。知識として与えるものではないからだ。わたしたちも、近くの先生方との交流を通して、自分自身の「違い」に対する認識を再確認することができた。

4 感想

学校の県外の研修は初めてだったので、どんな子どもたちと会えるのか緊張半分楽しみ半分だったが、授業参観になれている子どもたちは、笑顔で親しみを込めて接してくれた。授業が始まると、先生の話に耳を傾け、自分の意見をのびのびと発言している様子が印象的だった。矢延先生の発問は柔らかくどんな意見もしっかりと受け止めてくれる余裕を感じた。授業自体も本時の内容を進みながら、「まだ当ててない人？」「言いたいことある人、いない？」など、発言に消極的な子どもに対する配慮も各所に見られた。授業の中で、流れが変わる（変える？）タイミングの子どものつぶやきを逃さず拾い、問い返していくところは見ていて（ああ、こんなふうに授業を作っていくんだな）と感心してしまった。全国から小学校の先生方が集まる、筑波大附属小の授業をライブで見る価値を改めて感じた。

道徳の分科会では、今まで道徳の授業をしながら、なんとなくはっきりしない気持ちのままだったのが、少しずつ晴れていくような感じがした。道徳科で「違いを編む『知性』」とどう向き合うか、興味深いところだったが、加藤先生の話をお聴くうちに私自身の道徳に対する固定概念が崩れていくようだった。「こうでなければ」「この答えに近づこう」と日々の学習に追われる毎日の中、道徳の学習はこの学期、この学習という短いスパンではないことも再認識させられた思いだった。「違い」を認識することは、子どもたちをより深く理解することなのだと知ることができた。

- 1 派遣期日 令和6年8月9日（金）
- 2 派遣先 学校名（会場名）埼玉会館 大ホール
所在地埼玉県さいたま市浦和区高砂3丁目1-4
- 3 研修内容（研究会タイムテーブル）
 - 9:30～ 受付開始
 - 10:00～10:45 開会式、大会オリエンテーション
 - 10:45～11:45 文部科学省行政説明
 - 11:45～13:00 休憩
 - 13:00～14:45 全体研究会Ⅰ本部研究発表
 - 14:45～15:00 休憩
 - 15:00～16:30 全体研究会Ⅱシンポジウム
 - 16:30～16:50 閉会式、引継式
- 4 感想
 - (1) 「文部科学行政をめぐる最近の情勢」について、文部科学省初等中等教育局学習基盤審議官森孝之様より大きく4つのテーマをお話頂きました。その中でも3つのテーマが特に印象に残りました。
 - ①GIGAスクール構想の充実
デジタル教科書の事例集・動画等について、文部科学省でデジタル教科書の効果的な活用に関する事例集や動画等を作成しており、HPにて公表するなど、かなり管理職及びICT担当の先生が職場内での研修を行う際に活用できるものになっている。
 - ②教師を取り巻く環境整備
働き方改革についてのお話でした。業務の明確化・適正化に向けて、学校が担ってきた業務について大きく3つへ仕分けを実施する事で、何を重視し、重要なリソース（資源・財源）である「時間」をどのように配分するか決断がもとめられている。私自身も日頃から教師の業務だが、「負担軽減が可能な業務は？」と意識してきました。学校ごとに仕事ののりしろの部分はあるかと思いますが、教職員が協働する事で全体の負担軽減につながると感じました。
 - ③学校事務の共同実施
平成29年3月に地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部改正により「共同学校事務室」を制度化し、事務の効率化などを推進。それによって期待される効果として事務を共同処理することにより、学校間の事務の標準化、教材などの共同購入による調達コストの削減、OJTの実施による事務職員の育成及び資質の向上など、事務処理の更なる効率化及び資質の向上が実現されると期待されています。共同実施の成果を少なからず、改めて実感しました。
 - (2) 全体研究会Ⅰ
研究発表では、従事（つかさどる職）として主体的に校務運営に参画する事を柱に教育行政職に適応した行動の必要性を感じました。①現状の課題である会議への関わり参画について、7割以上が関わっていない現状を理解しました。②学びと実践としていくつかのキーワードがあり、まず、概念化として戦略的要素、領域を広げる、専門性を発揮する。次に意識改革、周囲の理解として教育と行政を繋げる連携を推進す

る。次に頭を整理という事で継続的に学び続ける。最後に知識や理解を深めるという事で耳を傾ける事の大切さをお話されました。また、事務職員としてできる事という点から、具体的な電話対応や徴収金業務で何に気をつけているか。電話対応では誰に、どのように伝えるかを意識すること。徴収金関係では、決定するつもりで事務から校長へ提案すること。その際、独りよがり（自己満足）になる事のないよう周囲を巻き込みながら対話する事が大切との事でした。職員のエンゲージメント（約束・契約）という点からは、心理的安全性を確保する事。管理職や教員との意識や認識の違いによる対立は事務を成長させるとの事でした。事務職の関わりが大切であることを感じました。

（３）全体研究会Ⅱ

シンポジウムにおける愛知教育大学教授風岡 治 先生のお話では、「社会に開かれた教育課程」について、「60点でも夢のある取り組みを」とお話しになりました。

埼玉県戸田市教育委員会の話の中では、「経験と勘と気合い（3K）」ではなく「客観的な根拠」を元に職務に専念する重要性を強調されていました。また、「データは21世紀の石油」。情報化社会の日進月歩を感じました。

シンポジウムの最後に風岡先生の好きな言葉を私たちへ向けて贈ってくださいました。

「夢なき者に理想なし 理想なき者に計画なし 計画なき者に実行なし 実行なき者に成功なし 故に夢なき者に成功なし」

私は、この大会を通して事務職員としての資質向上に何が必要かを教えてもらう事ができました。学校へ戻りましたらこの経験を先生方へ還元していきたいと思います。